

Green Letter



No.45
年1回発行
2023.12

グリーンレター No.45

The 40th Anniversary

FGF
40th
ANNIVERSARY

富士フィルム・グリーンファンド 40周年を迎えて

ネイチャーポジティブ
実現のために
私たちができること



富士フィルム・グリーンファンド (FGF) とは

公益信託富士フィルム・グリーンファンド (FGF) は

富士フィルムホールディングス(旧 富士写真フィルム)株式会社が創立50周年を機に新しい分野での社会還元を志し、自然環境の保全・育成のための基金拠出を決意し、1983年に設立されたものです。民間企業による、自然保護をテーマとした公益信託としては日本で最初に設立されたもので、この40年間に、自然環境の保全・育成に関する活動や研究に対して数多くの助成や支援を行い、成果を上げてきました。



●概要

設立年月日 1983年10月12日
委託者 富士フィルムホールディングス株式会社
受託者 三井住友信託銀行株式会社
受託財産 1,000百万円

●事業内容

- FGFは4つの事業を進めています。
①未来のための森づくり
②緑のための支援事業
③緑とふれあいの活動助成
④緑の保全と活用の研究助成
*現在、本公益信託の事業は、日本国内を対象に行ってています。

Fujifilm Green Fund is the very first charitable trust in Japan which was established by a private enterprise for the purpose of nature conservation. For the last 40 years since its establishment, the Fund has been applied toward a number of successful programs for support of various activities and research works concerning nature conservation.

●OUTLINE

Date of establishment : October 12, 1983
Trustor : FUJIFILM Holdings Corporation
Trustee : The Sumitomo Mitsui Trust & Banking Co., Ltd.
Fund : Japanese Yen 1,000,000,000

●ACTIVITIES

- Creating opportunities for exchange between people and green environment
- Promoting communication between concerned people in support of green environment
- Supporting activities for conservation of green environment
- Supporting research works for conserving and fostering green environment

* Currently, the fund is applied to domestic activities only.

鞍馬の火祭 大小さまざまな松明が街道を行き交う

編集後記

今年、富士フィルム・グリーンファンド (FGF) は設立から40年の節目を迎えた。「自然の消失や悪化を止め、さらに流れを止めさせ、自然を回復の軌道に乗せていく、いわゆるネイチャーポジティブの実現のために私たちができること」というテーマのもとに、今回の40周年記念誌を作りました。富士フィルムホールディングスの後藤社長とFGFの小林運営委員長の対談をはじめ、5期にわたる「未来のための森づくり」やこの10年間のFGF助成事業地からの報告、さらに40回目となる「わたしの自然観察路コンクール」受賞作品の紹介など、FGFのさまざまな活動に関する記事を掲載しました。また、これまでグリーンレターに登場いただいた皆さんから一言メッセージもいただきました。

この写真は、ちょうど10年前、私が本誌編集長をお引き受けした最初の年に、鞍馬の火祭りを取材した時のものです。街道を小さくまつな松明が行き交うなか、火祭保存会の三宅会長のお宅を訪ねました。親戚や知り合いの方などたくさん的人が集まり、女性陣が準備した里山の恵みを感じられるご馳走を味わっていました。家の外も祭りだけじゃなくて里山の中でも祭り。男たちも祭りに誇りをもつていて、女の人も長をお引き受けした最初の年に、鞍馬の火祭りを取材した時のものです。街道を小さくまつな松明が行き交うなか、火祭保存会の三宅会長のお宅を訪ねました。親戚や知り合いの方などたくさん的人が集まり、女性陣が準備した里山の恵みを感じられるご馳走を味わっていました。さっきまで部屋におられたとても小柄で高齢のお母さんが、神輿の大鼓をたたいています。力強い太鼓の音に驚きました。地域の人たちがまさに総力をあげて祭りを動かしている、そして祭りの松明やこ馳走が里山の多様な資源に支えられています。そのことに心が動かされました。10年後の今秋、「未来のための森づくり」の取材でふたたび鞍馬を訪ねました。「火祭りや暮らしの資源を自分たちの里山で」をめざして、地元保存会の皆さんと京都大学の先生や学生たちが森づくりの活動を進めています。世代や地域をこえた新たな協働が生まれつつある、そう強く感じました。

地域の自然が回復した時に、自然との関わりのなかで地域の暮らしや歴史、文化も輝きを増していく、そんなネイチャーポジティブを実現させていきたい。全国各地のひとつひとつの現場から、地域の特徴を活かした新たな動きが生み出されていくよう、ぜひとも願っています。世代や地域をこえた新たな協働が生まれつつあることを期待しています。(W)



特集

富士フィルム・グリーンファンド 40周年を迎えて ネイチャーポジティブ 実現のために 私たちができること

: a world of living in harmony with nature

FGF機関誌「グリーンレター45号」では、FGF設立40周年を機会に、事業内容を振り返るとともに、次のステージとして「ネイチャーポジティブ（自然を守って回復させる）」のために、我々に何ができるかを考えました。

巻頭の富士フィルムホールディングスの後藤社長と小林 FGF運営委員長の対談をはじめ、過去にグリーンレターに登場された26名、FGF活動・研究助成先の方々からも具体的な今後の目標など、未来へ向けた大事なメッセージをいただきました。

ネイチャーポジティブ実現のため、40周年以降も FGFは自然環境の保全に役立つ事業を続けてまいります。



特集 富士フィルム・グリーンファンド 40周年を迎えて —ネイチャーポジティブ実現のために私たちができること—

4	FGF40周年記念対談 社会全体のアプローチで ネイチャーポジティブの実現を 後藤禎一×小林光 司会 渡辺綱男	14	「ネイチャーポジティブ」実現の ために私たちは何ができるか 過去10年間にグリーンレターにご登場 いただいた26名からのメッセージ 未来のための森づくり (第1期)まいおか水と緑の会 (第2期)冬雷塾 (第3期)金沢大学 角間里山本部	28	緑のための支援事業 通算実施40回を迎えた 「わたしの自然観察路コンクール」 ・2023年度の受賞作品紹介 ・過去の受賞者への取材で伝えるコンクールの魅力 稻垣貴厚・稻垣慶宥・稻垣典寛
10	公益信託とは何か 三井住友信託銀行株式会社	18	未来のための森づくり (第4期)エゾリスの会 伊藤育子・佐々木梨江	33	緑とふれあいの活動助成・ 緑の保全と活用の研究助成 ・2013年から2022年までの 活動・研究助成72件の紹介 (2017年度研究助成)世界自然遺産知床の ヒグマと人(下鶴倫人) (2018年度活動助成)皆で育む道 ～みちのく潮風トレイルを未来へ(相澤久美) (2021年度活動助成)女性パワーで ガイヤの森植樹会を開催!!(徳永由佳)
11	FGFの4つの事業	20	未来のための森づくり (第5期)鞍馬火祭保存会 取材記事 「火祭りや暮らしの資源を自分たちの里山で」	75	FGF通信
12	助成申請を審査する立場から見た 富士フィルム・グリーンファンド 小林光	22	FGF 助成一覧	78	

45号に登場してくださった方々



後藤禎一(ごとう ていいち)
富士フィルムホールディングス(旧富士写真フィルム)株式会社、及び富士フィルム株式会社の代表取締役社長・CEO。1983年、関西学院大学卒業後、富士写真フィルム入社。1995年から2010年までベトナム、シンガポール、中国駐在。2013年、メイカルシステム事業部長就任。2018年同社取締役、2020年に事業会社である富士フィルム株式会社の取締役専務執行役員を経て、2021年より現職。



小林光(こばやし ひかる)
1949年東京生まれ。東大先端科学技術研究センター研究顧問。1973年環境庁に入庁。2011年に事務次官を最後に退官。京都議定書の作成や実施に関する内外の交渉を長年担ったほか、一貫して、環境まちづくり、環境と共生する経済づくりを担当し、退官後も大学教員の立場から、各地で、自治体の環境政策や企業の環境取り組みへの助言・協力をしている。



渡辺綱男(わたなべ つなお)
1956年東京生まれ。1978年に環境庁に入庁、全国の国立公園や野生生物の保護管理にあたる。釧路湿原の自然再生や知床の世界遺産登録、生物多様性条約COP10の開催、三陸復興国立公園づくりなどに携わり、2012年環境省を退官。現在は自然環境研究センターや国連大学に勤務。著書に『日本の自然環境政策』(東京大学出版会)など。



伊藤育子(いとう いくこ)
エゾリスの会にて里山をつくろうプロジェクト企画・運営担当、モニタリングサイト1000里地調査コアサイト『帯広の森』のコーディネーター。1965年東京生まれ埼玉育ち。帯広畜産大学へ進学し『帯広の森』と出会い、かれこれ40年。1級ビオトープ施工管理士、自然観察指導員、環境カウンセラー(市民部門)。



佐々木梨江(ささき りえ)
中学1年生の息子と小学4年生の娘とともにエゾリスの会の活動に参加している。1980年生まれ、東京育ち。帯広畜産大学へ進学後、知床でネイチャーガイドとして働き、帯広に戻る。子供も一緒に森の中で過ごす時間が欲しい!まだ自然の事を知りたい!と思いエゾリスの会へ入会。



鞍馬火祭保存会(くらまひまつりほぞんかい)
京都府京都市左京区鞍馬本町において1963年から活動する団体。本会は、1千余年の歴史を誇る鞍馬火祭を保存し、その比類なき火祭行事を振興することを目的とする。火祭行事に必要な諸道具の維持保存のための補助事業・火祭儀式及び行事の資料等の保存・その他目的達成に必要な様々な活動を継続的に行っている。毎年10月22日の「鞍馬の火祭り」を実施し、2021年からはFGFの助成を受けて由岐神社の森で、森林資源の管理・利用等を中心に活動を行う。



下鶴倫人(しもづる みちと)
1979年神奈川県生まれ。東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻を修了。博士(獣医学)。2008年より北海道大学大学院獣医学研究科(現・研究院)に助教として着任、現在准教授。専門は野生動物学。主としてヒグマをはじめとしたクマ類の生理生態に関する研究に取り組んでいる。



相澤久美(あいざわ くみ)
認定NPO法人みちのくトレイルクラブ常務理事兼事務局長。建築設計、雑誌・書籍編集、映画プロデュース、震災支援等を経て、現在みちのく潮風トレイルの管理運営を行っている。また、各地のロングトレイルの敷設や運営計画策定支援も行う。青森大学客員教授、中環審専門委員、他各種団体の理事も兼務。



徳永由佳(とくなが ゆか)
大阪府生まれ。現在、宮崎県都城市在住。1996年7月仲間とともに「どんぐり1000年の森をつくる会」を発足。2008年4月にNPO法人に。当初から事務局として活動し、今年で27年目。職業は市職員。ライフワークとしてNPO活動に取り組む。

発行 公益信託 富士フィルム・グリーンファンド
受託者 三井住友信託銀行株式会社
一般財団法人 自然環境研究センター
編集制作 渡辺綱男((一財)自然環境研究センター上級研究員)
編集人 小島麻理 星野俊彦(富士フィルムホールディングス株式会社)
編集協力 株式会社アートボスト
デザイン 高陽堂印刷
印刷 株式会社アートボスト

社会全体のアプローチで

FGF40周年記念対談

ネイチヤーポジティブの 実現を

富士ファイルム・グリーン
ファンド（FGF）40周年
を記念して、富士ファイルム
ホテルディングス社長、C
EOの後藤氏、FGF運営
委員長小林氏が、それぞれ
の来た道を振り返り、今後
のFGF、富士ファイルム、
そして社会と環境の未来を
ともに見つめました。



Nature Positive

渡辺 本年、2023年に富士フィルム・グリーンファンド（以下FGF）は40周年を迎えた。この機会にFGF運営委員長の小林光さんと富士フィルムホールディングス社長の後藤禎一さんの対談を行い、FGF、そして富士フィルムの来た道を振り返って、今後の展望についてお話を伺いたいと考えています。

FGFは、富士フィルムが創立50周年にあたつて自然環境の保全・育成のために拠出した10億円の資金を活用して1983年に誕生しました。民間企業による自然保護をテーマとした公益信託としては、日本で初めて設立されたものでした。

後藤 実はFGFが設立された1983年は、私が富士フィルムに入社した年です。

富士フイルムホールディングス代表取締役社長
CEO
後藤禎一さん
富士フイルム・グリーンファンド運営委員長
東大先端科学技術研究センター研究顧問
小林光さん
渡辺綱男
司会
FGF機関誌「グリーンレター」編集長



右から小林氏、後藤氏、渡辺氏

そして富士フイルムが自然を彷彿とさせる「グリーン」をコーポレートカラーに使い始めたのは1958年（昭和33年）で、私はその翌年、1959年（昭和34年）の1月生まれということもあり、FGFと、FGFがテーマとしている「自然環境」に

今から考えても、40年前にFGFを設立した当時の経営陣には先見の明があったと思います。「会社創立50周年」といえば、パーテイーを開いたり記念館を建てたりといふ話になりがちだった時代に、公益信託とう構想を持ったこと、また、単なる寄付や過性のアクションではなく、継続的な環境保全のために、地域に根付いた自然保護活動に助成する基金を設立したことは、自社の行動ながら大変に価値ある判断だったと今回

A photograph of a small, shallow pond surrounded by dense green trees and foliage. The water is calm, reflecting the surrounding environment. The pond is framed by a low, rocky embankment.

創業の地である南足柄市の水源地
(写真提供 / 富士フィルムホールディングス)

改めて思いました。「これまでからの会社経営は、人とマーケットと地球が大切。緑を大切にしない経営では生き残れない」というのは当時の大西實社長の言葉ですが、40年前に地球環境に言及かつたと思います。

後藤 山岳写真家の白旗史朗さんの作品で
す。あの写真は決して偶然に撮影されたも
のではなく、気象学から雲の動きを読んで、
この時間のこの角度を狙ってと、綿密な計算
の上で撮影されたそうです。風景写真家の
方々は皆さん、素晴らしい作品を撮影され
るために、見えないところでそうした努力を
されているそうです。

柄サイトの体育館を作業場としたのですが、現役社員やその家族に加え、多くのOBもみなボランティアで集まり、作業をしました。写真は、結婚式や入学式、卒業式など、皆さんの大事な一瞬を記録するものですが、写真フィルムは撮影したあと現像・プリントしてはじめて、本当の価値を提供できる製品で、使う前に試すことができません。お客様はそれぞれの大切な瞬間を記録するため、当社の製品を信頼してフィルムを購入してください。従業員はみな、

もと大阪に本社を置く企業から写真フィルム部門を分離独立させた会社で、社名の「富士フィルム」の「富士」は富士山が由来です。当時の幹部が大阪から東京へ向かう東海道線の車内から美しい富士山を眺め、その名を社名に冠したいと名付けたものです。その裾野にあって、豊富な湧水ときれいな空気で恵まれた南足柄村（現南足柄市）に写真フィルム製造のための当社の最初の工場が建設されました。きれいな水と空気は、写真フィルムの製造には何よりも大切です。南足柄市の工場の近くには、今でも多くの湧水群が広がっています。

小林 ぜひその創業の地である、その土地を見たいのです。ところで、今日は泥だらけになってしまった写真の救済を行いました。当時、被害を被った家に被災者の方々が戻られた時、真っ先に探したのは写真だと伺いました。また救助活動の過程でもアルバムなど思い出の品が多数発見されました。当社には、皆様の大切な思い出の品を一つでも多く救い出したいとの思いがありました。写真プリントの洗浄ノウハウの提

ならば自信をもつて売り込め
る、というのが
入社の動機で
した。

東日本大震
災の時、われわれは被災地で、津波によつて泥だらけになってしまった写真の救済を行いました。当時、被害を被った家に被災者の方々が戻られた時、真っ先に探したのは写真だと伺いました。また救助活動の過程でもアルバムなど思い出の品が多数発見されました。当社には、皆様の大切な思い出の品を一つでも多く救い出したいとの思いがありました。写真プリントの洗浄ノウハウの提





阿蘇山麓の菊陽町での稲刈りに参加する後藤社長。左下写真の社長のお隣は菊陽町の吉本孝寿町長（写真提供／富士フイルムホールディングス）

* 30by30 アライアンスとは
2030 年までに陸と海の 30%以上の保全を目指す国際約束「30by30目標」の達成のため、2022年4月に環境省などが発起人となり、企業、自治体、NPO などが集まって発足したものです。



業績評価指標）に水の項目を入れているのも良いですね。

後藤 映画や写真のフィルムの製造には清浄な水を多く使用します。われわれは、創業地である富士山近くの南足柄市で、豊富に湧くきれいな水をお借りして、製品を作らせていただきてきたわけですから、その水をきれいな状態にして河川に戻さなくてはいけない。そうした思いから、早くから水投入量の削減、及び水のリサイクル利用にも取り組んできました。

現在の富士フイルムグループには多くの事業がありますが、2017年に発表した2030年度をゴールとするCSR計画「Sustainable Value Plan（サステナブル・バリュー・プラン）2030」（SVP 2030）に沿って、革新的技術・製品・サービスの提供など、事業活動を通じた社会課題の解決

(右) オランダのバイオ医薬品用培地の生産拠点にて、使用電力を風力発電由来に転換
(下) 中国の複合機リサイクル拠点でカーボンニュートラルを実現
(写真提供／富士フイルムホールディングス)



そうしたお客様の思い出が詰まった写真を大事にしたい、お客様が当社を信頼してくださいとする気持ちに応えたいという気持ちをもつて、それはいわば当社のDNAとして従業員の心に深く刻まれていますから、この写真活動には本当に多くの従業員が参加しました。

手元にある写真というのは何年も経った後に、さらに価値が高まるものだと思います。

最近ではデジタルの普及で、写真をプリントすることが少なくなりましたが、ぜひプリントして手元に残してほしいものです。

小林 確かに写真はさまざまな瞬間を記録することができるのですね。戦前の写真などを見ると、当時はそういう暮らしをしていたのかなどと興味深く思うことがあります。ところで、現在の富士フイルムグループは、写真フィルムだけでなく色々と新しい事業に取り組んでいらっしゃる印象です。

後藤 デジタルカメラの台頭で、20000年を境に世界の写真フィルム需要は激減しました。そのため、われわれは写真事業で培われた自分たちの技術を徹底的に深掘りして、それが応用できる新たな事業を探索しました。それが現在のヘルスケア事業と電子材料事業の伸長につながっています。これらのマーケットは間違いなく、今後益々大きくなっています。

現在の富士フイルムグループには多くの事業がありますが、2017年に発表した2030年度をゴールとするCSR計画「Sustainable Value Plan（サステナブル・バリュー・プラン）2030」（SVP 2030）に沿って、革新的技術・製品・サービスの提供など、事業活動を通じた社会課題の解決

渡辺 サステナブルという言葉が出てきましたが、ここ10年を振り返っていただいて環境分野では、どのような取り組みをされてきたのでしょうか。

後藤 当社はグループ経営を進化させるため、2006年に持ち株会社である富士フイルムホールディングスを設立しましたが、その翌年、2007年に当社の「CSRの考え方」を定めた時からサステナビリティや、持続可能性という言葉を使っています。

2017年に発表した（前述の）SVP 2030では、13年後の2030年に、われわれの会社をどんな会社にするのか、どういう形で社会課題解決に貢献していくのか、その目指す姿をCSR計画として宣言しました。具体的には環境、健康、生活、働き方という4つの重点分野を掲げ、それに関わる社会的課題を解決していくこうというものです。そのなかでも環境は、世界的にみて大きな課題ですので、脱炭素に向けた計画をしっかりと練りました。

特に気候変動対応として、2040年までに自社が使用するエネルギー起因のCO₂排出を実質的にゼロにすることを目指すとともに、原材料調達から製造、輸送、使用、廃棄に至るまでの自社製品のライフサイクル全体において、2030年度までにCO₂排出量を50%削減（2019年度比）することを目指しています。当初、2050年度までとしていた実質排出ゼロの従来目標を、10年前倒しにして2040年度に達成する計画にしました。

小林 富士フイルムは脱炭素の取り組みが早かつたのですね。1997年、初めて温室効果ガスの削減行動を義務化した京都議定書の頃は、環境の専門家中でも、10年でCO₂を5%、100年でようやく50%削減といった相場観でした。当時は、温暖化はわれわれが生きているうちには大して進まないんじゃないかな、と考える人もたくさんいました。それが、今では2050年のカーボンニュートラルでは遅すぎで、激しい気候変動が来るとは思っていませんでした。温室効果ガスが気候変動の要因でありますからね。数十年前までは、「ここまで貢献する企業を目指して事業を推進している」というのが国際的なコンセンサスなわけですから、重点課題として優先的に取り組むことは大切です。

小林 富士フイルムは脱炭素の取り組みが早かつたのですね。1997年、初めて温室効果ガスの削減行動を義務化した京都議定書の頃は、環境の専門家中でも、10年でCO₂を5%、100年でようやく50%削減といった相場観でした。当時は、温暖化はわれわれが生きているうちには大して進まないんじゃないかな、と考える人もたくさんいました。それが、今では2050年のカーボンニュートラルでは遅すぎで、激しい気候変動が来るとは思っていませんでした。温室効果ガスが気候変動の要因でありますからね。数十年前までは、「ここまで貢献する企業を目指して事業を推進している」というのが国際的なコンセンサスなわけですから、重点課題として優先的に取り組むことは大切です。

後藤 気候変動は差し迫った課題になつたが、この10年を振り返っていただいて環境分野では、どのような取り組みをされてきたのでしょうか。

小林 富士フイルムは脱炭素の取り組みが早かつたのですね。1997年、初めて温室効果ガスの削減行動を義務化した京都議定書の頃は、環境の専門家中でも、10年でCO₂を5%、100年でようやく50%削減といった相場観でした。当時は、温暖化はわれわれが生きているうちには大して進まないんじゃないかな、と考える人もたくさんいました。それが、今では2050年のカーボンニュートラルでは遅すぎで、激しい気候変動が来るとは思っていませんでした。温室効果ガスが気候変動の要因でありますからね。数十年前までは、「ここまで貢献する企業を目指して事業を推進している」というのが国際的なコンセンサスなわけですから、重点課題として優先的に取り組むことは大切です。

後藤 製造業としては、ものづくりにおけるカーボンニュートラルモデルの確立が、気候変動対策として急務だと考えています。われわれは天然ガスの代替となる脱炭素燃料として期待が高まっている「メタネーション」、つまりCO₂を水素と合成してメタノンをつくる技術の実証実験を、神奈川工場足柄サイトで東京ガス、南足柄市と共同で進めています。

小林 CO₂だけでなく、KPI（重要な

たとえば当社グループには熊本県の菊陽町にディスプレイ材料・半導体材料の工場があります。この工場の場所を含めた阿蘇山に連なる11市町村は、約100万人分の住民の水道水資源を地下水で賄う、世界でも珍しい地域です。豊かな地下水が保持できた理由のひとつが、阿蘇山麓から菊陽町に広がる白川中流域の水田にあります。最近は宅地化や、住民の高齢化で、この大事な役割を果たす水田が少なくなってきたこと、この地域で事業活動を行なう企業の責務として、地元農家の協力を得ながら、菊陽町の水田を利用した地下水かん養を実施し、地下水の保全に努めています。時には従業員やその家族が水田での作業に参加して、地下水かん養や自然環境保全の大切さを身をもつて感じており、従業員の環境意識の維持向上にもつながっています。今年は私自身も稲刈りに参加してきました。その水田で作った新米は大変美味しいお米なので、毎年楽しみにしています。

渡辺 まさにネイチャーポジティブを進める活動ですね。自然の悪化を止めるだけでなく、水の循環を守ることを通じて、自然の回復に向けた取り組みが動き出していると感じました。

2010年に名古屋で開かれた生物多様性の保護に関する国連の会議「COP10」では、まずは自然環境の悪化を止めようと、絶滅危惧種を守ることなど2020年まで取り組む20の目標が合意されました。昨年（2022年）12月にモントリオールで開催された「COP15」では、悪化の流れを逆転させて自然を回復軌道に乗せる、いわゆるネイチャーポジティブを進めるため、

渡辺 継続といえば、FGFは「緑とふれあいの活動助成」「緑の保全と活用の研究助成」という2つの事業を通じて、40年間で220件の助成を行ってきました。30周年以降のFGFのこの10年の活動を振り返ってみて、いかがでしょうか。

小林 2014年からこの10年間で助成した先は86件です。FGFは、地域の自然を守る草の根の活動はもちろん、日本学術振興会の科学研究費などでは対応できな



企業経営では、事業活動を進めながら
社会課題を解決していかなければなりません。後藤

渡辺　企業が今後取り組むべき課題としては、TNFD（自然関連財務情報開示タスクフォース）がありますね。TNFDは今年の秋から動きだしました新たな枠組みですが、企業活動が自然環境や生態系にどのような影響を与えるかを評価し、開示することや、企業活動に生物多様性

度がなく、調子が悪くなつてから病院に行く人がほんどのため、特にがん罹患者の5年生存率は、日本で約7割なのにに対し、インドでは約3割と言われています。日本での人間ドックに相当する健康診断が2000ドルで、それも2時間で全部終了します。インドの方々は合理性を重んじるので、医療AIの受け入れの決断が早かつたですね。モンゴルでも健診の普及によって、予防文化を広めたいという期待が寄せられています。当社はビジネスにおける経済性と社会課題の解決を両立させるため、2030年度までに医療AIを活用した製品・サービスを世界196のすべての国や地域に導入していくといきたいと考えています。もちろん事業活動を推進していく上では、気候変動への対応、資源循環の促進、化学物質の安全確保、地域の環境保全、生物多様性の保全など、環境課題にも積極的に取り組んでいきます。

渡辺　企業が今後取り組むべき課題としては、TNFD（自然関連財務情報開示タスクフォース）がありますね。TNFDは今年の秋から動きだし

た新たな枠組みですが、企業活動が自然環境や生態系にどのような影響を与えるかを評価し、開示することや、企業活動に生物多様性

度がなく、調子が悪くなつてから病院に行く人がほんどのため、特にがん罹患者の5年生存率は、日本で約7割なのにに対し、インドでは約3割と言われています。日本での人間ドックに相当する健康診断が2000ドルで、それも2時間で全部終了します。印度の方々は合理性を重んじるので、医療AIの受け入れの決断が早かつたですね。モンゴルでも健診の普及によって、予防文化を広めたいという期待が寄せられています。当社はビジネスにおける経済性と社会課題の解決を両立させるため、2030年度までに医療AIを活用した製品・サービスを世界196のすべての国や地域に導入していくといきたいと考えています。もちろん事業活動を推進していく上では、気候変動への対応、資源循環の促進、化学物質の安全確保、地域の環境保全、生物多様性の保全など、環境課題にも積極的に取り組んでいきます。

い、独特的の二つの研究にも助成しているため、応募される方が多いです。そのすべての方に助成できないのは残念ではあります、FGFの趣旨により合致した助成先を選ばせてもらっています。

都市近郊の緑地を活動対象として選び、自然とふれあうことができる森づくりを目指した活動に5年単位で資金援助する「未来のための森づくり」という自主的な事業があるのもFGFのユニークなところです。第4期（2016年～2020年）助成先の、北海道帯広市で活動している「エゾリスの会」を視察に行つたことがあるのですが、市民とNPOが一緒に進めてる地道な活動を拝見して、自然は知恵と労力があれば良質なものとして再生できるのだな、と感銘を受けました。「未来のための森づくり」の助成は、2021年から第5期に入つており、京都の「鞍馬火祭保存会」による火祭り行事の松明の天然素材を供給する里山と、その文化を守るために活動に助成しています。こういった民間の活動に助成してくれる団体は少ないので、FGFがお役に立てているかなと思っています。

純粋な研究だけではない、自然環境の松明の天然素材を供給する里山と、その文化を守るために活動に助成しています。こういった民間の活動に助成してくれる団体は少ないのですが、FGFがお役に立てているかなと思っています。



「未来のための森づくり」第4期助成先であるエゾリスの会を視察する。
左から2番目が小林運営委員長



ネイチャーポジティブを進めるのは容易ではなく、社会のいろんな仕組みを変えていかなければ。自然資本にもやっぱりリターンが必要です。小林

件もの応募がありました。

自然観察の動機付けにはうつづけの課題で、子どもたちの環境への理解、関心も深まっているように感じます。自然環境の価値に気づけば、それに対する人材も集まり、お金も集まるようになります。まずは環境の価値に気づく、わかることが次のステップにつながるのではないかでしょうか。そういう意味でもよい企画だと思います。

後藤　自然観察路コンクールはやり方次第で、もつと大きく広がりそうですね。助成事業も40年で200件を超えるということです。FGFの活動が着実に実つていると感じます。これも継続は力なりですね。今後も継続して100年続けていきたいですね。

渡辺　最後に今後の活動について、富士ライ

ムグループがどのように展開していくのかというお考えをお尋ねします。

後藤　（前述の）富士フィルムグループSustainable Value Plan 2030の中で、直接的に人々の健康増進に貢献していくヘルスケア領域には、今後より一層注力していくことを

例えはインドやモンゴルでは、AI技術を活用して、がん検診などをを行う健診センターを開設しました。インドには健康診断の制

度がなく、回復に向けた人の知恵と労力を駆使した草の根の活動や研究。これからもFGFの趣旨に適った、そうした人の手間がかかるところに助成をしていきたいと思います。

渡辺　FGF創立当初から実施している、「緑のための支援事業」である、「わたしの自然観察路コンクール」も同じく40年を迎えるですね。

小林　全国の小・中・高校生を対象に、身近な自然観察路を絵地図と解説文で紹介してもらうことによって、次代を担う子どもたちの自然に関する意識の高揚を図ることを目的としたコンクールです。こちらも毎年、力作揃いで応募数も多く、昨年は929

件もの応募がありました。

後藤　CO₂なら世界各地における活動の通算でバランスをとるという考え方もありますが、TNFDが求めている生物多様性の評価は各地での活動が求められるため、CO₂とは違った工夫が必要ですね。

小林　地域固有の価値というのもありますしね。自然生態系には、それぞれの地域に固有の役割や価値があるので、CO₂のように単純に量として扱うわけにはいきません。それぞれの土地が、他では果たせない効用や便益を人々に与え、そして企業の経営にも大いに役立つていて、そのための経営でも、その土地の自然や生物ごとに細かに観察し、関心を注いでいくことが大事ですね。

後藤　企業経営では、事業活動を進めながら社会課題を解決していくことがあります。そのための投資として、様々なバランスを取りながら、経営にあたつていくべきと考えます。得られた利益を社会貢献に資するよう活用しない会社は、市場から退場を余儀なくされるでしょう。

小林　利益というのは金融資本に対するリターンですけど、人に対するリターンも大事だし、自然資本にもやっぱりリターンが必要です。それぞれ「お返しする」というのが

大事なのでしょうね。

渡辺　実際にネイチャーポジティブを進めるのは容易ではなく、「悪化を止めて回復に向かう」というのは実現しないと思っています。その実現のために、私は3つ大事なことがあります。それは、その土地の自然や生物ごとに細かに観察し、関心を注いでいくこと。2つ目は、広域の自然や人のつながりが大事だということ。3つ目は、地域社会全体の協働。「whole of society approach（社会全体でのアプローチ）」。このフレーズは生物多様性条約第15回締約国会議（COP15）の中で、参加者が皆、何度も口にした言葉です。ネイ

チャーポジティブの実現のためには、社会全体のさまざまなセクターが立ち上がり、協働の取り組みを進めることができなければなりません。

富士フィルムグループがFGFを通じた助成を含め、これからもうつづけた視点に立つた先駆的な取り組みを進め、FGFとともに30by30アライアンスなどの活動をけん引していくことを大いに期待しています。

本日は貴重なお話をありがとうございました。



企業経営では、事業活動を進めながら
社会課題を解決していかなければなりません。後藤

渡辺　企業が今後取り組むべき課題としては、TNFD（自然関連財務情報開示タスクフォース）がありますね。TNFDは今年の秋から動きだしました新たな枠組みですが、企業活動が自然環境や生態系にどのような影響を与えるかを評価し、開示することや、企業活動に生物多様性

FGFでは4つの事業を進めています

未来のための森づくり

都市近郊の緑地を活動対象として選び、自然とふれあうことのできる森づくりを目指した活動に資金援助するもので、長期的な見通しで助成することによって、大きな成果をあげています。

第1期助成(1984～1992)：「まいおか水と緑の会」(横浜市戸塚区の市民団体)、第2期助成(1988～2007)：「冬雷塾」(東京都檜原村の地元青年グループ)、第3期助成(2011～2015)：「金沢大学角間里山本部」(金沢大学の学内組織)、第4期助成(2016～2020)：「エゾリスの会」(北海道帯広市の市民団体)、第5期助成(2021～継続中)：「鞍馬火祭保存会」(京都市鞍馬の市民団体)。



*本事業の活動の様子は、本誌18P～を参照ください。

事業 2 緑のための支援事業

FGFでは、より多くの人々に理解を深めていただため、写真展やシンポジウムなどさまざまな活動をしてまいりました。1984年に始まった「わたしの自然観察路コンクール」は、身近な自然のおもしろさを発見し、自然を観察できる道を自分でつくって絵地図と文章で表現するもので、身近な自然への理解や愛着を深めています。



*本事業の活動の様子は、本誌 28P～を参照ください。

事業 3 緑とふれあいの活動助成

緑を確保し、保全するとともに、私たちと生きものとのふれあいを積極的につくり出そうと活動している個人や団体に対し、その一層の発展のための資金を助成金として支給しています。



* 2013年～2022年までの10年間の助成先の活動の様子は、本誌33P～を参照ください。

事業 緑の保全と活用の研究助成

身近な自然環境の保全・活用に関する具体的な研究や、緑地の質的向上を目指した実証研究などを行っている個人や団体に対し、今後の一層の充実のための資金を助成金として支給しています。



* 2013年～2022年までの10年間の助成先の研究の様子は、本誌33P～を参照ください。

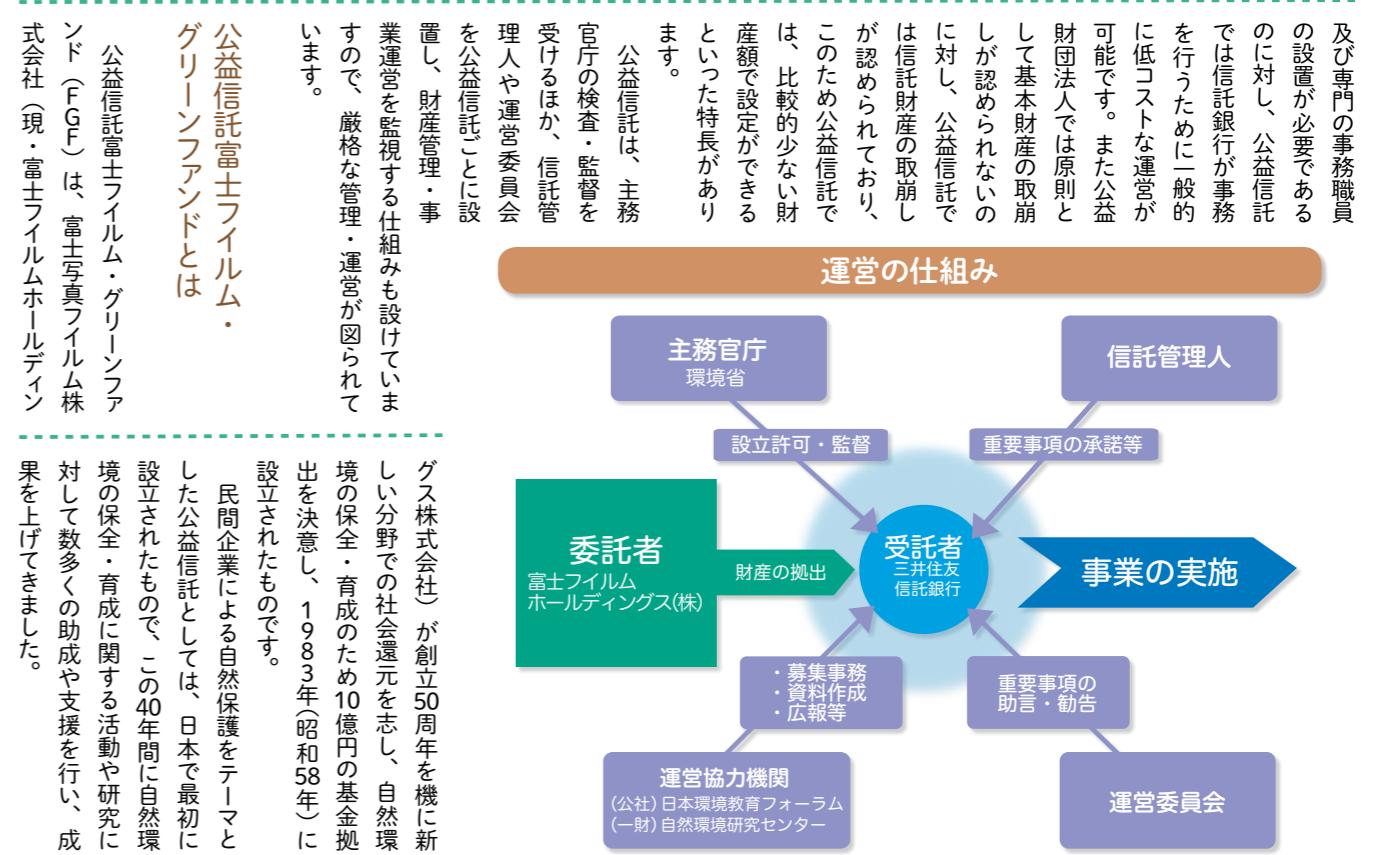


公益信託とは何か

受託者 三井住友信託銀行株式会社

近年、わが国では民間の公益活動に対する期待が高まる一方で、民間の公益活動のために自らの財産を提供しようとする個人の方や利益の一部を社会に還元しようとする企業・団体が増えています。公益信託は、こうして個人の方や企業等の篤志家（委託者）が自らの財産を信託銀行に信託し、委託者のご意志に基づいて定められた信託目的にしたがつて信託銀行がその財産を管理・運用し公益事業を行うという制度で、わが国における民間の公益活動のための仕組みのひとつです。

公益信託は、1977年（昭和52年）に第1号が誕生して以来、個人や企業等の善意に支えられ、自然環境保護活動への助成、奨学金の支給、自然科学・人文科学研究への助成、さらには、国際協力・国際交流促進活動への助成等幅広い分野で活用されており、2023年（令和5年）3月末現在、受託件数は385件、信託財産残高は554億円となっています。



助成申請を審査する立場から見た 富士フィルム・グリーンファンド

小林光 FGF運営委員会委員長・東大先端科学技術研究センター研究顧問

私ども7人の委員は、富士フィルム・グリーンファンドの自主事業の執行・監督のほか、同ファンドからの助成案件を選別する仕事も行っている。

ファンドからの助成は、数年以上の長期を掛けて取り組む森づくりに対するものと原則として単年度での活動・研究助成とに大きく二つに分かれている。前者は、したがって、数年に一度の公募であり、後者は毎年の公募になるが、後者で見ると助成対象としての採択割合は、応募件数比で活動助成が概ね11.4%、研究助成が8.8%と比較的狭き門である(下表1、2参照)。ファンドの資金量は限られているので、仕方ないとはいえすべてのお気持ちに応えきれないのは残念ではある。ただ、助成をお断りする理由から考えると、このファンドの趣旨、すな

わちその果たしたいと思う役割を十分理解して申請いただければ一層的確な申請内容になっていたのに、と思うものも散見される。そこで、本欄では、結果的に助成対象となった案件に即して、当ファンドが、どのようなものを助成したいと考えているか、そして、その意思をよりよく実現していくために本助成制度をどのように運営しているかなどを説明し、今後の助成申請を考えている方々の参考に供したい。

1. 未来のための森づくり

未来のための森づくりと題する助成は、地域の身近な自然を地域の人々自らの活動で保全整備し、未来世代へ引き継いでいくことを応援するものである。したがって、助成を得るポイントはいくつか

あるが、はっきりしている。一つ目は、対象となる自然が身の回りの自然であることであり、二つ目は、その保全主体が地元の人々、近在の民間の人々であること、そして、三つ目には、将来世代にその自然が受け継がれていくことである。

貴重な自然などは、国や自治体などが保全するのが相当であろうが、身近な自然の保全や活用は公的な制度がないだけに難しいことが多い。そうした難点に着目した助成であって、およそ5年間、総額で1000万円といった力のある支援を行っている。既に、5件の助成が行われ、うち4件が助成を終了して自律的な保全活動や利用活動が続けられている(それぞれの森づくりにはこの冊子の中で貢が割かれて報告されているので、是非、参考いただきたい。)

このカテゴリーでは助成金額も大きいことから、運営委員会が委員や専門家を派遣して候補になる活動の現地を訪問して、前述のようなポイントをチェックしている。特に、助成にあたって往々心配になる点は、助成を受ける団体の実行能力である。志は高くとも、人員が乏しかったり、専門性に欠けていたりすると、助成を躊躇せざるを得ない。また、保全活動の対象地が、そうした民間の団体が手入れをしてよい土地なのか、また、未来に向かって、活動した成果が維持され引き続き活用していくのか、といった点も心配になる点である。

このような審査を経て、例えば7年前の2016年には、北海道帯広市の市民団体「エゾリスの会」による帯広の森づくりが助成対象に選ばれた。我々運営委員会では、助成最終年度には、その成果を確認しに現地調査をし、助成終了後の、一層すそ野の広い活動の在り方にに関して助言を行っている。この帯広の森づくりでは、刻々の森の様子や活動ぶりを、電子

情報化して地域に広く共有することなどをお願いした。富士フィルム・グリーンファンドは、助成して終わり、というものではない。実際に、優れた自然が活用されていくことを強く願っているのである。

2. 活動助成、研究助成

このカテゴリーは、原則単年度(複数年度にわたることを妨げない)を対象としており、1に掲げた森づくり活動に比べ、一件一件への助成は小型・少額である。対象は内容面で、保全や利用の活動と研究調査とに分かたれている。例年合計で10件を少し下回る案件が採択されている。

(1) 活動助成

活動助成の対象は大きく分けて2つ、生物種などに着目した保全の活動と、身近な優れた自然地に着目し、その保全とともにそれとのふれあいを増進する活動である。

助成のポイントは、1に掲げた森づくりとそう変わるものでなく、保全や利用の活動を行う団体などの実行能力と、その活動の継続性や広がりである。ただし、助成金額が少額であるので、その成果とのバランスも助成側としては気にしている。活動助成の案件の金額で見た最頻規模(申請時)は、グラフのとおり、25万円から50万円のクラスと75万円から100

万円のクラスになっている(図1参照)。少額のクラスの助成ケースでは、専門家の助言を得るとか、ポケットマネーでは手が出にくい観察機器などの購入など備品費などが多く、比較的高額のケースでは、それらに加え、講演会や印刷物作成などの横展開のための費用が乗っかってくるケースが多い。円グラフは、少額タイプ、比較的高額タイプの、支出内訳を、運営委員会側の判断で典型的と思われるケースについてみたものである(図2参照)。

(2) 研究助成

このカテゴリーも二つの対象があり、生物種や自然環境の保全自体を研究するものと、それらとの触れ合いを促進する手法などを研究するものである。助成採択のポイントは、1や2の(1)の場合と大きくは変わらず、研究者・団体の能力と、研究自体の意義である。ただし、世の中には研究支援の仕組みは数多い。公的なもので言えば、JSPS(日本学術振興会)による科学研究費助成事業とか環境省の環境研究総合推進費であり、公益財団によるものも数多い。そのため、富士フィルム・グリーンファンドは、身近な自然を対象とする実践的な性格の強いものを採択する傾向がある。逆に言えば、募集要項にも明記されているように公的な研究費でその成果を広く学界で共有するこ

とを目的とした大規模な研究については、応募をしないように呼び掛けている。

助成を受けた案件の最頻規模(申請時)は、グラフのとおり100万円から150万円と、(1)の活動助成より一回り大きい(図3参照)。その支出費目を見ると、基礎的な調査・研究助成では、研究者の本拠地と研究対象地に距離があるため、物品費に加え、交通費が顕著に膨らみ、ふれあい活動を促進する内容の研究助成の場合は、身近な自然が対象であるからか、交通費は少ない代わりに、人件費的な支出が膨らんでいる(円グラフは(1)の場合と同様にこれらの典型例の場合の内訳)(図4参照)。

年1回発行の当ファンド機関誌「グリーンレター」では、毎号に活動・研究の成果を発表するページを確保しているが、今号では40周年記念として過去10年間にわたる助成先72件から活動・研究報告をしていただいた。この報告を読んでいただければわかるように、助成の成果は着実にあがっており、助成年度が終わってからも有意義な活動・研究が続いている。

これからも富士フィルム・グリーンファンドの趣旨に適った、人の知恵と労力を駆使した草の根の活動や研究、人の手間がかかるところに助成していきたいと考えている。

表1. 2014~2023年におけるカテゴリーごとの活動助成の申請件数及び助成件数と採択比率

年度	森林		里山		田畠・農村環境		河川・海城・池・湖沼		その他		申請件数計	助成件数計
	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数		
2014	21	2	7	0	2	0	9	1	5	0	45	3
2015	14	3	5	2	2	0	9	0	4	0	34	5
2016	23	1	20	2	4	0	13	1	3	0	63	4
2017	16	3	15	1	3	0	7	0	3	1	44	5
2018	14	1	14	1	1	0	10	2	0	0	39	4
2019	17	2	13	2	4	1	6	0	2	0	42	5
2020	11	2	7	1	2	0	7	1	5	0	32	4
2021	14	2	14	2	8	0	2	1	4	0	42	5
2022	10	0	9	1	2	1	7	3	2	0	30	5
2023	14	3	6	1	2	0	9	2	2	0	33	6
計	154	19	110	13	30	2	79	11	31	1	404	46
採択比率(%)	12.3		11.8		6.7		13.9		3.2		11.4	

表2. 2014~2023年におけるカテゴリーごとの研究助成の申請件数及び助成件数と採択比率

年度	動植物(地域生態系)の基礎的調査・研究		環境の効用・保全に関する研究		その他		申請件数計	助成件数計
	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数	申請件数	助成件数		
2014	37	3	8	1	7	0	52	4
2015	45	3	9	0	2	0	56	3
2016	37	3	6	0	10	1	53	4
2017	37	3	10	0	6	0	53	3
2018	40	4	12	1	6	0	58	5
2019	27	3	3	0	7	1	37	4
2020	29	3	9	0	4	0	42	3
2021	37	2	6	1	4	1	47	4
2022	22	4	4	1	3	0	29	5
2023	21	4	3	0	2	1	26	5
計	332	32	70	4	51	4	453	40
採択比率(%)	9.6		5.7		7.8		8.8	

図1. 採択された活動助成の申請額の分布

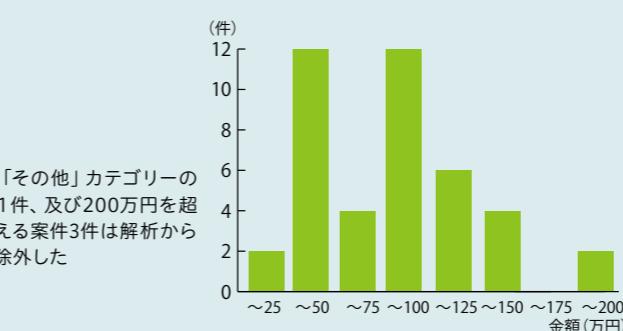


図3. 研究助成の申請額の分布

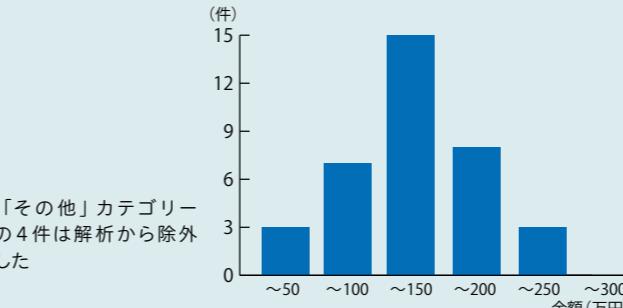
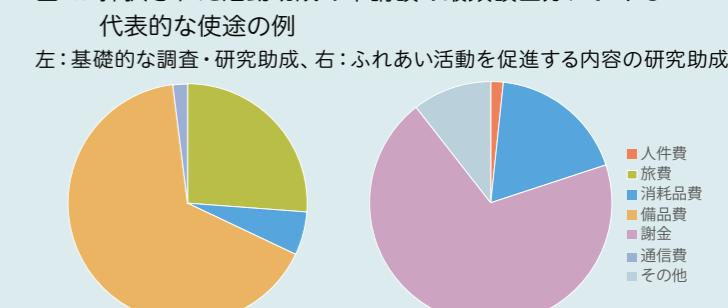


図2. 採択された活動助成の申請額の最頻額区分における代表的な使途の例



図4. 採択された活動助成の申請額の最頻額区分における代表的な使途の例





© 德永桂子

26 Messages

「ネイチャーポジティブ」実現のために私たちは何ができるか

過去10年間にグリーンレターにご登場いただいた26名の方から

40周年記念号のテーマである

「ネイチャーポジティブ（自然を守って回復させる）」のために
私たちは何ができるかについて、ひとことメッセージをいただきました。

地域の自然は地域の「宝」です。しかし、ただそこに自然があるだけでは本当の「宝」にはなり得ません。子どもたちを含めた地域の方々が、その有り様を知り、価値や魅力について思いを馳せ、伝え合い、共有して初めて地域の「宝」として受け継がれていくのだと思います。身近な自然を「宝」として認識し、伝える取り組みの継続、つまり人を育てることが、ネイチャーポジティブ実現の鍵と考えています。

阿部拓二 南三陸町自然環境活用センター 研究員

保全対象

このことを調べて、守るため、回復させるためには何が必要かを理解すること、それが社会の中で維持される仕組みをつくることが大事だと考えています。保全を効果的に実践するには社会に適切に伝えることも重要です。自然保護において FGF のこれまでの貢献は非常に大きいと感じています。今後の発展を期待しております！

阿部司 ラーゴ生物多様性研究室

一つは田んぼや川で 子どもと楽しく虫とり魚とりをする。実体験を通じて知りえないものは愛せないし、愛せないものは守れないんじゃないかな、と。もう一つは小さな自然再生。生きものがぎわう証拠が明らかな技術と行動の組合せで、日曜大工感覚でみんなでできます、ご検索を。前者は未来、後者は今のために。そして、そんなことしながらフィールドで空を見上げたらコウノトリが飛んでたりして、ね。

伊崎実那 兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科

近年、世界自然遺産の登録によりツーリストの形態が変化してきた。安易な情報発信が飛び交い、本来のエシカルな旅の有り方が軽視されることはならない。そのため西表財団が設立された。今後の活動拠点が整備される段階に来ている。ユネスコのきびしい条件がある中での先進地の取り組みなどを学んでいる。歴史と文化を残したまま廃村に追い込まれた処が今直開発を待っている。人と共生なしには荒れ果てたままで、この肥沃な土地など見向きもしない状況があるのも問題である。こうした難題をかかえていながら島に魅かれた移住者たちも少なくない。都会からのボランティアグループも数年に渡り活動を続けてくれる。とても有難い。こうして豊かな緑を次世代へ繋いでいくための知恵の共有を望んでいる。

石垣昭子 染織家、紅露工房

森や海 に出掛け、地域の自然をしっかりと見直しておくことが、自然を生かすために大切である。時間の積み重ねに気づき、風景の見え方が変わってくる。奄美群島と琉球諸島には、自然を畏れ敬いながら上手に利用してきた文化が色濃く残る。文化を通して自然を感じることが重要だと思う。身近な自然を活用し、寄り添い、伝統的な暮らしに学びながら自然回復に努めていきたい。

泉和子 島料理研究家

ネイチャーポジティブ

葉だ。しかしこの手

の言葉を、つい最近どこかで聞いたような気がする。いつの間にか忘れ去られた言葉たち。心地良さに力強さを付与すること、それは現場を潜らせることによってのみ実現する。言葉に現実の錘を付け、その重さを支えて、かつ明るさを失わないこと。都会の饒舌さではなく、地域の沈黙に対峙しそれを受け止めること、それが自然保護に向き合うということなのだ。

小野寺浩 屋久島環境文化財団 理事長、大正大学客員教授

自然環境は私たち人間がこの地球で生活していく上で、人間としての文化を育むために欠かせない存在であることを多くの方に理解してもらうこと。そして自然と人間が共存していくために必要な時代に合わせた新しい価値感を創出していくこと。その理念を次の世代また次の世代へと引き継いでいくことが大事だと考えます。

河野円樹 綾町役場ユネスコパーク推進室

地球の表面積の7割 を占める海。世界は海でつながっています。一人ひとりが身近な暮らしを見直すことで、海が守られ、地球も救われます。まずは自分ができることを地道に続け、様々なステークホルダーと協力・連携していきたいです。

片山清宏

NPO 法人 湘南ビジョン研究所 理事長

北アルプス・雲ノ平の登山道周辺の環境整備に参加している。作業をしていると登山者に「ありがとう」と言われる。ところが、登山道周辺の植生復元や地形の回復作業 자체が楽しくてやっているのだから、感謝されるときまりが悪い。僅かな私の力でさえ自然の一助になるという実感は、優しい言葉よりも強烈だ。植生回復を手助けし、地形を直すことは創作活動であり、自身のための発露なのだ。

海津ゆりえ 文教大学国際学部国際観光学科 教授

勝保 隆 雲ノ平トレイルクラブ 理事

このたびは発行40周年記念を心よりお祝い申し上げます。常に先駆的かつ奥深い環境テーマはもちろん、特に当事者の思いを丁寧に伝えていらっしゃることに貴誌の誠実さが表れています。貴誌42号に能登半島の里海研究を共有する機会をいただけたことを光栄に思います。社会全体が自然環境の保全への貢献が求められるこの時代において、貴誌が今後も多様な主体をつなげる橋渡しとして環境課題のナレッジリーダーであり続けることを願っています。

イヴォーン・ユー

EY 新日本有限責任監査法人
気候変動・サステナビリティ・サービス
(CCaSS) マネージャー

のことを調べて、守るため、回復させるためには何が必要かを理解すること、それが社会の中で維持される仕組みをつくることが大事だと考えています。保全を効果的に実践するには社会に適切に伝えることも重要です。自然保護において FGF のこれまでの貢献は非常に大きいと感じています。今後の発展を期待しております！

阿部司 ラーゴ生物多様性研究室

未来のための森づくり（第4期）

「エゾリスの会」の女性メンバーおふたりに、活動内容、帯広の森の魅力などについてご寄稿いただきました。

第4期助成 (2016～2020)

伊藤 育子（エゾリスの会会員、里山をつくるうプロジェクト企画・運営担当／モニタリングサイト1000帯広の森サイトコードイネーテー）

エゾリスの会（北海道帯広市の市民団体）

FGF機関誌『GREEN LETTER 43号（2021年発行）』の助成先訪問記に取り上げていただきましたエゾリスの会と申します。私たちは、エゾリスをはじめとする野生の生きものたちとともに暮らしていきまちづくりを目指して、帯広で1986年に発足した市民グループです。エゾリスも好きですが、エゾリスに限らず多くの生きものたちとともに暮らしてゆけるまちづくりを目指す仲間の集まりです。



産みたてのエゾアカガエルの卵塊!



チョウの調査をしながらも、イワカバナの種子の出来具合を確認



エゾジグロシロチョウ（左）
とスジグロシロチョウ（右）



帯広のアイドル エゾリス

FGF機関誌『GREEN LETTER 43号（2021年発行）』の助成先訪問記に取り上げていただきましたエゾリスの会と申します。私たちは、エゾリスをはじめとする野生の生きものたちとともに暮らしていきまちづくりを目指して、帯広で1986年に発足した市民グループです。エゾリスも好きですが、エゾリスに限らず多くの生きものたちとともに暮らしてゆけるまちづくりを目指す仲間の集まりです。

森づくり活動

私たち、北海道帯広市のまちづくりの基盤となっている都市公園『帯広の森』で継続的な育林・自然復元作業を行なながら、自然とのつきあい方を参加者自らが考えていくことを目指す「里山をつくろうプロジェクト」を1989年に始めました。また、2008年からは環境省のモニタリングサイト1000里地調査において『帯広の森』をコアサイトとすることをお引き受けして、植物相、鳥類などの各生物相の調査にも取り組んでいます。

作業を楽しみ、調査により森への理解も生まれようとしている『帯広の森』は、最初の植樹祭から40年以上を経過し植樹木の成長によって森らしい外観は整いつつあります。しかし、自律的な森となるためには林床植生の再生こそが本丸です。その道のりは容易ではないことが「未来のための森づくり事業」でも明確となりました。

開拓で拓かれた土地にふるさとの森を再生しようとしている『帯広の森』は、最初の植樹祭から40年以上を経過し植樹木の成長によって森らしい外観は整いつつあります。

しかし、自律的な森となるためには林床植生の再生こそが本丸です。その道のりは容易ではないことが「未来のための森づくり事業」でも明確となりました。

これまで以上に気合いを入れて活動しま

す！と言えると格好良いのですが、私たちはこれまでどおり、急がば回れと申しますよ

うか、自然相手に効率を求めず、少しづつ、ゆっくり楽しく行こうと思います。自然の森に様々な生きものが棲んでいるように、

森の作業や調査にもいろいろな役割分担が

あります。高い技術や詳しい知識がなくても担える役割もたくさんあります。ここか

らは書き手を交代して、活動の様子をご紹

介します。楽しそう！と思われたら是非エゾリ

スの会に遊びに来て下さい。



チョウを捕まえた三日市則昭会長の笑顔

佐々木 梨江（エゾリスの会会員）

（エゾリスの会会員）

エゾリスの会に行くときは、のこぎりを使いたい中学1年の息子と、生きもの全般が好きな小学4年の娘と一緒に来ます。



大人も子どもも楽しんで学べる「帯広の森」

幸いにも『帯広の森』はその用地の一部として、ニホンザリガニやクロミサンザシ

ゆっくり楽しく、
ネイチャーポジティブの実現へ

十勝の4月は雪解けの季節。調査はいつも楽しくおしゃべりしながら歩くことからスタート。親力エルを捕まえたり、鳴きまねをしてカエルを鳴かせようとしたり、カエルじゃなくてヤマメの稚魚を捕まえてみたりとそれぞれがやりたいことをしながら進みます。季節が進むと、あちこちで春の花が咲き始め、寒い冬を越えた生きものたちが爆発的な勢いで活動を始め、とてもわくわくします。

さらに季節が進むとチョウの調査が始まります。虫取り網と図鑑、観察するためのケースを携え、チュウを見つけては追いかけ、捕まえ、種を調べていきます。走つてチョウを追いかける人、「あっち、あっち！」と主に指示を出人。大人も子ども元気に走っているのをほほえましいと思いつながら、私も時々走ります。

エゾリスの会には子どもも一緒にそこにいるませんが、大人も子どもも一緒にそこにいるものを見て、それぞれができることがあります。虫取り網と図鑑、観察して楽しい時間を過ごしています。活動に参加していると、森は木を植えただけではありません。これから5年経つたらさらに10年、20年経つたら、この帯広の森はどうなっているのでしょうか？そんなことを思いながら、また子どもたちと帯広の森に行きます。



初めての伐倒に取り組み中の小学6年生



子どもは自然の中でやりたいことに夢中になる。
その環境を用意するのが大人の役目



モニタリングサイト1000カエル類調査中。ぐちゃぐちゃドロドロを歩くのも楽しい！



ヤマメを捕まえて盛り上がってます！



FGF機関誌『GREEN LETTER 43号（2021年発行）』の助成先訪問記に取り上げていただきましたエゾリスの会と申します。私たちは、エゾリスをはじめとする野生の生きものたちとともに暮らしていきまちづくりを目指して、帯広で1986年に発足した市民グループです。エゾリスも好きですが、エゾリスに限らず多くの生きのものたちとともに暮らしてゆけるまちづくりを目指す仲間の集まりです。

エゾリスの会に行くときは、のこぎりを使いたい中学1年の息子と、生きもの全般が好きな小学4年の娘と一緒に来ます。

まず、エゾリスの会の活動で子どもたちが一番好きなカエルの調査からお話しします。

十勝の4月は雪解けの季節。調査はいつも楽しくおしゃべりしながら歩くことからスタート。親力エルを捕まえたり、鳴きまねをしてカエルを鳴かせようとしたり、カエルじゃなくてヤマメの稚魚を捕まえてみたりとそれぞれがやりたいことをしながら進みます。季節が進むと、あちこちで春の花が咲き始め、寒い冬を越えた生きものたちが爆発的な勢いで活動を始め、とてもわくわくします。

さらに季節が進むとチョウの調査が始ま

ります。虫取り網と図鑑、観察するためのケースを携え、チュウを見つけては追いかけ、捕まえ、種を調べていきます。走つてチョウを追いかける人、「あっち、あっち！」と主に指示を出人。大人も子ども元気に走っているのをほほえましいと思いつながら、私も時々走ります。

エゾリスの会には子どもも一緒にそこ

にいるませんが、大人も子どもも一緒にそこにいるものを見て、それぞれができることがあります。虫取り網と図鑑、観察して楽しい時間を過ごしています。活動に

参加していると、森は木を植えただけではありません。これから5年経つたらさらに10年、20年経つたら、この帯広の森はどうなって

いるのでしょうか？そんなことを思いながら、また子どもたちと帯広の森に行きます。

林床植物たちの再生過程をみんなでモニタリング中

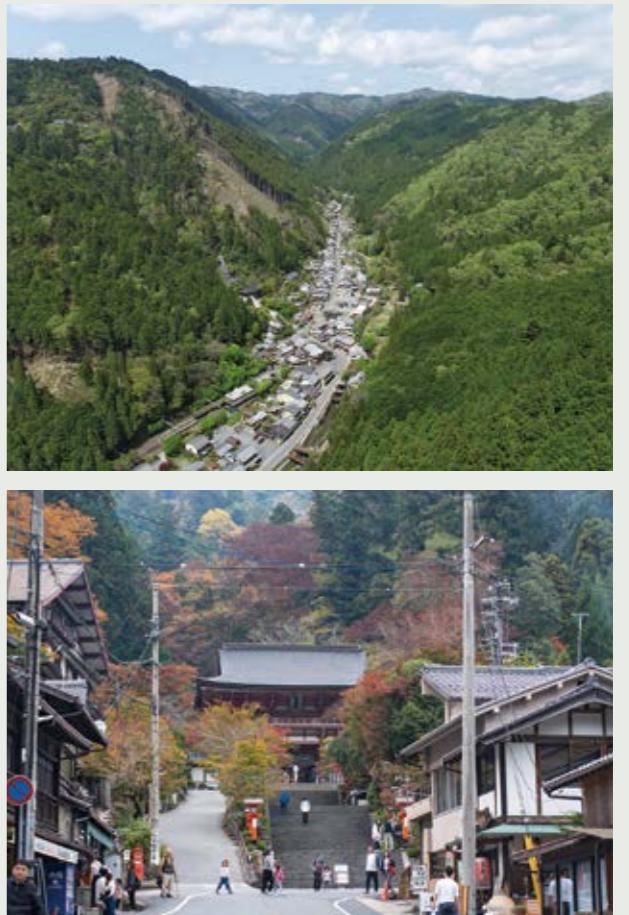




左が鞍馬火祭保存会会長の三宅徳彦さん、右が副会長の三浦公三さん。火祭りの材料を保管する倉庫を見せていただいた。「火祭りのすぐ後だから良い材料はないけど」と言いながら、三宅さんが手にしているのがコバノミツバツヅジなど(柴)。三浦さんは右手にアカマツのジンでできている手松明、左手にフジの根を持った



右上／ドローン画像を見ると、鞍馬の家々は鞍馬川に沿って立ち並び、西の鞍馬山と東の竜王岳に挟まれていることがよくわかる（写真：王聞氏）
右下／由岐神社への参道。賑やかな参道には土産物や食堂が並ぶ 左／川沿いに並んだ家の裏からは川面に降りる石段が今も残る



火祭りや暮らしの資源を自分たちの里山で

鞍馬火祭保存会（京都市鞍馬の市民団体）

F G F 運営委員であり、当誌の渡辺綱男編集長と事務局が、11月4日から5日にかけて現地を訪れ、助成開始から3年目の

鞍馬火祭保存会の活動を拝見してきました。保存会では「火祭りや暮らしの資源が自分たちの里山でまかなえる」。そんな未来を目指しています。

文・グリーンレター編集部 写真・橋本幸則

京都市左京区を流れる鴨川の支流「鞍馬川」沿いの小道をゆっくり歩く。11月だというのに汗ばむような陽気のなか、鞍馬火祭保存会会長の三宅徳彦さんと副会長の三浦公三さんが、取材に訪れた私たちを先導してくれる。「この鞍馬川で火祭りに使う松明をくくるためのフジの根を洗います。わたしら子どものときは、ようこそで遊んだ。ゴリもおる、カエルもおる、遊び場だらけや。」と語るおふたり。秋の午後の陽射しをうけて川はせせらぎの音をたてて流れ、鳥や虫の声以外は聞こえてこない。川沿いに



上右 / 1950 年代まで鞍馬の多くの人が炭問屋を生業にしていた。三宅会長のご自宅にはその頃の貴重な道具がたくさん保存されている 上中上 / 「鞍馬かどや」の工場の天井には火祭りの材料が保管される。いつもの生活のなかに火祭りが顔をのぞかせる 上中下 / 火祭りが終わると武者草鞋（わらじ）はこの通り。松明の火の粉が容赦なく降りかかり焼けてしまう 上左 / フジの根は、ひげ根と節を処理して鞍馬川で洗う（写真：南尊大氏） 下右 / 火祭り資材倉庫の柴 下左 / 頑丈なステンレス製のシカ柵。設置は大変だったが完璧な仕上がりでシカを寄せ付けない

五感で感じる火祭り

そもそも鞍馬に住む人々にとって火祭りとは何なのか。祭りの中心になるのは「火」そのもの。西暦940年に、御所から鞍馬の地へ御遷宮される由岐大明神を河原に生えていた葦を束にした松明に火をつけて村人がお迎えしたのが始まりと伝えられている。大人3、4人が担ぐ大松明は、長さ4m、重さ100kgほどもあり、その大きな松明が燃え上がるさまは人々を酔わせるという。祭りは由岐神社と、神社に続く鞍馬街道沿いの集落一帯で行われ、「サイレヤ、サイリョウ」の勇ましい声と共に、街道が松明の炎で埋め尽くされていく様は圧巻。会長、副会長が日々に言うには「火祭りはただ

里山は荒れ、70年代に入つてから松くい虫の影響によるマツ枯れなどによって、すでに里山を維持することが難しくなってきていた。

保存会では、「由岐神社の森」へのシカの侵入を防ぐために、全長230m、高さ1.8mのシカ防護柵を2022年の夏に設置した。由岐神社の森は、鞍馬集落から車で10分ほどに位置するアカマツとコナラの多い里山である。薪炭林等として利用され、集落から近い便利な火祭り素材の入手先であつたが、ここ最近は利用されなくなつた急斜面はヤブと化し、コバノミツバツジなどの新芽はすべてシカに食べられてしまつていただ。この森にぐるりとシカ防護柵を設置し、再び火祭りの材料を手に入れられる場所にしようとするプロジェクトが動き出している。

火祭りはただの刺激じゃない。
一度参加すると炎の虜になってしまう。
オレンジの炎と匂い、
そして音。



上 / 2023 年の鞍馬の火祭り。若者が御神輿の先頭に大の字になってつかまる「ヨッベンの儀」は鞍馬での成人になるための通過儀礼の名残りとも言われている（写真：深町加津枝氏） 下3枚 / 鞍馬の伝統的な保存食の「木の芽煮（きのめだき）」を炊く「鞍馬かどや」のご主人、原さん。大鍋で炊いて3~4時間ほど蒸らして昆布と一緒に細かく刻む。地元では半栽培のサンショウを活用して季節に合わせて自家製で楽しむ人も多い

*関係論文

- 日高美美、深町加津枝、伝統行事「鞍馬の火祭」で用いる森林の柴採取ボテンシャルの評価、日本緑化工学会誌、2021年47巻1号p. 69-74
- 奥野真木保、深町加津枝、京都市鞍馬における住民のサンショウの採集利用と継続要因、ランドスケープ研究、2023年86巻5号p. 617-622
- 田中慶太、深町加津枝、京都市鞍馬本町におけるコバノミツバツツジの潜在生育地の推定と柴資源としての利用可能性、日本緑化工学会誌、2023年49巻1号p. 69-74など



午前中の学生さんたちによる調査のようす。「昼食べたらまた山に入るか?車出すぐ(三宅会長)」「はい。お願ひします! (大学生さんたち)」というやり取りが微笑ましい

学生さんとともに
取材2日目は朝から由岐神社の森へ。こ
れの準備をし、娘さんも小さい子どもと一緒に祭りに参加するそう。どうしてこんなに鞍馬にこだわるかといふと「やっぱり祭りがあるからやろうな」と。祭りを通して女性同士の付き合いも深いという。

昨年、保存会は地元の小学生とその保護者を対象に手松明づくりの体験学習会を実施した。はじめての試みということだが、楽しいと思った子どもたちも多いそうで、「こうした取り組みが将来につながっていくとええなあ」と会長と副会長はその話をしながら心から嬉しそうだった。



笑顔が素敵な三宅ご夫妻

男も祭りに誇りをもっているけど、女の人もそう。

現在、火祭りの下準備を中心となつて活動している地元の正副区長を始めとする火祭関係役員は18名。ぎりぎりで活動をまわしている感もある。地域の人とも絆ができたのがとてもいいと感動が生まれつつある。

由岐神社の森の柴を刈るにはあと12年、一回りはかかる。変わるもの、変わつてはいけないものを見つめながらの息の長い活動に向けて支援が求められている。

この日の活動の大きな特徴は、京都大学の学生さんとの協働作業があること。この日、参加してくれたのは劉大可さん、小木曽亮さん、古市智紀さん、北尾圭悟さん、そして指導されている京都大学大学院准教授の深町加津枝先生。深町先生は、里山とそこに生きる生物、そして文化の多様性を次世代につないでいくための研究をされている方だ。

この日の作業は、劉さんが赤外線カメラの設置、小木曽さんと古市さんが植生調査、北尾さんが魚類の調査。そして保存会、氏子総代等の方々は、今年の春に植え付けたコバノミツバツツジ60本、クリ15本、サカキ25本の苗が雪で折れないように支柱をたてる作業をする。学生さんは月に何回も調査に訪れ、駅と森までの車出しは地元の方が快く担当してくれている。調査研究はすでに論文になつていてるものもあり、さまざま

まな成果が上がり始めている。*(関係論文はページ左上を参照)

調査の合間を縫つてボランティアを買って出てくれる学生らと地元の方との信頼関係は厚い。「彼らは眞面目で頼んだことをきちんとやつてくれる」「こちらの言うことを正確に理解できるし、疑問点も聞いてくれてやりやすい」「役員も年がいってきて、鞍馬自身も人口が減っているから大助かりですわ」「この学生さんたちの働きがなければ、この由岐神社の森のシカ防護柵は張れへんかった」と地元の方たち。学生たちも、「普段山に入っている方について作業をするのは勉強になります」「仕事の段取りなど、気を付けることも教えていただける」「火祭りがあることで、地元だけでなく他の地域の人とも絆ができたのがとてもいいと思う」と前向きだ。世代を超えた新たな協働が生まれつつある。

現存、火祭りの下準備を中心となつて活動している地元の正副区長を始めとする火祭関係役員は18名。ぎりぎりで活動をまわしている感もある。地域の人とも絆ができたのがとてもいいと感動が生まれつつある。

由岐神社の森の柴を刈るにはあと12年、一回りはかかる。変わるもの、変わつてはいけないものを見つめながらの息の長い活動に向けて支援が求められている。

①	②	③
④	⑤	⑥

由岐神社の森で生長する植物たち ①松明の材料として利用されるクロモジ ②植栽されたコバノミツバツツジ ③天然更新したアカマツ ④岩場の斜面のイワナシ ⑤シカ柵内の明るい環境で生長したヤマツツジ ⑥急斜面で植物の世話ををする



の刺激じゃない。一度参加すると炎の虜になってしまう。オレンジの炎と匂い、そして音。五感で感じてほしい」と。アカマツの油の「ジン」が燃える匂いは独特なもので、この地域で育った人々には祭りの匂いとしてしみ込んでいるという。

鞍馬13カ月

鞍馬に「1年13カ月」という言葉がある。「祭りのために1カ月分多く働く」という意味だそうだ。「外からやって来た人は、すごいお祭りですね。お金がかかるでしょうと

言わはるけど、多くはボランティア。1年間かけての祭りの準備にはたくさんの労力がかかる」と三宅会長。松明の材料はすべて山から採取してきた天然の素材。コバノミツバツツジなどの柴、アカマツのジン、木羽*を美しく形を整えてフジの根で括つて仕上げる。

材料の多くを集めるのも松明を作るのも、祭りに参加する鞍馬の人々。春にフジの花が咲いたところを見定めて秋にフジの根を探しに行つても、半日歩きまわって見つからない日もある。そして、ようやく見つけたフジの根を固い地面からツルハシで掘り出し、10mの根っこを一本取るのに20分はかかるという。

鞍馬の方々はほんとうに手間を惜しまずよく働く。予め、頼んでおいた業者さんに、5月～6月にかけて松明用の柴切りをしてもらい、乾燥のため山中に置く。9月には柴（約300束）を氏子が山から集落へ運び、各家に配る。10月にはフジの根採取とフジ洗い、松明づくりなど、一年中大忙しだ。作業は年配の方から若い人へ受け継がれ、神事であるがゆえに決まり事もたくさんある。「火祭りを見にくる人も自分のところの神さんを大事にせんと。自分とこのお祭りに協力してはる?」、という言葉を三宅さんから投げかけられ、今もその言葉を反芻している。

鞍馬の女性たち

鞍馬に「1年13カ月」という言葉がある。「祭りのために1カ月分多く働く」という意味だそうだ。「外からやって来た人は、すごいお祭りですね。お金がかかるでしょうと

一年を通して火祭りの準備を進める男性陣だが、女性陣にとつても火祭りは生活の要。10月になると祭り一色になり、祭り当

こでの活動の大きな特徴は、京都大学の学生さんとの協働作業があること。この日、参加してくれたのは劉大可さん、小木曽亮さん、古市智紀さん、北尾圭悟さん、そして指導されている京都大学大学院准教授の深町加津枝先生。深町先生は、里山とそこに生きる生物、そして文化の多様性を次世代につないでいくための研究をされている方だ。

この日の作業は、劉さんが赤外線カメラの設置、小木曽さんと古市さんが植生調査、北尾さんが魚類の調査。そして保存会、氏子総代等の方々は、今年の春に植え付けたコバノミツバツツジ60本、クリ15本、サカキ25本の苗が雪で折れないよう支柱をたてる作業をする。学生さんは月に何回も調査に訪れ、駅と森までの車出しは地元の方が快く担当してくれている。調査研究はすでに論文になつていてるものもあり、さまざま

まな成果が上がり始めている。*(関係論文はページ左上を参照)

調査の合間を縫つてボランティアを買って出してくれる学生らと地元の方との信頼関係は厚い。「彼らは眞面目で頼んだことをきちんとやつてくれる」「こちらの言うことを正確に理解できるし、疑問点も聞いてくれてやりやすい」「役員も年がいってきて、鞍馬自身も人口が減っているから大助かりですわ」「この学生さんたちの働きがなければ、この由岐神社の森のシカ防護柵は張れへんかった」と地元の方たち。学生たちも、「普段山に入っている方について作業をするのは勉強になります」「仕事の段取りなど、気を付けることも教えていただける」「火祭りがあることで、地元だけでなく他の地域の人とも絆ができたのがとてもいいと思う」と前向きだ。世代を超えた新たな協働が生まれつつある。



手松明づくり体験学習。フジの根っこでアカマツのジンを縛ることに挑戦する(2022年12月・写真:王聞氏)

「主人とはじめて鞍馬の火祭りを見たときは、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんなに心騒ぐお祭りがあるのかと衝撃でした。義理の母は根っからの鞍馬の人で、うちの家の前に御神輿と太鼓が来るに必ず太鼓をたたく。鞍馬の女人人はすごいなあ、その母から私につながつていてことを思うと、えらいところに来たなあと(笑)。祭りの日はどこ家の家にもお客様が大勢くる。三宅さんのお宅も30人以上といふことはあったそうで、その準備の大変さは想像に難くない。メニューは棒鰻と里芋の煮物、鯖寿司、天ぷら、そして欠かせない栗の赤飯など、いつもの料理をいつも通り用意するとはいえ、10月からたくさんの栗を剥いたという和美さん。「酢の物に使うミョウガもうちの畑でどれたもの。地元のものが少しでもあるのがいいかなと思ってます。花ひとつ飾るにしてもこの鞍馬では、想いがけなく使えたらしいなあと。男の人は、こんな

緑のための支援事業「わたしの自然観察路コンクール」

自然を大切に思う心を育てる絵地図と作文 通算実施40回を迎えた!

わたしの自然観察路コンクールは、全国の小・中・高校生を対象に身近な自然観察路を絵地図と解説文で紹介してもらうことによって次代を担う子どもたちの自然に関する意識の高揚を図ることを目的に実施されています。

1984年度からはじまった歴史あるこのコンクールには、これまで多くの子どもたちが応募し自然観察や考察を通して自然を大切に思う心が醸成され作品づくりを通して表現力を身に付けてきました。

今号では、2023年度の受賞作品を紹介するとともにFGF40周年を記念して過去の受賞者への取材を行いわたしの自然観察路コンクールの魅力を伝えます。



2023年度 第40回 わたしの自然観察路コンクール報告

第40回になる2023年度は、4部門で合計724件の応募があり、環境大臣賞の3件を含め、計21件の優秀作品を表彰しました。

ここでは環境大臣賞を受賞した小学生の部、中学生の部、高校生の部の3作品（絵地図と作品の一部）をご紹介します。



小学生の部

私のせせらぎ散歩道

古賀詠麻さん（清瀬市立芝山小学校6年生）
東京都

私には時間があれば散策に行ってしまうほどのお気に入りの観察路があります。全長約1.9キロメートル、1~2時間などあつという間に過ぎていきます。自宅を出て、雑木林の中の小道や川沿いの遊歩道、せせらぎ公園、畑を通るルートです。清瀬は東京郊外にある街ですが、祖父母が住んでいる長野の面影を感じられるほど自然豊かです。雑木林や川、せせらぎにはそれぞれの動物たちが自生していて、散策するたびに四季折々の姿を見せてくれます。私は、「清瀬の自然を守る会」というボランティアに参加しています。そこで活動は主に雑木林の管理等です。他にも、川の保全活動をしている団体もあるそうです。清瀬の素晴らしい自然はそんな方々によって守られているのを実感でき、私も自然を守る役割を引き継いでいくのだと思えるのでやりがいを感じられます。では、これから私の自然観察路のポイントを案内していきましょう。



高校生の部

ぼくの通学路 川の生き物観察

石川睦紀さん（愛知教育大学附属特別支援学校高等部1年生）
愛知県

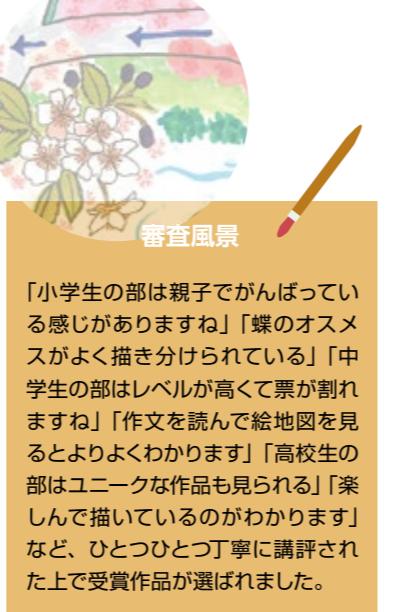
紹介するのは、僕の通学路です。学校は4月からですが、道を覚えて一人で学校に行けるようにするために、3月からこの道を歩いています。通学路は伊賀川ぞいです。伊賀川は一級河川矢作川水系乙川の支流の小さな川です。岡崎城の西側を流れるこの川は、通称伊賀川桜堤と呼ばれ、観光名所になっています。地元の方が川の手入れをしていて、とてもきれいな川です。僕の歩く所は岡崎城からはなれていて、桜が満開の季節でも、近所の人が散歩するくらいで、普段からあまり人はいません。朝夕は僕と同じ通学を利用する学生がたくさんいますが、自転車通学が多いせいか、このきれいでたくさんの生きものがいる川をのぞいたりしません。僕は練習の時、この道がとても楽しくてきれいだったので、初めて歩いた時は往復で一時間もかかってしまいました。こんなにも歩くのが楽しくて気持ちよくて、のんびりする道をみんなに紹介したいと思います。

中学生の部

荒神山公園の観察路

原田千愛さん（滋賀県立守山中学校1年生）
滋賀県

荒神山公園は、滋賀県彦根市にある山に囲まれた自然あふれる場所です。そのため、一年を通してたくさんの植物や生物を観察することができます。日当たりが全体的に良いので湿気は少なくこけはありませんが、草むらや林、石が多い場所などいろんな環境があり生物の観察にうってつけです。また、敷地内には給水ポイントがいくつもあるので、暑い夏でも歩きやすい観察路です。近くには、川も流れおり水鳥なども観察できます。そんな荒神山公園の観察路を十個のポイントに分けて紹介していきます。



絵地図の世界へ、 散歩に行こうよ

グリーンレター編集部



今、思うこと

虫好きな友だちにはなかなか出会えないというご兄弟ですが、それでもまわりに影響を与えるよう、長男の貴厚くんによると「ブラックバスは脂に臭みがあるけど、ブルーギルはけっこいいける」とのこと。近くの川で釣りをしては、友人と調理し、試食を楽しんでいる模様。地学部に所属していて、高校がる山の成り立ちを調べているといふ彼に、今思うこと、同世代に伝えたいことを問いかけると、「植物ひとつ、岩石ひとつ見つけるだけで、知識は広がって

お父さんのお仕事の関係で転勤が多かったという稻垣家。「引っ越しするたびに小旅行気分で、毎日散歩しては、そこにどんな生きものがいるのかを見つけて樂しことしました」とお母さん。同じ道でも毎日歩いてみると、何かしら発見があつて飽きないですよ。玄関先にキアゲハ用のバセリを置き、毎日の成長を楽しむ昆虫好きお母さんです。お父さんも負けず劣らず、地図、歴史、昆虫何でも来いという方で、100均の材料で標本箱を作ってしまうほど。やはり家族や環境の影響は大きいようです。

こちらの3兄弟、動植物のイラストが非常に上手で、発想も素晴らしい。応募したきっかけは?とお尋ねすると、「毎日、家族で散歩していく、どこで何の生きものを見つけたかを地図にまとめてみたら面白いかもね」と言っていたところ、お母さんがこんなコンクールがあるみたいよって持つて来て。面白そうと一度応募したらはまってしまって。夏が来たら応募するもんだということに(笑)。」

家族の日課「散歩」

「わたしの自然観察路コンクール」は、絵地図と作文をセットにして応募する、なかなかに難易度の高いコンクールです。そのハードルを越えて何度も応募し、しかも複数の入賞経験のある3兄弟がいらっしゃると聞き、滋賀県近江八幡市のご自宅にお話を伺いに行ってきました。ご自宅のある「安土」は信長のゆかりの町です。滋賀県の東部、琵琶湖東岸に位置し、安土桃山時代の語源ともなった安土城が建てられた地として知られています。



webサイトが公開されるまでは冊子で作品紹介がされていた(初代運営事務局/国立公園協会発行)。2012年に事務局は日本自然保護協会に引き継がれ、2018年からは日本環境教育フォーラムが担当する

審査員紹介



左手前から小林光氏(公益信託富士フィルム・グリーンファンド運営委員長)、水谷努氏(環境省)、赤松良伸氏(三井住友信託銀行)、執行昭彦氏(日本空間デザイン協会)、瀬尾隆史氏(日本環境教育フォーラム)、星野俊彦氏(富士フィルムホールディングス)

第40回 わたしの自然観察路コンクール 入賞作品一覧

賞	作品タイトル	氏名 (敬称略)	学校名	学年	都道府県
小学生の部 6作品					
環境大臣賞	私のせせらぎ散歩道	古賀説麻	清瀬市立芝山小学校	6年	東京都
優秀賞	鎌倉の自然観察路	木内瑛太	鎌倉市立御成小学校	2年	神奈川県
優秀賞	駒込・すがも生き物たんけんマップ	大塚史翔	豊島区立駒込小学校	1年	東京都
入選	湯の沢山菜採りの散歩道	平井満帆	飯能市立名栗小学校	6年	埼玉県
入選	楽しいな!! 理科が学べるばくのまち	高山翔暉	裾野市立千福が丘小学校	3年	静岡県
入選	キーナの森のたからものたち	小島匠太	神戸大学附属小学校	1年	兵庫県
中学生の部 6作品					
環境大臣賞	荒神山公園の観察路	原田千愛	滋賀県立守山中学校	1年	滋賀県
優秀賞	函南町の原風景	米田莉子	不二聖心女子学院中学校	2年	静岡県
優秀賞	のぼりべつの自然	成澤結紀乃	北海道登別明日中等教育学校	2年	北海道
優秀賞	里山の夏草	卯山愛菜	明治大学附属中野八王子中学校	3年	東京都
入選	群馬県立公園群馬の森観察路	小倉あおば	群馬県立中央中等教育学校	3年	群馬県
入選	夏の三ツ池公園自然路~幼い頃から親しんできた思い出の公園~	大森らら	明治大学附属中野八王子中学校	1年	神奈川県
高校生の部 6作品					
環境大臣賞	ぼくの通学路 川の生き物観察	石川睦紀	愛知教育大学附属特別支援学校高等部	1年	愛知県
優秀賞	自然観察の森~自然を満喫する~	四海香佳	賢明女子学院高等学校	1年	兵庫県
優秀賞	お地蔵さまとまつり散歩道~自然と共に歩む~	神足佳音	賢明女子学院高等学校	1年	兵庫県
優秀賞	地上107cmの景色	小川詠子	賢明女子学院高等学校	1年	兵庫県
入選	堀と石垣に囲まれた我が街の自然観察路	中本日和	賢明女子学院高等学校	1年	兵庫県
入選	おいしそう たのしそう 散歩道	森本真以	賢明女子学院高等学校	1年	兵庫県
団体の部 3作品					
優秀賞	姉弟で逆川緑地大冒険 part3	園部柚玲彩 計2名	茨城大学教育学部附属中学校・小学校(逆川緑地自然観察隊)	中学1年 小学5年	茨城県
優秀賞	香住の観察路~水でつながる生き物 map ~	藤井大翔 計5名	兵庫県立香住高等学校(課題研究清水班)	高校3年	兵庫県
入選	ほくしょうぶんこうのまわりのかんさつじ	細川來吾 計3名	長崎県立佐世保特別支援学校北松分校(ほくぶん2くみ)	小学3年 小学4年	長崎県

詳細は、「わたしの自然観察路コンクール」の公式サイトをご覧ください。
<http://kansatsuro.jeef.or.jp/>



3 緑とふれあいの 活動助成



1984年からはじまった助成件数は
40年間で220件、助成総額は
4億円を超えました。
ここでは2013年から10年間の
助成先から、助成後を含めた
活動・研究の報告をいただきました。
なお、83件のうち11件はご寄稿が
難しいと報告があったため、
72件の報告となります。



4 緑の保全と 活用の研究助成



作文等はサイトでご確認ください
<http://kansatsuro.jeef.or.jp/>



稻垣 慶宥くん
(次男) 中学校2年生

入賞作品

1年生：小学生の部・入選
にぎやかさん歩道
2年生：小学生の部・入選
日本さい古の神社でくらす生き物さん歩道
6年生：小学生の部・入選
いつまでも残したい散歩道



稻垣 慶宥くん
(光輝学園つくば市立松代小学校2年生)
「日本さい古の神社でくらす生き物
さん歩道」
2017年・入選



3兄弟仲良し！



稻垣 貴厚くん
(光輝学園つくば市立
松代小学校6年生)
「ゆったり、歴史、散歩道」
2019年・優秀賞



稻垣 典寛くん
(光輝学園つくば市立松代小学校1年生)
「おいしいざっそう みつけたマップ」
2018年・環境大臣賞

いく。その土地のことも広く知れる。外に出てみれば知識も話せる相手も増えると思う」。3兄弟とも地域の野球部にも所属しているというだけあって日焼けしている次男の慶宥くんは「意外と女子より男子のほうが虫を怖がるかも（笑）自分の決めたことは最後まで投げ出さないでやりとげたい。それが評価されなっても次につなげられることを発見できるから」。同じ世代に言いたいこととして、考えることをやめないで、とちょうど大人っぽい表情で語つてくれました。三男の典寛くんは「虫がきらいなのはしようがないかなとも思うけど、ちょうどでも自然に触れたら、虫とか自然を好きになれるかも」。絵地図の発想も構図も素晴らしいのは、この素直な考え方生きているのだと思いました。

お話しを聞いた後、日課だという散歩を一緒にさせていきました。意外と早いペースで歩くご家族。毎日歩いているだけはあります。途中、道沿いの昆虫や水辺の鳥を察しながら、安土の風情ある街並みをどんどん歩きます。いっしょに絵地図にも何度も登場している北川湧水へ。安土は伏流水が豊富で、自噴する湧水が多く見られるそうです。最後に今日の散歩の終着地、沙々貴神社へ。広い境内で「あ、ハシミョウ！」と、めざとく見つけた3兄弟。テレビより、ゲームより、外に出るのは面白いよ、と教えてくれた3兄弟。わたしも明日、散歩してみよう。



稻垣 典寛くん
(三男) 小学校6年生

入賞作品

1年生：小学生の部・環境大臣賞
おいしいざっそう みつけたマップ
2年生：小学生の部・優秀賞
生きものいっぱい見つけたよマップ
3年生：小学生の部・優秀賞
ぼくの大好きな歩道 すごくくマップ



ハイマツの実

は様々に考えられます。なぜ大量出没が起きるのでしょうか? 原因不足がその一因でした。知床のヒグマにとって最も食物に乏しい夏場。命を支える重要な食べ物となるのは、標高の少し高い所に生えているハイマツの実(球果)や、シウリザクラの果実など、山の実りです。しかしこれらは年によって豊凶があり、凶作年は山に食べ物が少なく、8月下旬に始まるサケ類の遡上を待たなければなりません。さらにマスやサケは近年、遡上数が減少し、年によっては遡上の開始が遅れることがあります。こういったクマにとつての不運“が重なった年に、人里周辺に食べ物を求めてヒグマが出やすくなることが分かつてきました。

物であり、重要な観光資源として地域の経済を支える存在でもあります。また、彼らは「食べて排泄する」という命の営みを通して、植物の種子を離れた場所に運び、サケ由来の豊富な栄養を陸に戻すことで、森林の維持や更新に大きな役割を果たしています。しかし一方で、一瞬で人を殺めることのできる力を有し、農作物や家畜・ペットに被害をもたらすこともあります。私たちが富士フィルム・グリーンファンドの助成をうけた研究課題では、「ヒグマと人の共存の道を探る」ことを目的に掲げてきました。今もこの想いは変わりませんが、「同じ

A photograph of a brown bear standing on a rocky, sandy beach. The bear is facing away from the camera, looking towards the left side of the frame where a body of water meets a forested hillside. The foreground is filled with large, light-colored rocks and pebbles. The background shows a dense forest covering rolling hills under a clear sky.

象徴する動物

なぜ起きるか？



サクラの実を食べたヒグマの糞 糞からDNAを採取する様



マスを待つ痩せ細ったヒグマ



ヒグマと観光船

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：「特定の人馴れた母と子が、人との軋轢を生む」という単純なストーリーでは語れないことが分かったことは大きな進展です。
 - 具体的な今後の目標：今後は人の安全とヒグマの保全、並びに観光利用とのより良い調和を目指すことが目標です。



サケ科魚類を食べて冬眠
備えるヒグマ

世界トヨタヘル

私たちが知床財団と共に
同で知床のヒグマの研究
を始めて約15年が経ちま
した。この間、富士ファイ
ルム・グリーンファンド
をはじめ、様々な団体・
機関より研究助成をいた
だいたお陰で、ヒグマに
関する様々な見知が蓄積
されてきています。しか
し同時に、人とヒグマの
軋轢も年を追うごとに深
刻化していくのを目撃の當
たりにしてきました。そ
んな私たちの15年。分
かつてきしたことと、これ
からの課題について、お
伝えしたいと思います。

年にかけて知床半島全域を対象とした大規模なDNA調査を実施しました。半島全域に70基近いヘアトリップ（ヒグマの背こすり行動を利用し、木に付着した毛を回収する仕組み）を配置し、毛の回収を実施しました。またDNA解析の試料となる糞を、ひたすら探し回りました。2020年は、体毛約7000サンプル、約500個もの糞を集め、DNAによる個体識別を行いました。この結果、知床半島に約500頭のヒグマが生息していることが明らかになりました。これは、小さな知床半島が世界でもトップレベルのヒグマ高密度生息地であることを意味しています。知床では現在、1300頭を超えるヒグマの個体情報がデータベース化されています。あるクマが問題を起こした場合、その個体の過去の行動履歴や、血縁関係、出生地などを検証することで、クマ対策に活かされています。



ヒグマが木に残した毛を回収する様子

東日本大震災の被災地における地域農業資源の保全に関する実証研究

観山恵理子 (東京農工大学農学部農業市場学
研究室 助教)
宮城県

本研究では、農地とそれに付随する水路等、地域全体で管理される農業資源を地域農業資源と位置付け、大規模な社会・経済的ネットワークが地域農業の回復に重要であるのかを明らかにすることを目的とした。具体的には、2011年3月に発生した東日本大震災によって、被災地である宮城県沿岸部における地域農業と社会関係資本（具体的には信頼）がどのように変容したかを明らかにし、その変容に影響を与えた要因を明らかにした。

聞き取り調査ならびにアンケート調査の結果、地域農業は、農家が災害による損失を個別に回復すること



仙台市内の農業法人での作業風景 (2015年4月)

理するための共同作業への参加は減少し、ボランティアなどの地域活動への参加は増加した。また、震災後の転居や軽犯罪に巻き込まれた経験が周囲の人々への信頼を低下させていた。被災地の社会関係資本を維持・向上させるために必要な対策としては、被災地の治安維持、収入源の確保、趣味のサークルなどの交流機会の提供などが挙げられる。以上の内容は、国際誌である Sustainability 2023, Volume 15, Issue 15 に掲載されている。今後はも注目してゆきたい。

皆様のご協力を得て娘と一緒に調査研究を進めています



震災後、地域資源を管

が難しかったため、農業法と人や共同経営に統合されたことが示され

『多摩川のケヤキと共生する会』青梅市多摩川流域のケヤキの食葉性害虫からの救済と緑陰の維持

古澤省吾 (たまあじさいの会)
東京都

2008年から始まった櫻の食葉性害虫（ヤノナミガタチビタマムシ）による櫻への被害は、東京都西部に位置する青梅市の多摩川、日の出町平井川、あきる野市秋川、埼玉県飯能市入間川に至る地域にみられた。ヤノナミガタビタマムシの成虫は体長2.6~4.2mmで形状は小判型の小さな虫。成虫は櫻などの粗皮下で越冬し、春に櫻の若葉に産卵し、幼虫は葉の葉肉を食べ成虫になる。そのため櫻は初夏を迎える季節に落葉を開始し、そして10月頃から新芽が芽吹くという異常な生育状況を示す。結果、樹勢は徐々に衰退し樹枝の枯死などがみられた。私たち青梅市多摩川の被害樹の



上：盛夏にもかかわらず葉を落とした多摩川畔の櫻 (2014年8月)
下：10年以上にわたり猛威を振るった害虫の被害からすっかり回復している (2023年9月)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：櫻の食葉害虫からの救済と緑陰の維持の方法を調べ、最適であると思われた、落ち葉掃き（幼虫が内在する落ち葉を取り除く）の実証実験に取り組んだ。
- 具体的な今後の目標：一方、毎月6か所を定期として観測を行いその変化を記録した。同時に食害の防除の方法を調べ、最適な方法を記録した。同時に食害られた、落ち葉掃き（幼虫が内在する落ち葉を取り除く）の実証実験に取り組んだ。

For FGF 40th Anniversary 「松代おやっこ村」魅力アッププラン

富澤恵子 (松代おやっこ村 会長)
新潟県

no.143
2015 年度
活動助成

当団体では、助成金を活用して農産物直売所「ふれあい市場」周辺の荒れ地を整備し、湧水を誘導してビオトープのあるミニ公園を造成した。現在でも湧水は絶えることなく、ビオトープにはメダカやフナなどが生息している。現在は、ふれあい市場を訪れる観光客や保育園児などの立ち寄り場所となっている。また、環境を整備したことによって市場の集客効果も上がり、農産物の販売は毎年増加し、助成年度当初の2倍以上になっている。整備した場所はその後、集落で買い上げ、定期的な道普請のたびに草刈りやゴミ拾いを行い、花を植え整備を継続している。

里山の農地や古道は荒れ放題になりつあった地域ではある

上：助成金を活用したビオトープづくり
下：現在のビオトープ

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：湧水ビオトープを造成し環境を整備したことが「ふれあい市場」としての雰囲気を高め、人々が立ち寄りやすい場所になった。
- 具体的な今後の目標：環境を維持する作業を継続するために、地元や都市の若者の協力体制をつくることが今後の目標である。

が、今年になつて古道を整備してトレイルランを開催するなど、都会から移住した若者を中心に環境保全の意識も高まり、地元の高齢者や児童・生徒を巻き込みながら活動を展開している。生物多様性の土台作りや自然資源の回復のためには、身近な荒れ地や埋もれた古道を整備する活動が最も身近な課題解決につながる。「松代おやっこ村」の7集落も、高齢者が周辺の畑を耕すことなどで里山が維持され、環境保全の一助となつている。

no.144
2015 年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary 奈良県レッドデータブックに記載されている自生山野草の保全と管理

久保博司 (里山の山野草を守る会 代表)
奈良県

私たちが活動する地は奈良県桜井市三谷地区にあり、桜井駅から15km程の大和川源流に近い中山間地帯にあります。三谷地区はもともと山野草の自生地でしたが危機的な状況にあり、豊かな山野草の生育を復活させるため「里山の山野草を守る会」を2008年に発足させました。

約1haのフィールドを4つの班で分担し、保全・観察活動を実施しています。活動当初の調査では、草本284種、木本139種を確認しました。その内、奈良県レッドデータブックに記載されている絶滅寸前種など30種は全班で、各班独自に設定した注目種(20~35種)は各班で、フォローしています。

観察活動は、定点観測と経時変化の記録であり、2021年には絶滅寸前種な

地域への貢献活動として農道とクロガリ（農地に隣接した山の土手）を整備（2023年6月）

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：刈払い機等の機械化が進展、電柵からワイヤーメッシュへの切替えで獣害対策が進展。
- 具体的な今後の目標：3年に及ぶ新型コロナの影響で新規加入者が減り、メンバーの高齢化が一気に進む。新規メンバーを増やすことが大きな課題。

ど22種※の年間詳細観察記録を1冊の本に纏めました。保全活動は、主に草や笹を刈り、獣害対策としてワイヤーメッシュ設置等の作業を行っています。2015年には環境省により「生物多样性保全上重要な里地里山500選」に選定されました。今後も今日までの地道な活動を継続し、豊かな地域づくりに貢献していくと考えています。



当会顧問梅原先生によるレクチャー (2015年10月)

対馬は九州と朝鮮半島の間に位置し、国内ではここだけでしか見られない希少な動植物種が分布している。2015年度のFGF助成により、希少種の生育状況の調査およびシカ柵を全面するためシカ柵の設置を行った。その後、ほぼ毎年シカ柵の管理と希少種の生育状況の調査を行い、対馬市で開かれる対馬学フォーラムにて発表してきた。そのせいもあり、対馬の生物多様性がいかに貴重なものであるか一般市民にも理解が広まつたと考えている。



上: 龍良山のシカ柵内
(助成当時、2016年8月)
下: 龍良山のシカ柵内 (2022年10月)
多少は回復傾向、樹木の下部の葉がシカに食べられずに残っているのが分かる

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと: 実際にシカ柵を設置できることや、地元の方々を巻き込むことで対馬の自然の豊かさや希少性を改めて認識してもらつたこと。
- 具体的な今後の目標: 地域の自然は地域の人々で見守るという環境づくりのために、対馬の自然の希少性をアピールするガイドブックを作成するのが当面の目標。



ただ、近年はむしろ異常気象(集中豪雨や猛暑)による土壤の乾燥および流出が著しく、自生地の環境は決して良くはない。また



島根大学におけるサクラ遺伝資源

Achievements and next step

サクラが植栽されており効率的な挿し木繁殖法の開発を検討した。島根大学生物資源科学部附属本庄総合農場には約160品種のサクラが植栽されており挿し木繁殖法の開発を検討した。

no.148
2015年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

対馬に生息する希少植物種を保全するための植生回復および栽培試験に関する調査研究

鈴木浩司 (富山県立大学)
長崎県

対馬は過疎地で、かつ離島といふことで、市民の経済状況は決して豊かとは言えず、経済的付加価値が見えない状況で生物種や生物多様性の保全を唱えて、頭では分かつていても実際の行動や施策にはなかなか繋がらないのが現実であろう。ネイチャーポジティブの(豊かな自然とともに歩む)社会の実現には一般市民が生物多様性の価値を認識し、その価値を実際の社会経済活動に実装できれば良いが、まだまだ難しそうである。まずはより多くの市民にその価値を広く理解してもらうことから始めたい。

対馬は九州と朝鮮半島の間に位置し、国内ではここだけでしか見られない希少な動植物種が分布している。2015年度のFGF助成により、希少種の生育状況の調査およびシカ柵を全面するためシカ柵の設置を行った。その後、ほぼ毎年シカ柵の管理と希少種の生育状況の調査を行い、対馬市で開かれる対馬学フォーラムにて発表してきた。そのせいもあり、対馬の生物多様性がいかに貴重なものであるか一般市民にも理解が広まつたと考えている。

ただ、近年はむしろ異常気象(集中豪雨や猛暑)による土壤の乾燥および流出が著しく、自生地の環境は決して良くはない。また

対馬は過疎地で、かつ離島といふことで、市民の経済状況は決して豊かとは言えず、経済的付加価値が見えない状況で生物種や生物多様性の保全を唱えて、頭では分かつていても実際の行動や施策にはなかなか繋がらないのが現実であろう。ネイチャーポジティブの(豊かな自然とともに歩む)社会の実現には一般市民が生物多様性の価値を認識し、その価値を実際の社会経済活動に実装できれば良いが、まだまだ難しそうである。まずはより多くの市民にその価値を広く理解してもらうことから始めたい。

対馬は過疎地で、かつ離島といふことで、市民の経済状況は決して豊かとは言えず、経済的付加価値が見えない状況で生物種や生物多様性の保全を唱えて、頭では分かつていても実際の行動や施策にはなかなか繋がらないのが現実であろう。ネイチャーポジティブの(豊かな自然とともに歩む)社会の実現には一般市民が生物多様性の価値を認識し、その価値を実際の社会経済活動に実装できれば良いが、まだまだ難しそうである。まずはより多くの市民にその価値を広く理解してもらうことから始めたい。

島根県大田市に於ける野焼き (2023年3月)

Achievements and next step

野焼きボランティアのための難燃性ゼッケン製作

和田謙二 (NPO 法人緑と水の連絡会議 事務局長)
島根県



群馬県みなかみ町の野焼き現場。難燃性ゼッケンを活用 (2016年)

ツールとして必須のゼッケンにおいても危機管理意識を醸成する効果がありました。ネットワーク加盟団体にも貸し出して、主催者が連続していく

野焼きの現場で活用していただいているます。

島根県大田市では天候や諸条件で中止になった年以外、毎年3月には100名をこえる参加者で三瓶山西の原草原の野焼きを実施しています。草原の貴重な植生が野焼きによって維持され、国立公園に訪れる観光客に景观を楽しんでいただいている。

島根県大島・徳之島に生息する固有種であるアマミノクロウサギは、国の天然記念物であり、環境省のレッドリスト絶滅危惧Ⅰ-B類に指定されている希少な動物です。外来生物であるマンガースによる捕食が問題となり、マンガース駆除が実施されました。そのような中、アマミノクロウサギの遺伝的多様性の度合いを把握することは環境保全の観点からもとても重要と考えました。本助成に採択され、ミトコンドリアDNAの一部塩基配列とマイクロサテライトマークターを用いて、アマミノクロウサギの遺伝的多様性の度合いを把握することによっても重要なと考えています。



上と下: 実験風景

Achievements and next step

希少動物アマミノクロウサギ保全に向けた分子遺伝学的アプローチ

溝口 康 (明治大学農学部)
鹿児島県

近年は、ノネコなどによる捕食が問題となつており、引き起こされる問題で最近は、アマミノクロウサギの感染症に対する遺伝子領域の遺伝的多様性の度合いについて、解析しています。アマミノクロウサギの感染症に対する遺伝的な感受性や抵抗性を明らかにすることとはとても重要なと考えています。このような研究を通して、アマミノクロウサギの保全に役立てることが出来れば幸いです。

no.145
2015年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary

野焼きボランティアのための難燃性ゼッケン製作

和田謙二 (NPO 法人緑と水の連絡会議 事務局長)
島根県

no.147
2015年度
研究助成

希少動物アマミノクロウサギ保全に向けた分子遺伝学的アプローチ

溝口 康 (明治大学農学部)
鹿児島県

合いで遺伝特性を明らかにすることを目的として研究を実施しました。題と/or、引き起こされる問題の一つに感染症が考えられます。そこでアマミノクロウサギの感染症に対する遺伝子領域の遺伝的多様性の度合いについて、解析しています。アマミノクロウサギの免疫に関連する遺伝子領域の遺伝的多様性の度合いについて、解説しています。

FGF設立40周年、誠におめでとうございます。

サクラにおける効率的な挿し木繁殖法の確立およびサクラ遺伝資源の保存・管理に関する基礎研究

田中秀幸 (島根大学生物資源科学部)
島根県

サクラは日本の国花であり、花見は古くから人々に楽しまれてきた文化である。しかし、サクラは病気に弱く、適切な管理をしなければその寿命は数十年と短い。花見の文化や名所を保存管理していくためには、効率的な増殖法を開発し、数十年ごとに新たなサクラを植樹する必要がある。サクラの増殖において、挿し木は特別な技術を必要とする繁殖法であるが、多くの品種で挿し木による発根が困難であり効率的ではない。もし、どの品種においても挿し木による発根が可能となれば、これら問題を解消すると考え、本助成により効率的な挿し木繁殖法の開発を検討した。



(左) 褐変した挿し穗
(中央) 褐変抑制剤で処理した挿し穗
(右) 発根した挿し穗

no.149
2015年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

サクラにおける効率的な挿し木繁殖法の確立およびサクラ遺伝資源の保存・管理に関する基礎研究

田中秀幸 (島根大学生物資源科学部)
島根県

サクラは日本の国花であり、花見は古くから人々に楽しまれてきた文化である。しかし、サクラは病気に弱く、適切な管理をしなければその寿命は数十年と短い。花見の文化や名所を保存管理していくためには、効率的な増殖法を開発し、数十年ごとに新たなサクラを植樹する必要がある。サクラの増殖において、挿し木は特別な技術を必要とする繁殖法であるが、多くの品種で挿し木による発根が困難であり効率的ではない。もし、どの品種においても挿し木による発根が可能となれば、これら問題を解消すると考え、本助成により効率的な挿し木繁殖法の開発を検討した。

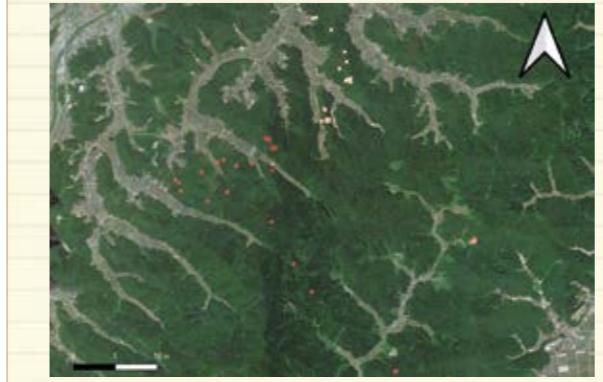
サクラは日本の国花であり、花見は古くから人々に楽しまれてきた文化である。しかし、サクラは病気に弱く、適切な管理をしなければその寿命は数十年と短い。花見の文化や名所を保存管理していくためには、効率的な増殖法を開発し、数十年ごとに新たなサクラを植樹する必要がある。サクラの増殖において、挿し木は特別な技術を必要とする繁殖法であるが、多くの品種で挿し木による発根が困難であり効率的ではない。もし、どの品種においても挿し木による発根が可能となれば、これら問題を解消すると考え、本助成により効率的な挿し木繁殖法の開発を検討した。

サクラは日本の国花であり、花見は古くから人々に楽しまれてきた文化である。しかし、サクラは病気に弱く、適切な管理をしなければその寿命は数十年と短い。花見の文化や名所を保存管理していくためには、効率的な増殖法を開発し、数十年ごとに新たなサクラを植樹する必要がある。サクラの増殖において、挿し木は特別な技術を必要とする繁殖法であるが、多くの品種で挿し木による発根が困難であり効率的ではない。もし、どの品種においても挿し木による発根が可能となれば、これら問題を解消すると考え、本助成により効率的な挿し木繁殖法の開発を検討した。

For FGF 40th Anniversary
GPS首輪を用いた積雪地域におけるイノシシの行動特性

山本麻希 (NPO法人新潟ワイルドライフリサーチ会長)
新潟県

NPO法人新潟ワイルドライフリサーチは、新潟県内で生じる野生動物と人間の共存を目指し、鳥獣対策の支援や保全に関する調査研究を行っている。新潟県のイノシシは、明治以降一度絶滅したと言われているが、その後分布は拡大傾向にあり、日本のコメどころでもイノシシによる農作物被害は深刻な問題である。積雪期は、効率的な銃猟が実施できるため、積雪下のイノシシの行動をGPS首輪で調べ、イノシシが利用する環境の特徴を明らかにすることを目的と



上：イノシシのGPSデータから得られた結果
下：昨年度捕獲したイノシシ

した。助成後も合計で6年近く、くり罠を用いた捕獲を試み、2022年に1頭のイノシシの捕獲が成功しGPS首輪を装着することができた。このデータより、イノシシは、苦手な積雪を避け、雪の少ない地域に冬季は移動し、春になると再び内陸に戻る移動を行っていることが明らかとなった。近畿地方に苦慮している。今後は、中山間地域の農村の過疎、高齢化が大きな問題となり、鳥獣被害の対策に苦慮している。

年は、中山間地域の農村の過疎、高齢化が大きな問題となり、鳥獣被害の対策に苦慮している。今後は、中山間地域の地域活性化や里山林の手入れなどに活動を広げていきたいと考えている。

データより、イノシシは、苦手な積雪を避け、雪の少ない地域に冬季は移動し、春になると再び内陸に戻る移動を行っていることが明らかとなつた。近畿地方に苦慮している。今後は、中山間地域の農村の過疎、高齢化が大きな問題となり、鳥獣被害の対策に苦慮している。今後は、中山間地域の地域活性化や里山林の手入れなどに活動を広げていきたいと考えている。

For FGF 40th Anniversary
外来アライグマの営巣特性調査と対策コスト削減のための巣箱型ワナの開発

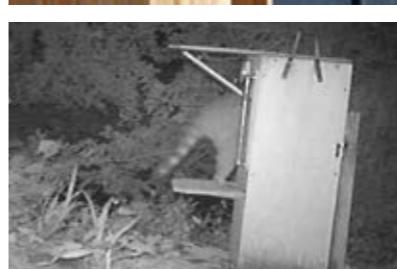
池田透 (北海道大学)
北海道

本事業においては、アライグマが樹洞を出産や休息場所に用いる巣として利用する生態的特性を応用して、低コストで継続的なワナ捕獲作業が可能な外来アライグマ対策では、自治体等の予算不足は深刻な課題で、誘因餌を用いる従来の箱ワナでは、餌の交換と在来種の混獲を防ぐための毎日のワナの見回りが必要で、このことが長期的な捕獲作業の継続を難しいものにしていました。

そこで本事業では、アライグマの営巣調査から明らかとなつた樹洞等を営巣場所として選択する行動特性を利用して、餌の代わりに當巣空間を誘因とする誘因餌の不要なワナを



上：巣箱型ワナ実験（2016年11月）
下：巣箱型ワナで捕獲されるアライグマ



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：営巣特性調査の他に、アライグマを用いた実験を重ねることで、捕獲効率のよい巣箱型ワナの構造に仕上げることができました。
- 具体的な今後の目標：さらに改良を加え、長期的使用にも耐えるワナの開発を目指します。

開発しました。さらに、この巣箱型ワナに捕獲情報が自動的にスマートフォン等にメールで連絡が入るGPS端末を装着することで、一度ワナを設置すると、捕獲情報の連絡が来るまで一切の見回りが不要な防除システムを構築することができました。

まだ量産体制は整ってはいませんが、いくつかの自治体では実際の現場にこの巣箱型を導入していただき、着実に捕獲実績を上げてきている状態で、今後はより多くの防除活動に活用していくだけるように改良を進めていく予定です。

no.159
2017年度
活動助成
For FGF 40th Anniversary
里山を活かしたこどもの遊び場と大人のコミュニティースペース

青木 薫 (土沢森あそびの会)
神奈川県

同じフィールドで活動していた「MTBチーム」のメンバー達と、里山資源（Heritage）を守り（keeper）、次世代に受け継ぐことをミッションとする合同会社ヘリテッジキーパーを設立。森林サービス産業（キャンプ場運営、MTBや森林浴などのコンテンツを活かした観光プログラム・教育研修プログラムの企画運営など）を中心に、津久井の風土と歴史を活かし、川や畑を活用した事業も行っています。楽しむことで豊かな自然を守れるように、多様な人々が交流できる地域づくりを目指します。

●助成を受けていちばん進展があったこと：林道を整備したこと、森の保全と活用が進んだ。

●具体的な今後の目標：森林サービス産業といつても、単なる消費の場ではなく、楽しみながらkeeperとして参加してもらえるような場を運営していく。企業などにも働きかけ、次世代につなぐための経済基盤をつくっていく。



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：林道を整備したこと、森の保全と活用が進んだ。
- 具体的な今後の目標：森林サービス産業といつても、単なる消費の場ではなく、楽しみながらkeeperとして参加してもらえるような場を運営していく。企業などにも働きかけ、次世代につなぐための経済基盤をつくっていく。

no.160
2017年度
活動助成
For FGF 40th Anniversary
子どもたちによる里山再生プロジェクト～南アルプスユネスコエコパーク内での獣害にによる畠づくり～

加藤博 (南アルプス子どもの村中学校)
山梨県

南アルプス市築山集落では、古民家のリフォームと畠仕事を続けており、地域の人と道でそれ違えば声を掛け合ったり、畠や草刈りのアドバイスをいただいたりといった関係が続いている。獣害についてよく知りは、電気柵を利用したり、野生動物（シカ、イノシシ、サル）による食害から、果実や野菜を守る活動が継続している。活気あふれる子どもたちの姿は、農作業にやつてくる方々に元気と希望を与え、市民活動にも発展するきっかけになりました。以前はさびしい無人集落であった地に人が行き交うようになりました。

一方で、中学生たちが時間をかけて作成した冊子は、現在も細々と売れ続けており、南アルプスユネスコエコパークの自然や野生生物たちの多様性や保護に関して知る材料となつていています。

耕作放棄されていた田んぼを復活させ、しきかき作業。アイガモ農法を進め、近所の方々も足をとめて見守つてください。

●助成を受けていちばん進展があったこと：地域的魅力を再発見し、発信できたことで、自然や人の暮らしをより身近に感じられるようになった。

●具体的な今後の目標：築山の畠でリジェネラティブな大地再生農業に挑戦し、環境に配慮した農業に挑戦したい。



耕作放棄されていた田んぼを復活させ、しきかき作業。アイガモ農法を進め、近所の方々も足をとめて見守つてください。

●助成を受けていちばん進展があったこと：地域的魅力を再発見し、発信できたことで、自然や人の暮らしをより身近に感じられるようになった。

●具体的な今後の目標：築山の畠でリジェネラティブな大地再生農業に挑戦し、環境に配慮した農業に挑戦したい。

一方で、中学生たちが時間をかけて作成した冊子は、現在も細々と売れ続けており、南アルプスユネスコエコパークの自然や野生生物たちの多様性や保護に関して知る材料となつていています。



耕作放棄されていた田んぼを復活させ、しきかき作業。アイガモ農法を進め、近所の方々も足をとめて見守つてください。

●助成を受けていちばん進展があったこと：地域的魅力を再発見し、発信できたことで、自然や人の暮らしをより身近に感じられるようになった。

●具体的な今後の目標：築山の畠でリジェネラティブな大地再生農業に挑戦し、環境に配慮した農業に挑戦したい。

再捕獲や成体雌に電波発信器を装着して行動を追跡した結果、調査地における産卵場所の特徴や孵化した幼体の生息環境や



上: 水田で確認した電波発信機を装着したニホンイシガメの雌個体(2018年6月)
下: 「ニホンイシガメの里」に作った子ガメ用の保護ハウス(2022年10月)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと: 調査から本種の産卵場、幼体の利用環境が明らかになりました。現在、お寺や地域の方々の協力を得て「ニホンイシガメの里」創りに取り組んでいます。
- 具体的な今後の目標: 本種の個体群調査と土水路、湿地、森林の管理などを通じて里山の生物多様性の維持や回復に貢献していきたい。

二ホンイシガメの標識を設置して行動を追跡した結果、調査地においての産卵場所の特徴や孵化した幼体の生息環境や

大人も子どもも楽しく 安全に自然体験が 楽しめるガイアの森づくり

平本友香 (NPO 法人ガイア自然学校とやま)
富山県

当団体は富山県内で幼児～中学生を主な対象とした自然体験活動を行っています。2014年より富山県富山市の長年放棄地となっていた里山（私有地）をお借りして、森遊びや川遊びが楽しめるフィールド「ガイアの森」として整備してきました。インフラ（電気・水道・ガス）がない森に「コンボストトイレや東屋を作りし、児童や未満児を対象とした「森のようちえん」活動を行っていました。しかし、一部遊歩道が未整備の部分があり、また12月から3月は気温が低く、毎年50cm以上の降雪があるため、活動が難しい状況でした。

遊歩道の整備と、冬でも快適に活動できるよう薪



スを備えた母屋は暖かく、薪ストーブで簡単な調理もすることができます。真冬でも子ども達が安心して活動を楽しむことができるようになりました。今後はソーラーや風力などの持続的に利用できるエネルギーの導入と、小学生を対象とした森のフリースクール事業の立ち上げに向け準備を行っています。

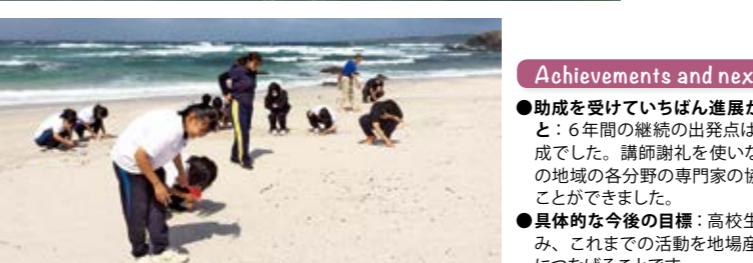
達の手で森の遊歩道と、約10m四方の母屋を2年半の月日をかけて建設しました。土間、フローリング、畳スペー

豊北の水と生態系の 研究・下関北高協同 ～粟野川流域図作成を原点に～

岡崎新太郎 (北高夢ロード実行員会)
山口県

題名の活動に対しても2018、2019年度に貴会より助成をいただきました。山口県下関市豊北町は山口県北部に位置し、基幹産業は農業・漁業です。豊北町にある唯一の高校である山口県立下関北高の教育をサポートするという形で活動をしました。

2018年度は豊北高校3年生・生徒3名の授業「自然探求」、環境・自然」のサポートという形で活動をしました。豊北町を流れ粟野川、粟野川源流の白滝山、粟野川が流れ込む油谷湾、粟野川から運ばれる豊富な有



機物で漁場が形成されている角島の生態系の研究をフィールド・ワークを中心に行いました。高校生の環境・自然に自主的な興味・関心を身近な素材をテーマに引き出すのが目的でした。素材としてはアオノリ、ホタル、水生生物、地質岩石観察、製塩プランクトン訪問、流域の立体模型図の作成です。以降、ほぼ同じテーマで2023年度まで高校2、3年生「地域探査授業・環境自然」サポートを6年間継続実施しています。

海岸の自然観察を通じて マイクロプラスチックの 危険性を学ぶ

no.169
2018 年度
活動助成

馬塚丈司 (特定非営利活動法人
サンクチュアリエヌピーオー)
静岡県

マイクロプラスチックごみ（以下「マイクロプラスチックごみ」と）は、海洋汚染と野生生物の誤食を招く。それを防ぐには、マイクロプラスチック問題の早期回収が一番の対策である。当法人がウミガメの保護活動を行う中、遠州灘海岸で1983年に世界最大のオサガメの死体が漂着し、体内から多量のマイクロプラスチックを確認した。以降、マイクロプラスチックによる生物被害や環境汚染を訴え、海岸清掃を行ってきた。

近年は、海洋プラスチック問題として世界的な問題となつたが、まだまだ市民の理解や意識の向上が不足しており、身近な問題と捉えきれずにいる。そこで市民の理解を深めるための事業を実施した。



上：遠州灘海岸でのマイクロプラスチック回収体験
下：マイクロスコープで魚の内臓から取り出したマイクロプラスチックを観察

HP



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：事業の立ち上げ時に助成頂いたことで、啓発横断幕やマイクロプラスチック回収の道具が整備出来、学校での環境学習や海岸での活動の機会が多く持てた。
- 具体的な今後の目標：事業は、現在も継続中であり、より多くの子どもたちへのマイクロプラスチック体験が出来るように、他県にも働き掛けていきたい。

の観察会と同時にマイクロプラスチック回収体験を実施。プラスチックのマイクロ化を阻止する必要性を伝えた。野生生物のプラスチック誤食防止のための啓発として、マイクロスコープで魚の内臓からマイクロプラスチックを観察し、身近に迫る危険性を伝えた。環境学習では、海岸の砂を学校に持ち込み、水槽に砂を投入してマイクロプラスチックを浮かせて確認。マイクロプラスチックの危険性を伝えた。また、パネル展を開催してプラスチック削減への取り組みを呼びかけた。

伊豆諸島青ヶ島の 絶滅危惧種が生育する 噴気孔原群落の 保全に向けた基礎研究

no.170
2018 年度
研究助成

上條隆志 (筑波大学)
東京都

青ヶ島は伊豆諸島の有人島としては最南に位置する、面積6平方kmの火山島である。島は二重カルデラとなっており、島全体が絶景である。島には独自の自然景観が見られ、その代表が森の中に裸地状の景観を作り出している噴気孔原である。噴気孔原は、地温が高く、水蒸気が立ち上がり、島では“ひんぎや”と呼ばれ、サクラジマハナヤスリなどの希少植物の生育地となっている。また、ひんぎやの地熱は、人の暮らしとも密接であり、サウナや調理にも活用されてきた。

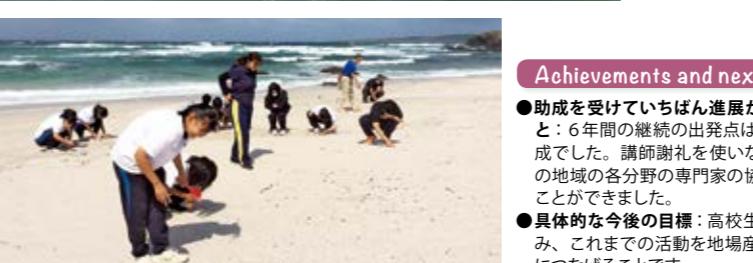
本研究は、この噴気孔原の希少植物の基礎知識を得ることを目的とし、生育状況調査と地温測定を行った。調査の結果、サクラジマハナヤスリなどが生育する噴気孔



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：青ヶ島現地の自然保護の担い手との関係が強まること。希少な植物を大切に見守ることの重要性を訴えることができた。
- 具体的な今後の目標：定期的に観察会などの普及活動を行うこと。特に、人と自然の持続的な関りを大切にできるよう、協力できること。国立公園などの保全の組み作りに貢献すること。

原では地温が40℃を超える測定値が見られ、50℃を超える場合もあり、特殊な立地条件であることが明らかになりました。さらに、2018年には青ヶ島で自然観察会を行い、噴気孔原の独自性と保全の必要性に関する講演を実施できた。島での観察会は2019年も実施し、2021年には青ヶ島還済太鼓の荒井氏が参加する伊豆諸島の自然保护オンラインシンポを伊豆諸島植生研究グループの代表として開催した。2023年には青ヶ島還済太鼓が主催する青ヶ島シンポジウム（開催地：銀座）において噴気孔原の重要性を含めた講演を行った。2023年10月にも青ヶ島現地での観察会と講演を予定している。本研究の成果と青ヶ島での普及活動は、絶滅危惧種が生育する噴気孔原群落の保全に関する理解を高めることに強く貢献できたと考えている。



●助成を受けていちばん進展があったこと：6年間の継続的出発点はFGFの助成でした。講師謝礼を使しながら、この地域の各分野の専門家の協力を得ることができました。

●具体的な今後の目標：高校生を巻き込み、これまでの活動を地場産業の再建につなげることです。

For FGF 40th Anniversary
網走市こまば木のひろばにおけるエゾモモンガの生態調査

後藤ひとみ (東京農業大学生物産業学部
海洋生物学教室)
北海道

調査地、網走市こまば木のひろばは森林総面積16・7haの保安林で、森にはハルニレ、ミズナラ、ハンノキなど湿性の広葉樹、トドマツ、エゾマツなどの針葉樹が混生し、多くの野鳥やワシリス、シマリス、エゾモモンガ、アカネズミなどが生息する貴重な森である。森林保護の観点から市に働きかけることを目的とし、生活圏を森林に依存するエゾモモンガの生態調査を2016年から開始し、2018年から2020年まで助成を受けた。

調査方法はエゾモモンガの食痕などを有する木を探し、巣穴の可能性がある木は樹高、胸高直径、樹種、巣穴の高さ、向きなどを計測し記録した。また、1年を通して、特定の巣穴にセンサー・カメラを取り付け、定点観測を行った。



上: モモンガトラップによるモモンガ捕獲のようす
(助成当時)
下: 定点カメラによる貯食行動記録 (現在)

調査の結果としては、當栗木の樹種ではシラカンバが全体の約28%、イタヤカエデ、ハルニレが約15%で樹種の約半数を占めており、また、巣穴の向きとしては南東、南西を含む南向きが約44%と日当たりの良い巣穴を好むことが判明した。また、現在は冬季のみ貯食行動の確認に絞って調査を行っている。

調査の結果としては、當栗木の樹種ではシラカンバが全体の約28%、イタヤカエデ、ハルニレが約15%で樹種の約半数を占めており、また、巣穴の向きとしては南東、南西を含む南向きが約44%と日当たりの良い巣穴を好むことが判明した。また、現在は冬季のみ貯食行動の確認に絞って調査を行っている。

調査地、網走市こまば木のひろばは森林総面積16・7haの保安林で、森にはハルニレ、ミズナラ、ハンノキなど湿性の広葉樹、トドマツ、エゾマツなどの針葉樹が混生し、多くの野鳥やワシリス、シマリス、エゾモモンガ、アカネズミなどが生息する貴重な森である。森林保護の観点から市に働きかけることを目的とし、生活圏を森林に依存するエゾモモンガの生態調査を2016年から開始し、2018年から2020年まで助成を受けた。

調査方法はエゾモモンガの食痕などを有する木を探し、巣穴の可能性がある木は樹高、胸高直径、樹種、巣穴の高さ、向きなどを計測し記録した。また、1年を通して、特定の巣穴にセンサー・カメラを取り付け、定点観測を行った。



上: モモンガトラップによるモモンガ捕獲のようす
(助成当時)
下: 定点カメラによる貯食行動記録 (現在)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと: もっとも進展があったことは海浜植物群落の再生である。
- 具体的な今後の目標: 海ごみ問題などを授業に組み入れ、地域の海辺全体を守っていく意識の醸成に努めていく環境教育プログラムとすることを目標に取り組んでいる。

For FGF 40th Anniversary
岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

島田直明 (岩手県立大学)
岩手県

no.174
2018年度
研究助成

For FGF 40th Anniversary

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

天然記念物コクガンの 捕獲および GPS送信機装着事業

鈴木卓也 (南三陸ネイチャーセンター友の会)
宮城県

助成をもとに、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団、南三陸町自然環境活動センター等と共同し、ラムサール条約登録湿地である宮城県の志津川湾で2019/2020年の越冬期に4羽、2020/2021年の越冬期に4羽の計8個体のコクガンを捕獲、GPSロガーを装着して越冬期間中の行動圏と環境利用、渡りの経路等を調べました。初年度の4羽はすべて幼鳥うち3羽は単独幼鳥でした。次年度の4羽はペア+幼鳥2羽からなる家族群です。単独幼鳥は、昼は漁港で採餌し、夜間は漁港沖の海上において、行動圏は狭いものでした。家族群の場合親鳥とともに移動することで幼鳥の行動圏が単独幼鳥よりも広がることがわかりました。



上：発信機装着の様子
下：発信機を装着した幼鳥の放鳥直後の様子



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：助成のおかげで広範囲で多くのサンプルを採取することができます。国内全般を網羅したコクガンの遺伝構造が明らかになりました。
- 具体的な今後の目標：サンプリング場所をさらに増やしてデータの精度を上げ、中国、韓国、台湾など外国産コクガンの解析も進めて日本との関係を明らかにします。

渡りの経路について、初年度は1羽の幼鳥がオホーツク海の対岸に位置が得られました。次年度の家族群では、オス成鳥が北極海沿岸のレナデルタを経由して北海道に戻るまでのデータ到達したこと、幼鳥の1羽が道東で他の家族と離れてカムチャツカ半島東方に長期間滞在したことが確認でき、志

津川湾のみならず日本で越冬するコクガンたちの渡りのルート、繁殖地及び換羽地に関する貴重なデータを得ることができました。

内部標識を用いた 絶滅危惧種ギバチ (*Pseudobagrus tokiensis*) の生活史調査

早川拓真 (宇都宮大学大学院)
栃木県

わが国では一次的自然に生息する淡水魚の減少が顕著であるとされており、環境省より、「一次的自然に生息する淡水魚保全のための提言」が公表された。ギバチ（以下本種）も同提言中で類型3類に分類されおり、保全対象種であるが、本種の生活史に関する報告は少ない。本研究では本種にP-IタグとV-Eタグの2種類の内部標識を使用し、河川における本種の移動分散を調査した。調査は栃木県那珂川水系の小河川約3kmを対象とし、2019年～2021年に実施した。

調査期間中、P-Iタグ・V-Eタグそれぞれで330個体・201個体の本種を標識・放流し、54個体を2回以上再発見した。再発見個体の平均移動距離は146m（最大322m・最小11m）であり、本種の移動分散に季節的な流下・遡上の方



上：エレクトロフィッシャーによるギバチの採捕の様子
下：学会での成果発表の様子



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：小規模な研究室では難しい機材が調達でき、幅広い研究を視野に入れることができたこと。
- 具体的な今後の目標：助成費で購入したカメラの改良を続けており、ギバチの産卵行動を撮影することが目標である。

向性は見られなかつたことから、本種は生活史の多くを河川内の小さなスケールで完結していることが確認された。

宇都宮大学農学部の農村生態工学研究室では、里地里山に暮らす生き物とともに、その地に根付いている文化（例えれば、ギバチは栃木県では「ギンギョ」と言う名で親しまれている）の保全にも貢献することが考えられる。今後も希少な生物の生態解明を通じて、人と生き物の関わり合いの中で培ってきた文化も保全したいと考えている。

広域分布型 絶滅危惧植物の域外保全策 確立に関する研究： ラン科カンランを例にして

長澤淳一 (京都府立大学
京都地域未来創造センター)
京都府

広域に分布する絶滅危惧植物の特徴を把握し、保全策を立案する際に必要な知見を得ることを目的として、カンランを対象に研究に取り組みました。ラン科シンンラン属のカンランは絶滅危惧IB類に分類され、分布域は広いものの昭和時代を中心とした園芸目的の採取により、開花株を自生地で見ることが困難な植物です。一方で、過去に自生地から採取され、採取地情報が付与された栽培個体も多く存在しています。このような現状のもと日本国内におけるカンランの遺伝構造を調べ、域外保全における適切な管理体制を排除するため、カンランと近縁種を対象にしたEST-SSR解析を行い、

上：自生地でカンランの花を見ることは非常に稀だが、奄美大島では2個体の開花株が確認できた
下：カンランの遺伝構造（京都大学・西原美佳氏作成）。南西諸島（屋久島、奄美大島、沖縄本島）にそれぞれ大きく分化した固有系統が認められ、九州と中国・四国地域を境界に東西で遺伝的分化がみられた

次に選抜後のカンラン個体についてSNPを用いた集団遺伝解析を行いました。その結果、野生集団の遺伝構造として、南西諸島（屋久島、奄美大島、沖縄本島）にそれぞれ大きく分化した固有系統が認められました。一方で昭和時代を中心に採取され産地情報が明確な栽培個体の解析結果は現存する自生個体の遺伝構造とは一致せず、九州と中国・四国地域を境界に東西で遺伝的分化がみられ、種子の山播きのよさが示唆されました。

●助成を受けていちばん進展があったこと：助成のおかげで広範囲で多くのサンプルを採取することができます。国内全般を網羅したコクガンの遺伝構造が明らかになりました。

●具体的な今後の目標：サンプリング場所をさらに増やしてデータの精度を上げ、中国、韓国、台湾など外国産コクガンの解析も進めて日本との関係を明らかにします。

本実践研究では、2017年に和歌山県田辺市本宮町（特に大塔川流域）を襲った大水害をきっかけとして、「恵みをもたらす川」と「水害をもたらす川」を同時に捉え、専門的な知見に加え地域住民の暮らしと共にある川の伝統知を再認識・再評価し、環境・防災プログラムの形成と実践を目指しました。

当地の小学校ではこれまででも、地域



世界遺産センターでの展示を台湾の大学関係者に説明している様子

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：生物学、民俗学、社会学など多様な観点から一つの河川を研究することで獲得できる地域知・伝統知の広がりを実感した。地域文化への理解を深めるとともに、取得した情報を広める活動が実践できた。
- 具体的な今後の目標：川の特性や場所と人間の利用に関する研究を進め、環境・防災意識の向上に寄与する実践研究を進めていきたい。

研究では先ず同属近縁種の浸透性交雑や誤同定個体を排除するため、カンランと近縁種を対象にしたEST-SSR解析を行い、

●助成をもとに、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団、南三陸町自然環境活動センター等と共同し、ラムサール条約登録湿地である宮城県の志津川湾で2019/2020年の越冬期に4羽、2020/2021年の越冬期に4羽の計8個体のコクガンを捕獲、GPSロガ

ーを装着して越冬期間中の行動圏と環境利用、渡りの経路等を調べました。初年度の4羽はすべて幼鳥うち3羽は単独幼鳥でした。次年度の4羽はペア+幼鳥2羽からなる家族群です。単独幼鳥は、昼は漁港で採餌し、夜間は漁港沖の海上において、行動圏は狭いものでした。家族群の場合親鳥とともに移動することで幼鳥の行動圏が単独幼鳥よりも広がることがわかりました。

●助成を受けていちばん進展があったこと：助成のおかげで広範囲で多くのサンプルを採取することができます。国内全般を網羅したコクガンの遺伝構造が明らかになりました。

●具体的な今後の目標：サンプリング場所をさらに増やしてデータの精度を上げ、中国、韓国、台湾など外国産コクガンの解析も進めて日本との関係を明らかにします。

本実践研究では、2017年に和歌山県田辺市本宮町（特に大塔川流域）を襲った大水害をきっかけとして、「恵みをもたらす川」と「水害をもたらす川」を同時に捉え、専門的な知見に加え地域住民の暮らしと共にある川の伝統知を再認識・再評価し、環境・防災プログラムの形成と実践を目指しました。

当地の小学校ではこれまででも、地域



世界遺産センターでの展示を台湾の大学関係者に説明している様子

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：生物学、民俗学、社会学など多様な観点から一つの河川を研究することで獲得できる地域知・伝統知の広がりを実感した。地域文化への理解を深めるとともに、取得した情報を広める活動が実践できた。
- 具体的な今後の目標：川の特性や場所と人間の利用に関する研究を進め、環境・防災意識の向上に寄与する実践研究を進めていきたい。

研究では先ず同属近縁種の浸透性交雑や誤同定個体を排除するため、カンランと近縁種を対象にしたEST-SSR解析を行い、

●助成をもとに、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団、南三陸町自然環境活動センター等と共同し、ラムサール条約登録湿地である宮城県の志津川湾で2019/2020年の越冬期に4羽、2020/2021年の越冬期に4羽の計8個体のコクガンを捕獲、GPSロガ

ーを装着して越冬期間中の行動圏と環境利用、渡りの経路等を調べました。初年度の4羽はすべて幼鳥うち3羽は単独幼鳥でした。次年度の4羽はペア+幼鳥2羽からなる家族群です。単独幼鳥は、昼は漁港で採餌し、夜間は漁港沖の海上において、行動圏は狭いものでした。家族群の場合親鳥とともに移動することで幼鳥の行動圏が単独幼鳥よりも広がることがわかりました。

●助成を受けていちばん進展があったこと：助成のおかげで広範囲で多くのサンプルを採取することができます。国内全般を網羅したコクガンの遺伝構造が明らかになりました。

●具体的な今後の目標：サンプリング場所をさらに増やしてデータの精度を上げ、中国、韓国、台湾など外国産コクガンの解析も進めて日本との関係を明らかにします。

本実践研究では、2017年に和歌山県田辺市本宮町（特に大塔川流域）を襲った大水害をきっかけとして、「恵みをもたらす川」と「水害をもたらす川」を同時に捉え、専門的な知見に加え地域住民の暮らしと共にある川の伝統知を再認識・再評価し、環境・防災プログラムの形成と実践を目指しました。

当地の小学校ではこれまででも、地域



世界遺産センターでの展示を台湾の大学関係者に説明している様子

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：生物学、民俗学、社会学など多様な観点から一つの河川を研究することで獲得できる地域知・伝統知の広がりを実感した。地域文化への理解を深めるとともに、取得した情報を広める活動が実践できた。
- 具体的な今後の目標：川の特性や場所と人間の利用に関する研究を進め、環境・防災意識の向上に寄与する実践研究を進めていきたい。

研究では先ず同属近縁種の浸透性交雑や誤同定個体を排除するため、カンランと近縁種を対象にしたEST-SSR解析を行い、

●助成をもとに、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団、南三陸町自然環境活動センター等と共同し、ラムサール条約登録湿地である宮城県の志津川湾で2019/2020年の越冬期に4羽、2020/2021年の越冬期に4羽の計8個体のコクガンを捕獲、GPSロガ

ーを装着して越冬期間中の行動圏と環境利用、渡りの経路等を調べました。初年度の4羽はすべて幼鳥うち3羽は単独幼鳥でした。次年度の4羽はペア+幼鳥2羽からなる家族群です。単独幼鳥は、昼は漁港で採餌し、夜間は漁港沖の海上において、行動圏は狭いものでした。家族群の場合親鳥とともに移動することで幼鳥の行動圏が単独幼鳥よりも広がることがわかりました。

●助成を受けていちばん進展があったこと：助成のおかげで広範囲で多くのサンプルを採取することができます。国内全般を網羅したコクガンの遺伝構造が明らかになりました。

●具体的な今後の目標：サンプリング場所をさらに増やしてデータの精度を上げ、中国、韓国、台湾など外国産コクガンの解析も進めて日本との関係を明らかにします。

本実践研究では、2017年に和歌山県田辺市本宮町（特に大塔川流域）を襲った大水害をきっかけとして、「恵みをもたらす川」と「水害をもたらす川」を同時に捉え、専門的な知見に加え地域住民の暮らしと共にある川の伝統知を再認識・再評価し、環境・防災プログラムの形成と実践を目指しました。

当地の小学校ではこれまででも、地域



世界遺産センターでの展示を台湾の大学関係者に説明している様子

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：生物学、民俗学、社会学など多様な観点から一つの河川を研究することで獲得できる地域知・伝統知の広がりを実感した。地域文化への理解を深めるとともに、取得した情報を広める活動が実践できた。
- 具体的な今後の目標：川の特性や場所と人間の利用に関する研究を進め、環境・防災意識の向上に寄与する実践研究を進めていきたい。

研究では先ず同属近縁種の浸透性交雑や誤同定個体を排除するため、カンランと近縁種を対象にしたEST-SSR解析を行い、

●助成をもとに、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団、南三陸町自然環境活動センター等と共同し、ラムサール条約登録湿地である宮城県の志津川湾で2019/2020年の越冬期に4羽、2020/2021年の越冬期に4羽の計8個体のコクガンを捕獲、GPSロガ

ーを装着して越冬期間中の行動圏と環境利用、渡りの経路等を調べました。初年度の4羽はすべて幼鳥うち3羽は単独幼鳥でした。次年度の4羽はペア+幼鳥2羽からなる家族群です。単独幼鳥は、昼は漁港で採餌し、夜間は漁港沖の海上において、行動圏は狭いものでした。家族群の場合親鳥とともに移動することで幼鳥の行動圏が単独幼鳥よりも広がることがわかりました。

●助成を受けていちばん進展があったこと：助成のおかげで広範囲で多くのサンプルを採取することができます。国内全般を網羅したコクガンの遺伝構造が明らかになりました。

●具体的な今後の目標：サンプリング場所をさらに増やしてデータの精度を上げ、中国、韓国、台湾など外国産コクガンの解析も進めて日本との関係を明らかにします。

本実践研究では、2017年に和歌山県田辺市本宮町（特に大塔川流域）を襲った大水害をきっかけとして、「恵みをもたらす川」と「水害をもたらす川」を同時に捉え、専門的な知見に加え地域住民の暮らしと共にある川の伝統知を再認識・再評価し、環境・防災プログラムの形成と実践を目指しました。

当地の小学校ではこれまででも、地域



世界遺産センターでの展示を台湾の大学関係者に説明している様子

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：生物学、民俗学、社会学など多様な観点から一つの河川を研究することで獲得できる地域知・伝統知の広がりを実感した。地域文化への理解を深めるとともに、取得した情報を広める活動が実践できた。
- 具体的な今後の目標：川の特性や場所と人間の利用に関する研究を進め、環境・防災意識の向上に寄与する実践研究を進めていきたい。

研究では先ず同属近縁種の浸透性交雑や誤同定個体を排除するため、カンランと近縁種を対象にしたEST-SSR解析を行い、

●助成をもとに、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団、南三陸町自然環境活動センター等と共同し、ラムサール条約登録湿地である宮城県の志津川湾で2019/2020年の越冬期に4羽、20

For FGF 40th Anniversary
**動植物と
その生息環境の保全と
安全登山のために**

大塚信男 (雷神山を愛する会)
群馬県

助成金を頂いた後、コロナで思うように活動できないこともあって、大変でしたが細々と活動を続けられたのも、助成金のおかげと感謝しています。私たちの活動では、カツコソウの保護活動と合わせ、その他の植物の保護も行っています。一番大きな活動は、貴重な植物をシカなどの食害から守るために行っているネット張りでしょか。貴重な植物は、ネットを張つて数年後には復活が顕著になります。しかし、ネット張りは資金もかかりますし人手もかかります。ある程度の価値な道具とネット、消耗品の購入にかけられ、ネットを張る活動は助成金を頂いた後大きく進展しました。今年何度もネットを張る活動は行っていましたし、その成果があちこちで出てきています。

カツコソウの保護活動の一環では、カツコソウが咲いている時期には首都



上：ネットの設置中
下：ネット内で復活した植物

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：ネット張りが大きく進展したこと。
- 具体的な今後の目標：今まで通り動植物を守る運動と、登山道整備など地道な活動が続けられればと思います。

圈などから大勢の登山者が訪れます。交代で保護地に出向き、案内やレクチャーをしており、登山者から喜ばれています。登山道整備などは、集まつて行なこともあります。会員が山に入ったとき自主的に行なっていることが多いです。

私たちは貴重なカツコソウやその他の植物などが、未来に残せるような活動ができるだと考えています。今は、会員には新しい人たちも入会して活動を支えています。大きな活動はできませんが、協力しながら続けていこうと思っています。

が、協力しながら続けていこうと思っています。

For FGF 40th Anniversary
**「法」の字プロジェクト
～低層植物の保護・再生による
京都五山送り火の山の保全、
そして、送り火行事の
保存継承へ～**

岩崎 勉 (公益財団法人松ヶ崎立正会
(妙法保存会) 理事長)
京都府

崎「妙法」送り火の保存継承を図るプロジェクトに、2020年にFGF様の助成金を交付頂きました。具体的には、山の法面が急峻で、鹿の増加によりツツジ等の食害が著しく、地盤が露出している「法」の字山を対象に、基の火床の周辺四方を囲む遮断柵(防鹿柵)を設置するものでした。

その第1弾として、鹿の移動の実態(大学での研究結果)を踏まえ、東側と西側に南北方向の柵(延長260m)の設置を2021年3月に完了しました。翌春には開花するツツジが見受けられ、プロジェクトの成果の端緒を確認することができました。FGF様の



上：ツツジ等の生育状況
下：ドローン撮影による植生の経年変化のようす

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：ツツジ等の低層植物の新芽が鹿の食害を受けず、徐々に開花に至っている。ツツジの根が枯れることなく、その地盤が維持されている。
- 具体的な今後の目標：ドローン撮影等を通じ、植生の経年変化を確認し、必要に応じ、育苗等の取り組みを考える。

ご支援を始め、「宝が池の森」保全再生協議会との連携、京都大学の高柳先生、京都先端科学大学の丹羽先生との協働、松ヶ崎消防分団等地域の関係団体有志の皆様のご協力に、改めて感謝している次第です。

2021年度は、クラウドファンディング等を通じたご寄付も得て、山頂と山麓、東西方向の柵(延長170m)をお蔭様で、翌年3月に総延長430mの設置を完遂することができました。

先鞭を付けて頂き、第2弾として

no.186
2020 年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary
**絶滅危惧II類
「ヤマグチサンショウウオ」
の棲息環境の保護・保存と
小学児童の環境教育**

新村義昭 (小串ヤマグチサンショウウオ保護・保存会)
山口県

山口県

自然環境教育の一環としての、児童による飼育・観察における最大の問題点は、越夏対策、すなわち、夏季の高温(25℃以上)によってほとんどのヤマグチサンショウウオが死亡することであった。この解決のため、2021年には、大型水槽の水を冷却し、間接的に飼育箱を冷やす冷却器と水中ポンプを導入したが、児童個別の飼育観察箱を冷やすまでには至らなかった。

2022年は、飼育箱の天井に保冷剤を置いて冷ます方法に加え、飼育の頂き、試みた結果、極めて良い成績、すなわち、夏季のヤマグチサンショウウオの死亡数が劇的に減少した。そ

no.187
2020 年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary
**分布北限域における
エダミドリイシの
有性生殖法を用いた
養殖・移植方法の
確立に向けた活動**

NPO 海辺を考える しおさい 21
静岡県

静岡県

エダミドリイシは、絶滅危惧II類に分類される日本の温帯域に特有の枝状の造礁サンゴである。かつて静岡県沼津市西浦久連地先には、分布北限域最大規模のエダミドリイシの群落が見られた。その群落は、90年代半ばの冬の低水温や、ガンガゼの食害などで消滅の危機に瀕するようになっていた。そのため、枝の小片を海中で育てて移植する方法で、保全と現状復帰の取り組みを続けてきている。しかし、元々あるエダミドリイシの枝を育て増やす方法だけでは、群落全体の遺伝的多样性が減少し、環境変動に対する脆弱な群落となつている可能性が否めないと考えた。

2020年

2021年

年に助成を受けた活動では、現行の活動に加え、

エダミドリイシ群落の遺伝的多様性を高めることにつながる、配偶子から育てる方法を確立することを目的とした。

2020年に陸上水槽中に移したエダミドリイシの産卵を観察することができた。さらに、2021年には卵と精子を採取し、受精させ、幼生まで飼育し、それらの幼生を基盤に着床させ、基盤ごと幼体を海中に移設した。その後、生残と成長の観察を現在も継続的に行なっている。

2021年8月に生まれたエダミドリイシ群落の様子(2022年8月)

同じエダミドリイシ群落の1年後の様子(2023年8月)

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと：助成を受けられたことで、新しい活動に取り組めた。
- 具体的な今後の目標：分布北限域のサンゴは現在も大きく変動しつつある。そういう変動と向き合いながら保全にかかる活動を続け、次世代に伝えたい。

2023年8月

七北田低地 (仙台・多賀城)への シジュウカラガん復元に 向けた基礎研究

呉地正行 / 澤 祐介 (日本雁を保護する会)
宮城県

日本雁を保護する会では、20世紀初頭に日本の空から姿を消してしまったシジュウカラガン(絶滅危惧IA類)の群れについて、仙台市八木山動物公園、ロシア科学アカデミー、米国魚類野生生物局と共同で1983年より「羽数回復事業」を実施してきました。この中で、人工繁殖した鳥をかつての繁殖地である千島列島で放鳥する活動を行ってきました。その活動が実り、現在日本への渡来数は9000羽を超えるまでに回復し、宮城県北部を中心越冬しています。

本研究では、かつて中心的越冬地だった宮城県中部の七北田低地(仙台市・多賀城市)にシジュウカラガンの群れを蘇らせるために、発信器を装着した個体を追跡し、越冬に必要な環境要素を調査しました。

2021年12月上旬に中継地



上: 化女沼でシジュウカラガンのねぐら入りを観察する仙台育英学園高校の生徒たち(2022年12月)(写真提供:仙台育英学園高等学校)
下: 公開シンポジウムで、多賀城市長(左)に提言を行う仙台育英学園高校生(2023年5月)(写真提供:東北緑化環境保全(株))

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと: 越冬期間中の行動圏、利用環境、ねぐらを詳細に特定できたことに加え、繁殖地である千島列島と越冬地である宮城県の往復の渡りルートを詳細に追跡することができ、1年を通じたシジュウカラガンの生活を明らかにすことができました。
- 具体的な今後の目標: 現在、七北田低地では、地元の仙台育英学園高等学校などと連携したシジュウカラガン復活活動を開催しています。多賀城市への政策提言などをを行い、活動の核となっている地元高校生を支援しながら、本研究の成果を活かし、次世代主導による七北田低地での越冬地復活をめざします。

七北田低地での越冬地復活をめざす活動を開展していく。ある秋田県大潟村でシジュウカラガン9羽に発信器を装着し、追跡を行ったところ、厳冬期の12月下旬に宮城県仙北平野北部に移動し、化女沼、水田、麦畠などの農地で採食していることが明らかになりました。これらのデータをもとに重要な生息地とその環境要因を特定し、保護区と越冬地の環境改善と拡大を求める政策提言を行いつつ、七北田低地での越冬地復活をめざす活動を開展していく。

三宅島における ハチジョウススキの特徴 —自然と文化をつなぐ茅葺の 復活をめざして—

黒田乃生 / 上條隆志 / 廣田充
(筑波大学)
東京都

役所跡の屋根葺に三宅島のハチジョウスキを使うことです。その第一歩として、2023年には筑波大学のメンバーに加え茅葺の専門家と職人の方をお招きして島の小学校と中学校でワークショップを実施しました。授業で茅について学んだ後、実際に茅を刈って小さな小屋を作りました。冬には試験的に山でハチジョウススキの刈り取りを始める予定です。これから三宅島の茅葺をつなぐ新しいしくみを作ります。

伊豆諸島の三宅島は火山の島として有名です。繰り返す噴火とともに人々が暮らしてきました。島では溶岩流や泥流などで植生がなくなつた後に時間をかけて回復する「遷移」を繰り返しています。2000年の大噴火から20年経つ今、山はハチジョウスキに覆われています。土壤が殆ど存在しない厳しい状況でも生きることができるハチジョウスキは噴火と切つても切れないと考えています。一方、三宅島では以前はほとんどの建物が茅葺だったことが文献からわかつています。共有の茅場があり共同で屋根を葺き替えていました。明治期以降に急速に減少し、現在は島役所跡のみになってしましました。

私たちの目標は、数年後の島



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと: 小中学校での茅に関するワークショップを実施して、茅に対する意識が少しづつ広がったこと。
- 具体的な今後の目標: 屋根葺に三宅島の茅を使うこと。みんなで屋根葺を手伝えるように準備すること。

奄美群島における 漂着物学研究推進の ための基礎的研究

西村千尋 (歩健学研究室)
鹿児島県

子の記録」として、第22回漂着物学会岩手・大槌／釜石大会で発表を行う予定です。その後は、調査回数の多かつた徳之島に関するデータ解析を行うことにより、漂着物学の推進に貢献していきたいと考えています。

さらに、研究成果や連携による資料提供などをもとに、環境教育だけでなく、保健教育などと融合した教育活動にも取り組んでいるところで、徳之島だけでなく、喜界島でも教育現場に赴き、授業を担当する機会を得ました。その教育効果などについても、日本学校保健学会第69回学術大会で報告する手続きを進めています。

●助成を受けていちばん進展があったこと: 奄美群島内での連携ができたこと、特に、一升展示の提案をきっかけに、奄美大島瀬戸内町郷土館での企画展、さらにギャラリートークまで発展したこと。
●具体的な今後の目標:もちろん調査も継続しますが、これまでのデータの解析を進め、漂着物学会で発表、さらに論文執筆までつなげていきたいです。

福島県飯舘村 - 耕作放棄地の 土地活用に向けた漆の 試験栽培、苗木生育のため の圃場整備活動

佐々木亨 (特定非営利活動法人ウルシネクスト)
秋田県

生してきた日本人の生活と深く関わってきた。現代においてもプラスチックに代わる代替素材など、様々な分野で活用できる可能性を秘めていることから、国連が主導するSDGs(持続可能な開発目標)に合致した、村の新たな産業に育ててられるのではないかと考えています。

まずは試験栽培によって飯舘の地でしっかりと育つか、生育環境を整えます。

生してきた日本人の生活と深く関わってきた。現代においてもプラスチックに代わる代替素材など、様々な分野で活用できる可能性を秘めていることから、国連が主導するSDGs(持続可能な開発目標)に合致した、村の新たな産業に育ててられるのではないかと考えています。

福島県飯舘村は、2011年3月に起きた東日本大震災による福島第一原発事故の影響により、一時全村避難となりました。6年後には一部の地域を除く地区の避難指示が解除され、徐々に帰村者は増えてきましたが、一次産業の扱い手の急激な減少と放射能の影響で、多くの農地が耕作放棄地になりました。

そこで農作物に代わる新たな産業育成の試みとして、耕作放棄地を活用似ていることや、福島には会津塗の文化があり、漆に関しても協力、連携が得やすいこともきっかけとなりました。漆が天然素材であることも注目しています。漆は循環可能な地上資源で、古来、自然と共に

研究助成の成果は、群島間のネットワークに関するものと、2022年度の第21回漂着物学会鹿児島・徳之島大会で報告しました。また、群島における漂着果实と種



●助成を受けていちばん進展があったこと: 助成金で購入させていただいた草刈り機で、圃場の一部草刈り(試運転)を行いましたが、省力化、効率化に大きな効果がありました。
●具体的な今後の目標: 会津若松の有志団体と連携して苗木の間引きや植え替え作業を行い、適正本数にして生育環境を整えた後に、本栽培に向けての作業効率の検証等を行う予定です。

For FGF 40th Anniversary
炭素循環型農業による
生きものの
保全・再生の拠点づくり

肥後貴美子 (熊野の森もろおかスタイル)
神奈川県

東日本大震災と福島第一原発事故を契機に、エネルギーと食を地域で考えた土地を「ミニヨーロピ農園」にして3年。農業従事者の高齢化により農地を手放す人が増え、生きものの生息地が資材や残土置き場に替わり、失われるスピードが年々早くなってきているのを感じます。

農園の約半分の土地に炭素循環型農業を取り入れ、枯れた竹や枝など炭素素材を畝に入れ微生物の力で野菜を育てています。不耕起で無肥料、無農薬、刈った草はマルチとして利用。炭素素材



上:吉田俊道さんの「菌ちゃん先生の畠づくりワークショップ」
下:採れたスイカをみんなで食べる

で養蜂もしているので、ミツバチが運んできた花粉を分析することで周囲にどんな蜜源があるか、ポリネーターとしてのミツバチの役割、自然資源や生命の循環などを子どもたちに伝えていきます。今後は自家採種した種を育て、地域の在来種として未来へ継承していく



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと: 菌ちゃん(吉田俊道)先生の講演会と畠づくりのワークショップを行ったことで、関心を持つ地域の方々とつながれました。
- 具体的な今後の目標: 野菜の収量を増やすこと。自家採種。循環を学ぶ仲間づくり。

を分解する糸状菌などの菌類を増やすい団粒構造の土にすることで、発酵型の烟にします。いただいた助成金で炭素循環農法の講師をお呼びし、実際の野菜作りを続けています。同じ場所で誤解しながらも、農法を実践し多品種の野菜作りを続けています。

敵作りを地域の方と行うことができました。この農法に興味のある地域の人を多く発掘でき、多世代の方々と試行錯誤しながらも、農法を実践し多品種の野菜作りを続けています。同じ場所で養蜂もしているので、ミツバチが運んできた花粉を分析することで周囲にどんな蜜源があるか、ポリネーターとしてのミツバチの役割、自然資源や生命の循環などを子どもたちに伝えていきます。今後は自家採種した種を育て、地域の在来種として未来へ継承していく

For FGF 40th Anniversary
埼玉西部を流れる
高麗川並びにその流域の
水生生物の調査並びに
川での子供たちへの
環境教育活動

伊藤教行 (NPO法人 奥武蔵ピースラボ 理事)
埼玉県

私共NPO法人奥武蔵ピースラボでは、富士フィルム・グリーンファンド様の助成金のご支援を受けて、2022年度より日高市の子ども達の夏休み体験企画である「ひ・まわり探検隊」で、高麗川でのガサガサ体験を企画して、2022年に1回、2023年には2回、小学生を対象に1回の企画で15名の子ども達に川でのガサガサを体験して頂きました。富士フィルム・グリーンファンド様には、子ども達が使用する「イフジヤケット購入のご支援を頂きました。

この企画では、埼玉県日高市を流れる清流、荒川水系の高麗川の中流域の清流橋付近において、手網を使用して川の水生生物を捕獲し、観察、同定を行うもの



上:ひ・まわり探検隊
下:ひ・まわり探検隊活動の様子



Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと: 足不足していた消耗品類の購入が可能となり、より安全・確実に活動が可能となつた。
- 具体的な今後の目標: 活動を実施している埼玉県の奥武蔵エリアに密着した、生物多様性を維持・保存する活動を深耕していきたい。

であり、私達NPO法人奥武蔵ピースラボの環境部会のメンバーと、ボランティア参加の市内の大学生、特別支援学校の先生、市役所の職員、一般市民が子ども達の水生生物捕獲の指導や捕獲した水生生物の同定（その生物の種類の特定）を実施、観察後川に放流する活動で、参加した子ども達は、手網を使用して捕獲した、魚類ではカジカ、カワムツ、ドジョウ、ギバラなど、ヌマエビやスジエビ、ヤコ、トビケラやクロカワムシなどの水生昆虫を笑顔で観察しました。夏休みの忘れられない思い出となりました。

no.203
2022年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary
自然界と共生し、
自然界を保全していく
町づくり活動

佐藤東児 (小泉ユニバーサルビーチユニット)
宮城県



ビオトープ清掃集合写真 (2023年10月)

吉町小泉地区は東日本大震災により、町は勿論、海岸線・川全て地形が変わった。住民達は自宅再建に追われる中、新たな小泉地区には県内最大高14・7mの防潮堤が建設され、住民同士・住民と行政での大きい波紋が起きました。一方で防潮堤裏に動植物専門の教授の意見を取り入れながら、人工的なビオトープもつくれられました。震災復興にもめどが立ち、これからというときに新型「ロナウイルスが猛威をふるい、住民達や地区内には重たい空気が漂つてしましました。当団体は地区行事がおこなえないそんな時だからこそ、小泉にある自然界的の魅力を知る時間にあつと考えた。魅力の例を語つと、大きい波紋がおきた県内最大高の防潮堤は、探鳥会をした際に、鳥が逃げない距離だといつことがわかりましたし、ビオトープが

あることも小泉地区の人はほぼ知らない状態です。小泉は、海・山・川・ビオトープ全てがある素晴らしい地区なので、住み続けられる町づくりをしていくには保全は必須です。

今回、ビオトープ清掃を3回・津谷川清掃を2回・探鳥会を3回実施しました。最初は参加人数が少なく苦戦しましたが、回を重ねると1人2人と増えてきました。私たちの活動を知り、ビオトープをつくれからの管理方法なども含め参加してくれました。住んでいる場所の近くにこんな場所があつたんだね、望遠鏡で見る鳥は迫力がありハマリそつ、などと皆言つてくれます。この活動を「ツコツと続け発信していく、住民達が自然環境を意識して行動していくことが出来れば、この先の小泉地区は【自然と共存していける素晴らしい環境】になる」と考

えていました。

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと: 県や市といつた行政との連携・協力が得られたこと。官民一体でこれらも実施しています。
- 具体的な今後の目標: 自然界と共存している、住み続ければられる素晴らしい町を目指す上で、まずは全住民配布用の「小泉地区で見られる鳥の種類・植物の種類・底生生物の種類・魚の種類」をまとめたMAPなどのパンフレットを作成することです。

no.204
2022年度
活動助成

For FGF 40th Anniversary
淀川のワンドに
生息するイタセンパラを
はじめとした在来魚類の
保全活動と地域に根ざした
環境教育活動

三橋雅子 (城北水辺クラブ / 大阪工業大学工学部)
大阪府

城北水辺クラブは、大学の目の前にある淀川と、そのワンドに生息する絶滅危惧種イタセンパラの保全を目的として結成された大阪工業大学の公認クラブです。「淀川水系イタセンパラ保全民ネットワーク」に所属し、イタセンパラが生息するワンドで定期的に地引網を引いて、外来魚（主にブルギルとオオクチバス）の駆除と、在来魚の調査を主体的に行っています。

淀川のイタセンパラは2006年に野生絶滅をしており、2013年に飼育個体500匹が放流されました。2018年春には2万匹を超える稚魚が確認されましたが、翌年以降、稚魚の数が減少し、2022年の春には80個体しか確認されており、大変厳しい状況です。

2023年は城北ワンドに加えて、上流の庭窪ワンドでも8日間の地引網による活動を行いました。調査結果

果は学会等で発表しています。せりに、誰でも参加できる外来魚駆除釣り大会（5月）の開催や、近隣の小学校でワンドの生物の観察会（11月）を実施するなど、淀川に生息する希少な生物や外来魚の問題などを知つてもうつ活動も行っています。

今後も活動を続けて、イタセンパラをはじめとした在来魚が淀川に普通に生息できるようになると、日本第二の都市大阪にある自然について地域の皆さんをはじめ、多くの人に知つてもらいたいです。

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があったこと: 電動船外機付き小型ボートと地引網を購入し、駆除活動の実施と調査・研究をする環境が整つた。
- 具体的な今後の目標: 活動を継続し、淀川の生態系や生物の生息環境の調査をすること、生物の現状を近隣住民の方と共有する場を作りたい。

上:ワンドで力を合わせて地引網を引いているところ (2023年2月)
下:小学校のワンドの生物観察会で採集した生物を解説中 (2022年11月)

3 緑とふれあいの活動助成 4 緑の保全と活用の研究助成 40th anniversary of FGF

耳石微量元素分析を用いたニホンウナギのハビタット間移動と堰との関係の解明

久米 学 (京都大学フィールド科学教育研究センター)
和歌山県

ウナギ属魚類は、国内外を問わず、絶滅の危機に瀕しているため、その保全のための研究は数多く行われている。中でも、堰のような比較的小規模な河川横断工作物は、ニホンウナギの移動阻害の原因となり、その影響評価は急務である。そこで本研究では、潮止堰に着目し、耳石の年齢査定と Sr:Ca 比分析を用いて「ニホンウナギが生活史の中で、どのくらいの全長の時に、どのくらいの高さの「堰」を登るのか」を調べ、堰の高さとそれを超えられる本種の全長との関係を解明することを目的とした。

A close-up photograph showing a person's hands holding a clear plastic bag containing a small, dark-colored fish. The person is wearing a blue long-sleeved shirt. In the background, another person wearing glasses and a white shirt is smiling. The scene appears to be outdoors.



■自主的な事業

2023年度、公益信託富士フィルム・グリーンファンド（以下、「FGF」とする）は、次の4つの事業を展開いたしました。これからも自然環境の保全に役立つ幅広い事業を各方面のご協力をいただきながら進めていく所存です。一層のご支援をお願いいたします。

A group of students in white shirts and blue shorts standing in a grassy field, looking at something off-camera.



助成事業

1年間、もしくは2年間の身近な自然とのふれあい活動や自然環境保全のための調査研究に対する助成です。本年度は活動助成6件、研究助成5件の計11件が助成対象に決定されました。2023年度の助成先の紹介は「76~77ページを」ご覧ください。

A photograph showing three students standing on a stone wall by a river. One student is pointing towards the water, while the other two look on. They appear to be examining a map or document together.

緑のための支援事業

より多くの人々にFGFへの理解を深めていたぐために、写真展やシンポジウムなど、さまざまな活動をしてきました。「自然観察路コンクール」は1984年から実施しています。2023年度には通算40回目のコンクール開催となりました。

2024年度も助成申請をお待ちしています！

応募の締め切り 2024年5月7日(火)

2024年度の活動・研究助成の申請は2024年3月1日より受付を開始いたします。応募要項をご希望の方は、ハガキまたはファックスに住所・氏名・電話番号・研究あるいは活動助成の別を明記の上、下記宛てにご請求ください。また、一般財団法人自然環境研究センターのウェブページ(<http://www.jwrc.or.jp/>)からも当該文書をダウンロードすることができます。

〒130-8606
東京都墨田区江東橋三丁目3番7号 江東橋ビル
(一財)自然環境研究センター内
公益信託富士フィルム・グリーンファンド事務局
TEL. 03-6659-6310(平日10:00~17:00)
FAX. 03-6659-6320



私たちちは、近年減少傾向にある野生
送粉者の保全のために都市緑地をボリ
ネーターガーデンとして有効活用する
ための研究をしています。野生送粉者
の保全は、野生植物種の個体群の維持
から農業生産での送粉者利用に至るま
で、送粉サービスを介して私たちの生
活にも関わる実は身近な環境問題の一
つです。特に、都市化は野生送粉者の
減少の主要因であることからこそ、都
市緑地にボリネーターガーデンを創出
することは、人間活動により消失した
自然環境の機能を都市域にて代償させ
るグリーンインフラとしての有益な価
値を持ちます。

私たちは、
都市に「緑の
島」として存
在する皇居域
や国立科学博
物館附属自然





：トラップ設置の様子（自然教育園）



：皇居域や自然教育園における採集の様子

Achievements and next step

- 助成を受けていちばん進展があつたこと：今回の助成により、今までは断念せざるを得なかつたDNA分析手法を導入できたことが大きな進展です。
 - 具体的な今後の目標：実験系の一部では苦戦している部分を解消して、普及啓発に向けた学会発表を実施することが今後の目標です。

教育園において ホリネーターカーテンの創出に有益な条件を模索するため、送粉昆虫（特にハナアブ類）の体表の付着花粉等のDNAを解析し、約200個体のハナアブから100種を超える餌資源植物の存在を明らかにしました。生物保全や送粉サービスの抱える問題の解決に、多くの人々にとって最も身近な都市緑地を有効活用できるため、社会実装性が高く普及啓発のしやすい内容です。身近な都市の自然からネイチャーポジティブへ貢献するための第一歩になるように、研究を進めさせていただいきます。



Nature Positive

ネイチャー・ポジティブ



2023年度の助成先をご紹介します。

■緑の保全と活用の研究助成

大雪山国立公園の利用者とエゾナキウサギの良好な関係の構築のための自然・社会科学的研究

渡辺悌二（北海道大学大学院地球環境科学研究院） 北海道

愛らしさで人気の高い希少種ナキウサギは、公園利用者からのストレスに悩まされているのだろうか。公園利用者への聞き取りと自動撮影カメラの映像の解析からナキウサギの行動の変化を分析し、公園利用者との良好な関係を築くことを目指した提言を行う。



調査の様子

■緑の保全と活用の研究助成

山陰地方と北陸地方のミナミアカヒレタビラとヤリタナゴの分布および地域固有性の調査

野口亮太（NPO 法人流域環境保全ネットワーク） 三重県

ミナミアカヒレタビラとヤリタナゴは日本の様々な地域で国内外来種として確認されており、移入先での同種の地域固有の遺伝子のかく乱への影響が懸念されている。この2種の自然分布域のうち未調査の山陰・北陸地方について、生息状況及び遺伝的かく乱や、地域固有性の実態を解明する。



ミナミアカヒレタビラ

■緑の保全と活用の研究助成

利根川沿いに生息する生物は交雑によって多様化しているか？

石井康人（東北大大学理学部） 宮城県

過去に流域を大きく変えてきた利根川が、その流域の生物の種分化に及ぼす影響について、陸貝のミスジマイマイとヒタチマイマイをモデルとして、両種とその交雑集団を遺伝的・形態的に解析することで利根川の流路変化による多様性形成を実証し、流域の生物多様性の適切な評価の確立を目指す。



調査の様子

■緑の保全と活用の研究助成

環境保全機能と集落の自治機能を損なわない小規模集落水道の存続条件

野田岳仁（法政大学現代福祉学部） 東京都

日本で200万人が使用する、小規模集落水道。その存続と水源林の管理を通じた里山の生態系保全の意義について、福島、新潟、山梨各県の集落への聞き取り調査から明らかにし、環境保全機能および集落の自治機能を損なわない小規模集落水道の存続可能な政策を提言する。



小規模集落水道の水汲み場

■緑とふれあいの活動助成

猪名川河川域の植物調査（絶滅危惧植物の保全・増殖および昆虫が利用する植物のフェノロジーの製作）

大阪府立園芸高等学校 ハニービーサインスクラブ 大阪府池田市

クラブ活動で養蜂を行いながら、セイヨウミツバチとその利用植物について継続的に調査を行っている。ミツバチが巣に持ち帰る花粉を分析することで蜜源植物を特定し、蜜源植物の開花フェノロジーのカレンダー作成を目指す。蜜源植物として絶滅危惧種の栽培にも取り組んでいる。



保護増殖植物(カワラサイコ)の播種

■緑とふれあいの活動助成

VRも活用した石狩川流域の湿地環境保全・利活用の普及活動

石狩川流域湿地・水辺・海岸ネットワーク 北海道札幌市

石狩川流域に点在する湿地の保全を通じて地域を活性化し、人と自然が共生する社会を目指す団体。生物調査や地域文化の体験会など様々な活動を通じて湿地の魅力や大切さを伝えている。新規にVR空間に各地の湿地をつくり、人が集まるプラットフォームとして活用する予定。



湿地 VR 体験会

■緑の保全と活用の研究助成

越冬環境の泥と水の深さがサドガエル幼生の越冬成功と翌春以降の成長・発生に与える影響：

江やビオトープを重視した保全対策の改善に向けて
高津邦夫（新潟大学佐渡自然共生科学センター） 新潟県

2012年に新種とされたサドガエルは、幼生（オタマジャクシ）が泥の中で越冬する性質をもつ。市民にとっても身近かつ希少な佐渡の固有種として、保全のために幼生が越冬する環境づくりが行われているが、さらなる保全対策の強化に向けて、保全の力となる越冬の好条件を探る。



サドガエルのオタマジャクシ

■緑とふれあいの活動助成

「森の忍者・ムササビ」観察会及び生息調査

矢部郷自然観察会 熊本県山都町

「自然を知り、自然を学び、大切な自然を未来に残す」ことを目的として、地域住民を対象に野生生物の調査や観察会などの活動を37年間続けている団体。熊本県の準絶滅危惧種ムササビの生息状況の解明と、観察会を通じた環境保全への理解向上を目指す。



観察会

■緑とふれあいの活動助成

「根尾川むいむいの森」ユースセンターの子ども自身による自然学校・拠点整備

一般社団法人よだか総合研究所 岐阜県本巣市

保護者や地域住民の協力を受けつつ子ども自身が運営と拠点づくり、管理を行うことで、里山文化の継承の機会と場を提供する。子どもたちが身近な自然の中で自主的に活動をすることを支援して、子どもたちの居場所の創造と実践的な自然環境保全を実現することを目指す。



子ども自身の自主的な活動

■緑とふれあいの活動助成

佐賀の田舎から心を育み、生きる力を養う自然体験活動を届ける

秀島彩女 佐賀県唐津市

自宅の庭を解放して自然体験や農業体験のイベントを行い、体験や人との交流を通じて「心の豊かさ」や「生きる力」を育む機会を創出する。助成を受けて、月1回の体験会だけでなく、サマースクールやキャンプなどのお泊りイベントを充実させていく予定。



そーめん流しのイベント

■緑とふれあいの活動助成

子どもたちの日常の中に自然を取り入れるきっかけを与える事業

一般社団法人 Camp 福岡県朝倉市

自然とふれ合い自然から学ぶ機会を提供することで、地域の自然の現状を知ってもらい、「豊かな自然を未来につなぐ」「自然とのかかわり方を考えるきっかけを与える」ことを目的として活動する団体。災害にあつた川、山での防災教育を含めた学びと遊びを通じて、災害を乗り越える力を養うことを目指す。



9月に実施した「川を知る、川で遊ぶ」

2023年度の助成先をご紹介します。

第40回を迎えた2023年度のFGF助成は、3月から公募を開始し、5月8日（月）に募集を締め切りました。応募件数は、活動助成6件、研究助成5件の計11件が助成対象に決定されました。運営委員会での審査の結果、本年度は活動助成33件、研究助成に26件、合計59件となりました。今回、助成に選ばれた方々、惜しくも選ばれなかつた方々に、この場をお借りして御礼を申し上げます。来年度も自然環境の保全のために活躍している多くの方々からのご応募をお待ちしています。



助成応募内訳

活動助成応募内訳

森林を場とした活動	14件
里山を場とした活動	6件
田畠・農村環境を場とした活動	2件
河川・海域・池・沼を場とした活動	
その他	9件
その他	2件

研究助成応募内訳

動植物（地域生態系）の基礎的な調査・研究	21件
緑地の効用・保全に関する研究	3件
その他	2件

● 1984年度

- 1 オオムラサキの森づくり
●嵐山町立菅谷小学校PTA
●埼玉県 ● 600万円
- 2 自然を守り生かす青少年の森づくり
●黒石市青少年の森をつくる会
●青森県 ● 600万円
- 3 社寺林の保全・管理に関する法的研究
●野村好弘（東京都立大学）
●400万円
- 4 リスのいる森づくり
●高橋啓二（千葉大学）
●千葉県 ● 398.5万円

● 1985年度

- 5 子供たちのフォレスト・ファーミング
●興禅寺
●長野県 ● 578.1万円
- 6 屋敷林の保全と活用
●今米緑地保全会・川中熙子
●大阪府 ● 360万円
- 7 明神地域の保全・活用に関する生態学的研究
●牧野徳太郎（財）みどりのまちかながわ県民会議・足柄上地区推進協議会
●神奈川県 ● 400万円
- 8 知床の大型野生動物の生態と自然教育への活用に関する研究
●中川元（斜里町立知床博物館）
●北海道 ● 400万円

● 1986年度

- 9 自然と芸術の森づくり
●創造の森子ども美術館
●大阪府 ● 500万円
- 10 ドンブリ一粒運動による広葉樹林の育成
●ドンブリの会
●岐阜県 ● 591万円
- 11 歴史的居住環境の保存と利活用に関する研究
●多田壽夫（観光資源保護財団）
●長野県 ● 380万円
- 12 伝統的な人里環境の生態学的研究
●田口正男（神奈川県立橋本高校）
●神奈川県 ● 132.3万円

● 1987年度

- 13 ギフチョウが舞い、サギ草の咲き乱れるコウヤマキの森づくり
●自然と趣味に生きる会
●島根県 ● 400万円
- 14 自然史博物館「嵐山自然と文化の森」の保全と活用
●旭川自然史懇話会
●北海道 ● 593万円
- 15 自然の宝庫・桶ヶ谷沼を生かしたまちづくり
●桶ヶ谷沼を考える会
●静岡県 ● 200万円
- 16 飛騨山脈の自然生態調査と一般登山活動での自然学習のあり方
●小野木三郎（高山短期大学・飛騨自然博物館）
●岐阜県 ● 326.6万円
- 17 緑と人間の親和性を高める環境絵本づくり
●延藤安弘（熊本大学）
●397.5万円

● 1988年度

- 18 「いおりの里」生活原体験及び自然観察会
●太平宿を残す会
●長野県 ● 500万円
- 19 雜木山から生活文化を問い合わせ直す
●仙の会
●滋賀県 ● 500万円
- 20 野外博物館「山の子村」の保全と活用
●内山慎三
●長野県 ● 200万円
- 21 「市民による雑木林の保全・管理」のテキストづくり
●重松敏則（大阪府立大学）
●大阪府 ● 400万円
- 22 神社の社叢における神樹の調査研究
●谷川健一（日本地名研究所）
●神奈川県 ● 400万円

● 1989年度

- 23 寒風山「風雪の森」づくり運動
●「風雪の森」をつくる運動実行委員会
●秋田県 ● 400万円
- 24 花いっぱい鳥いっぱいの森づくり
●エコシステム
●熊本県 ● 400万円
- 25 荒廃したサンゴ礁を復元するサンゴ移植活動
●八重山サンゴ礁保全協議会
●沖縄県 ● 400万円
- 26 トロッコ道における霧島連山百年の変遷について
●川平和美（鹿児島大学）
●鹿児島県 ● 130万円
- 27 裏磐梯湖沼群の生態と自然保護教育への活用に関する研究
●星一彰（福島県立福島東高校）
●福島県 ● 400万円

● 1990年度

- 28 「望ヶ原天然林」を生かした自然に親しむ活動
●利賀の自然を守る会
●富山県 ● 400万円
- 29 見沼カムバップるさとプラン
●（財）埼玉県野鳥の会
●埼玉県 ● 400万円
- 30 「帯広の森」野生動物とのふれあいの場づくり
●エゾリスの会
●北海道 ● 400万円

● 1991年度

- 31 イトウのすめる森づくり
●小野有五（北海道の森と川を語る会）
●北海道 ● 400万円
- 32 ホタルの生息する人里の水系環境保全と人間活動の調和
●大場信義（横須賀市自然博物館）
●神奈川県 ● 400万円
- 33 奥球磨山地に「人間の森」をつくる
●人吉・球磨自然保護協会
●熊本県 ● 280万円
- 34 ネイチャートレイルの設置活動から村の自然のサンクチュアリー化運動へ
●（財）育てる会
●長野県 ● 700万円
- 35 谷津干潟保全対策の研究
●石川敏雄（千葉大学）
●千葉県 ● 382万円
- 36 糸島地方の自然解明とその保護及び一般への啓蒙
●若宮義次（糸島自然研究会）
●福岡県 ● 400万円

● 1992年度

- 37 農山村エコミュージアムづくりによる都市・農山村の交流
●自然文化誌研究会
●東京都 ● 600万円
- 38 紀伊半島沿岸におけるウミガメの調査及び保護活動
●紀伊半島ウミガメ情報交換会
●和歌山県 ● 600万円
- 39 御前・駿河岳ブナ・シオジ林の自然とその保全について
●小野孝（郷土日田の自然調査会）
●大分県 ● 392.5万円
- 40 溪水に生息する生物の生態研究
●森誠一（京都大学）
●岐阜県 ● 400万円

● 1993年度

- 41 森は海の恋人
●牡蠣の森を慕う会
●宮城県 ● 520万円
- 42 森・人・生きもの・地球を緑の輪で結ぶ
京都大原野の体験森づくり
●環境市民基金設立準備会
●京都府 ● 515万円
- 43 坪井川遊水池における生態系の復元
●甲守崇（坪井川遊水池研究会）
●熊本県 ● 300万円
- 44 十津川村地方における伝統的養蜂の調査研究
●野村幸徳（島根県私立江の川高校）
●島根県 ● 104.4万円
- 45 宮古諸島におけるサシバと緑と人間の親和性を高めるための基礎研究
●久貝勝盛（沖縄県立博物館）
●沖縄県 ● 293万円

● 1994年度

- 46 ジュンサイ再生保全活動による緑と生きものの復元
●喜来池にジュンサイを残そう市民の会
●千葉県 ● 300万円
- 47 子供達と水生生物との共生をめざす湿地「たんぼ水族館」の保全と利用に関する研究
●（財）鹿児島県立水族館
●鹿児島県 ● 400万円
- 48 あなたにも出来る保全生物学「市民による絶滅危惧植物の保全研究のマニュアルづくり」
●井上健（長野県植物研究会）
●長野県 ● 300万円

● 1995年度

- 49 筑波山に炭焼きの里づくり
●自然生クラブ
●茨城県 ● 260万円
- 50 コアジサシの生態調査及び保護活動と水辺環境の復元
●水鳥研究会
●千葉県 ● 170万円
- 51 生活光とホタルの共存について
●中川七三郎（新潟県ホタルの会）
●新潟県 ● 130万円
- 52 オオサンショウウオの生息状況調査
●大沼弘一
●兵庫県 ● 170万円

● 1996年度

- 53 市民参加型緑地保全活動の実践及び推進
●緑地環境保全フォーラム実行委員会
●神奈川県 ● 240万円
- 54 「新タンボボ地図」の作成とその環境教育への応用
●渡邊幹男（愛知教育大学）
●愛知県 ● 180万円
- 55 高知県宇佐竜蟹ヶ池における水温植物の保全に関する生態学的研究
●石川慎吾（高知大学）
●高知県 ● 230万円
- 56 学校緑地にビオトープを導入するための基礎的研究
●中村和幸（大阪府立城山高校）
●大阪府 ● 65万円

● 1997年度

- 57 里道の修復による赤目の里山の保全
●赤目の里山を育てる会
●三重県 ● 137万円
- 58 手づくりの湿地や水辺の復元活動
●遠州自然研究会
●静岡県 ● 130万円
- 59 多摩ニュータウン19街区の農業公園化構想
●由木の農業と自然を育てる会
●東京都 ● 210万円
- 60 学校緑地にビオトープを導入するための基礎研究
●中村和幸（大阪府立城山高校）
●大阪府 ● 65万円

● 1998年度

- 61 「体験の森づくり」活動
●ものべ体験の森クラブ
●高知県 ● 186万円
- 62 草原・里山の維持管理技術の啓発と実践による半自然植生の保全
●緑と水の連絡会議
●島根県 ● 175万円
- 63 森林活動による精神発達障害者の療育効果に関する研究
●上原巖（精神発達障害者更正施設「親愛の里松川」）
●長野県 ● 126.6万円
- 64 小動物の利用環境として都市残存林を評価する手法の研究と生態ガイドブックの作成
●渡辺修（さっぽろ自然調査館）
●北海道 ● 159万円

● 1999年度

- 65 農業体験教室「草の根農業小学校」の運営
●農業小学校をつくる会
●滋賀県 ● 234.6万円
- 66 絶滅危惧植物ガシマコの保全生物学的研究
●上原一（千葉大学）
●千葉県 ● 182万円
- 67 ニホンザリガニの分布・生息環境とその保全に関する研究
●斎藤和範（旭川大学）
●北海道 ● 146.3万円

● 2000年度

- 68 野尻湖における水草帯の復元と環境教育
●野尻湖水草復元研究会
●長野県 ● 244.2万円
- 69 スノーケリングによる藻場・海中林及びアマモ場を主体とした海中自然観察会
●南伊豆海洋生物研究会
●静岡県 ● 157万円
- 70 豊かな里山を次世代に残すために
●宮原町里山クラブどんごろす
●熊本県 ● 132万円

● 2001年度

- 71 大町グラウンドワークによる上原ビオトープ創出事業
●ワッパランドの会
●長野県 ● 200万円
- 72 えひめあやめ指定地その周辺里山整備計画
●西浦えひめあやめ保存会 林清利
●山口県 ● 149.6万円
- 73 市街地緑地の種の保存と供給機能の研究
●田口正男（神奈川県立弥栄東高校）
●神奈川県 ● 107万円

● 2002年度

- 74 有明海および島原湾の底生生物データベース作成
●秋元和貴（熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター）
●熊本県 ● 290万円
- 75 多摩川流域河床の「地層の野外観察」用の観察路と支援システムの構築
●松川正樹（東京学芸大学）
●東京都 ● 200万円

● 2003年度

- 76 林業スクール
●森づくり集団「里ネット」
●埼玉県 ● 82.2万円
- 77 「やまんばの森」の「春の女神」保護活動
●NPO法人やまんばの会
●滋賀県 ● 118.3万円
- 78 東京都府中市立 南白糸台小学校「水辺の学校プロジェクト」
●府中市立南白糸台小学校PTA
●東京都 ● 212.2万円
- 79 沖縄県、慶良間諸島にみられる貴重な森林生態系の持続的保全と活用
●遠藤晃（科学技術振興事業団）
●沖縄県 ● 237万円

● 2004年度

- 80 子供達とヤマネの巣箱製作、設置、生態と生息する森林生態系の観察と記録
●芸北町自然保護レンジャー
●広島県 ● 184万円
- 81 霧多布湿原ファンづくりのための木道修復活動
●特定非営利活動法人霧多布湿原トラスト
●北海道 ● 100万円
- 82 金沢市とその近郊の農業用水の生物多様性維持機能を高めるための基礎的研究
●上田哲行（石川県農業短期大学）
●石川県 ● 168万円
- 83 桂川・相模川水系におけるシジミ類の生息調査及び在来種マジミの保存に向けた繁殖実験
●園原哲司（向上高等学校）
●神奈川県 ● 193万円

● 2005年度

- 84 研究者と市民の協働による里山の生物多様性保全のための活動及び調査
●金沢大学「角間の里山自然学校」
●石川県 ● 156.8万円
- 85 田舎暮らしグラウンドワーク・ウスイロヒヨウモンモドキの舞う蒜山高原自然再生事業
●真庭遺産研究会
●岡山県 ● 170万円
- 86 瀬戸内海の干潟における貝類を中心とした環境指標生物の探求
●森千恵（岡山大学大学院）
●岡山県 ● 137.3万円
- 87 環境教育機能を備えた学校林の生態管理システムの構築
●林田光祐（山形大学農学部）
●山形県 ● 135.7万円



FGF助成一覧

1984年～2023年までの220件のFGF助成先をご紹介します。

※団体名・所属名等は助成当時のものです。

●2008年度

- 100 筑後川の支川・小石原川におけるアカザの生態
●鬼倉徳雄（九州大学大学院）
●福岡県 ●98.7万円
- 101 九重タデ原・坊ガツル湿原における火入れによる土壤環境変更の実態とその効果の検証
●伊豫部勉（北九州市立大学）
●福岡県 ●79.5万円
- 102 休耕田を利用した湿生植物群落の回復
●高野瀬洋一郎（新潟大学越域研究機構）
●新潟県 ●141万円

●2009年度

- 103 遊んで学ぶ里山体験
●ボランティアグループ「未来の家」
●兵庫県 ●119.9万円
- 104 栗山鳥の下自然公園・ムクロジの里ステップアップ事業
●特定非営利活動法人四街道メダカの会
●千葉県 ●186万円
- 105 カンキヨウカジカの生態研究とその保護対策について
●利賀飛翔の会（利賀河魚の会）
●富山県 ●63万円

- 106 奄美大島湯湾岳の野生絶滅植物リュウキュウアセビの復元に向けた遺伝解析
●瀬戸口浩彰（京都大学大学院）
●京都府 ●118万円
- 107 秋吉台の絶滅危惧植物の保護に向けたゾーニングのための基礎研究
●荒木陽子（秋吉台科学博物館）
●山口県 ●61万円

- 108 中央アルプス山麓の里山に生息する絶滅危惧種ミヤマジジミヒメジジミの保全に関する研究
●中村寛志（信州大学農学部付属アルプス圏フィールド科学教育研究センター）●長野県 ●147万円
- 109 京都・平安神宮内の池に生息するイチモントナゴの保護
●細谷和海（近畿大学農学部）
●奈良県 ●150万円

●2010年度

- 110 参加型フットパス・ツーリズムの振興による棚田・里山環境の保全とその活用
●NPO法人蕨野の棚田を守ろう会
●佐賀県 ●280.4万円
- 111 生駒市西畠地区の棚田・里山の再生と創造
●いこま棚田クラブ
●奈良県 ●54万円
- 112 スナメリから見つめる瀬戸内海
●牛窓のスナメリを見守る会
●岡山県 ●94.4万円
- 113 福岡市室見川におけるシロウオの産卵環境の解明と住民参加型の保全活動について
●伊豫岡宏樹（福岡大学大学院）
●福岡県 ●149.2万円
- 114 琵琶湖固有種とされるビワマスにおける遺伝的多様性の変化
●桑原雅之（滋賀県立琵琶湖博物館）
●滋賀県 ●135.3万円
- 115 昆虫類を指標とした都市近郊の里山の生物多様性評価手法に関する研究
●小池伸介（東京農工大学大学院）
●東京都 ●104.3万円

●2011年度

- 116 高校生・若者による埼玉県小川町での里山づくりと環境教育活動
●NPO法人共存の森ネットワーク
●東京都 ●145.2万円
- 117 MY大嵐山方式（会員ボランティア）による大嵐山の自然環境保全運動の仕組みづくり
●NPO法人白山しらみね自然学校
●石川県 ●66.8万円
- 118 牛耕復活による里山のたたずまい再生
●NPO法人環境の島研究室
●新潟県 ●117万円
- 119 「干潟生物の市民調査」手法による八代海のペントス相調査
●佐々木美貴（NPO法人日本国際湿地保全連合）
●東京都 ●175万円

- 120 東北太平洋沖地震津波による蒲生干潟周辺域の被害現況調査と海浜性生物の再定着プロセスの解明
●長島康雄（仙台市科学館）
●宮城県 ●278.6万円

●2012年度

- 121 大人も子どもも谷戸で楽しく自然体験
●津久井の自然を守る会
●神奈川県 ●35万円
- 122 伝統的循環型農業の復活と自然素材を活かした古民家再生によるツシマヤマネコと共生する村づくり
●ツシマヤマネコ共生村協議会
●長崎県 ●160万円
- 123 多摩川における外来魚調査及び外来種問題啓発活動
●NPO法人おさかなポストの会
●神奈川県 ●90万円

- 124 ラムサール条約登録湿地・伊豆沼・内沼の食物網における放射性物質の濃縮の評価
●嶋田哲郎（財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）
●宮城県 ●120万円

- 125 大分県指定天然記念物カマエカラの繁殖生態と保全に関する研究
●小林峻（琉球大学人間理工学研究科）
●沖縄県 ●110万円

- 126 野生鳥獣の放射能汚染が狩猟者の捕獲活動に与える影響
●上田剛平（兵庫県但馬県民局朝来農林振興事務所）
●兵庫県 ●185万円

●2013年度

- 127 3次元GISモデルを用いた八王子淀山里山保全地域の環境モニタリング活動
●NPO法人自然環境アカデミー
●東京都 ●150万円

- 128 日本に留学している大学生の中山間地域における日本文化体験プログラム
●早稲田大学社会医学研究室
●埼玉県 ●40万円

- 129 来浜者の踏圧がウミガメのふ化に及ぼす影響についての調査
●NPO法人屋久島うみがめ会
●鹿児島県 ●85万円

130 「家族で学ぼう 福島環境教育エコツアーア」開催事業
●NPOアジア職業エコガイド・ウォーキング指導者協会
●福島県 ●58万円

131 石川県沿岸に生息する絶滅危惧種イカリモンハンミョウの生態解明と保全対策の検討
●柳井清治（石川県立大学環境科学科）
●石川県 ●103万円

132 北海道平野部における野生生物による防風林の利用状況に関する研究
●日黒文子（環境NGOカピウ）
●北海道 ●53.8万円

133 身近な自然体験の教育的効果の検証～多摩市内の里山環境を生かした教育実践の総合的調査～
●野田恵（東京農工大学農学部）
●東京都 ●110万円

134 「震災後の増田川から持続可能な地域社会へのアプローチ」～丘陵地から津波にのみ込まれた河口までの身近な自然を見つめ直す～
●大橋信彦
●宮城県 ●80万円

135 小笠原諸島、西島の森林再生
●NPO法人小笠原野生生物研究会
●東京都 ●100万円

136 愛子子どもの森の保全とふれあい活動
●森の応援団愛子ハグリッズ
●宮城県 ●30万円

137 ロープ魚礁とアマモによる生態系の創出活動
●NPO法人庄内浜を考える会
●山形県 ●45万円

138 鹿児島県出水市における保護ツルの臨床検査
－野生復帰羽数の増加を目指した臨床研究－
●松鶴 彩（鹿児島大学 共同獣医学部）
●鹿児島県 ●85万円

139 琉球列島中部域における造礁サンゴの新規加入・幼生の種多様性と遺伝学的集団構造に関する研究
●中村雅子（沖縄科学技術大学院大学）
●沖縄県 ●200万円

140 奄美諸島における希少野生植物の繁殖に関する生物相の基礎的研究
●前田芳之
●鹿児島県 ●190万円

141 東日本大震災の津波被災地における地域農業資源の保全に関する実証研究
●鏡山恵理子（東北大学大学院）
●宮城県 ●190万円

142 「多摩川のケヤキと共生する会」青梅市多摩川流域のケヤキの食葉性害虫からの救済と緑陰の維持
●たまあじさいの会
●東京都 ●120万円

143 「松代おやっこ村」魅力アッププラン
●松代おやっこ村
●新潟県 ●140万円

144 奈良県レッドデータブックに記載されている自生山野草の保全と管理
●里山の山野草を守る会
●奈良県 ●55万円

145 野焼きボランティアのための難燃性ゼッケン製作
●全国草原再生ネットワーク
●島根県 ●30万円

146 市民調査による岩手県の植物相の研究
●鈴木まほろ（岩手県立博物館）
●岩手県 ●95万円

147 希少動物アマミノクロウサギ保全に向けた分子遺伝学的アプローチ
●溝口 康（明治大学農学部）●鹿児島県 ●160万円

148 対馬に生息する希少植物種を保全するための植生回復および栽培試験に関する調査研究
●東 浩司（京都大学大学院理学研究科）
●長崎県 ●110万円

149 サクラにおける効率的な挿し木繁殖法の確立およびサクラ遺伝資源の保存・管理に関する基礎研究
●田中 秀幸（島根大学）
●島根県 ●130万円

●2016年度

150 京都府立須知高等学校の「ウィードの森」の生態調査と里山の整備
●京都府立須知高等学校 PTA
●京都府 ●170万円

151 名勝・重要文化的景観「おばすて（田毎の月）」棚田の保全活動
●田毎の月棚田保存同好会
●長野県 ●90万円

152 はぐくむ、つなげる、つたえる、まもる、谷津田の生きもののいのちのにぎわいとつながり
●特定非営利活動法人ちば環境情報センター
●千葉県 ●90万円

153 大淀川の絶滅危惧植物「タコノアシ」の保全活動
●NPO法人大淀川流域ネットワーク
●宮崎県 ●34万円

154 ドローンとVR技術を活用した里山ランドスケープのモニタリング手法の開発
●一ノ瀬友博（慶應義塾大学）
●神奈川県 ●110万円

155 GPS首輪を用いた積雪地域におけるイノシシの行動特性
●山本麻希（NPO法人新潟ワイドライフレリサーチ）
●新潟県 ●110万円

156 遺伝情報を用いた絶滅危惧植物ヤシシャジンの野生集団の再生
●渡邊園子（広島大学大学院）
●広島県 ●100万円

157 外来アライグマの営巣特性調査と対策コスト削減のための巣箱型ワナの開発
●池田透（北海道大学大学院）
●北海道 ●140万円

158 女川学びの森の整備と利活用促進
●NPO法人女川ネイチャーガイド協会
●宮城県 ●85万円

159 里山を活かした子どもの遊び場と大人のコミュニティスペース
●土沢森あそびの会
●神奈川県 ●60万円

160 子どもたちによる里山再生プロジェクト
●南アルプス子どもの村中学校
●山梨県 ●100万円

●2017年度

161 豊田市の中山間地を舞台とした多世代参加型の自然とのふれあい活動
●豊田高専ドミタウン実行委員会
●愛知県 ●40万円

162 東京藝術大学上野キャンパスにおける武蔵野の植生再生と維持の活動
●東京藝術大学キャンバスグランドデザイン室
●東京都 ●160万円

163 ニホンイシガメの保全を目的とした生活史の解明
●小賀野 大一（東邦大学理学部）
●千葉県 ●165万円

164 知床国立公園とその周辺におけるヒグマと人の共存の道を探る調査研究
●下鶴 倫人（北海道大学大学院）
●北海道 ●145万円

165 石狩海岸における希少アリ類・海浜植物・外来カエル類の相互関係に関する研究
●吉田 剛司（酪農学園大学）
●北海道 ●95万円



FGF助成一覧

1984年～2023年までの220件のFGF助成先をご紹介します。

*団体名・所属名等は助成当時のものです。

●2018年度



大人も子どもも楽しく安全に自然体験が楽しめるガイアの森づくり
●NPO法人ガイア自然学校とやま
●富山県
●150万円



みちのく潮風トレイル利用促進のための歩行データの調査・研究
●特定非営利活動法人みちのくトレーリングクラブ
●宮城県
●200万円



豊北の水と生態系の研究・下関北高協同～栗野川流域図作成を原点に～
●北高夢ロード実行委員会
●山口県
●50万円



海岸の自然観察を通じてマイクロプラスチックの危険性を学ぶ
●特定非営利活動法人サンクチュアリエヌピーオー
●静岡県
●60万円



伊豆諸島青ヶ島の絶滅危惧種が生育する噴気孔原群落の保全にむけた基礎研究
●上條隆志（筑波大学）
●東京都
●50万円



天然記念物ミヤコタナゴの再導入等の候補地の探索および生息域の再生手法の検討
●鈴木規慈（三重大学大学院）
●千葉県
●150万円



網走市こまば木のひろばにおけるエゾモモンガの生態調査
●後藤ひとみ（東京農業大学）
●北海道
●30万円



巨樹・名木とそれを取り巻く地域社会における生態系サービス及びEco-DRR機能の定量的評価
●宇野宏司（神戸市立工業高等専門学校）
●兵庫県
●70万円



岩手県の砂浜植生再生活動を通して環境教育プログラムの開発
●島田直明（岩手県立大学）
●岩手県
●90万円

●2019年度



浅間山系におけるミヤマシロチョウの保全活動と生態調査
●浅間山系ミヤマシロチョウの会
●長野県
●83万円



男鹿の自然にふれあい生きる力を身につけよう！多世代参加の自然体験プロジェクト
●子育てカフェ・にこりーフ
●秋田県
●42.3万円



多摩丘陵に残された里山と古街道の歴史環境遺産を保護し、自然景観の維持と活用に貢献する
●歴史古街道団
●東京都
●120万円



球磨郡相良村の湿地再生及びそれに係わる地域連携の構築
●球磨湿地研究会
●熊本県
●94.6万円



七尾湾の環境改善と環境保全型農業の実現に向けた海藻草の回収活動
●能登の森里海研究会
●石川県
●38万円



天然記念物コクガンの捕獲およびGPS送信機装着事業
●鈴木卓也（南三陸ネイチャーセンター友の会）
●宮城県
●130.8万円



内部標識を用いた絶滅危惧種ギバチ（*Pseudobagrus tokiensis*）の生活史調査
●早川拓真（宇都宮大学大学院）
●栃木県
●50万円



広域分布型絶滅危惧植物の域外保全策確立に関する研究：ラン科カンランを例にして
●長澤淳一（京都府立大学京都地域未来創造センター）
●京都府
●146.3万円



自然豊かな河川と水害をもたらす河川に関する伝統知と環境・防災教育に関する実践研究
●適合知帆（京都大学大学院）
●和歌山县
●145万円

●2020年度



動植物とその生息環境の保全と安全登山のために
●雷神山を愛する会
●群馬県
●42.4万円



「法」の字プロジェクト～低層植物の保護・再生による京都五山送り火の山の保全、そして、送り火行事の保存継承～
●公益財団法人松ヶ崎立正会
●京都府
●137.2万円



絶滅危惧II類「ヤマグチサンショウウオ」の棲息環境の保護・保存と小学児童の環境教育
●小串ヤマグチサンショウウオ保護・保存会
●山口県
●26万円



分布北限域におけるエダミドリイシの有性生殖法を用いた養殖・移植方法の確立に向けた活動
●NPO海辺を考えるしおさい21
●静岡県
●112.8万円



外来種であるキノボリトカゲのテリトリーを用いた駆除技術の開発
●能登の森里海（宮崎大学農学部）
●宮崎県
●100.2万円



市民科学手法を活用した外来魚アメリカナマスの侵入前線検出
●吉田誠（国立環境研究所生物・生態系環境研究センター）
●滋賀県
●100万円



西表島固有種ショキタナガエビの絶滅回避に必要な保全遺伝学的研究
●今井秀行（琉球大学理学部）
●沖縄県
●144万円

●2021年度



愛宕山でっぺんの森の「生態系管理」「環境教育拠点化」事業
●特例認定NPO法人愛宕山でっぺんの森を守る会
●長野県
●150万円



カヤネズミヒナカマキリを含む地域の生物多様性保全プロジェクトin竹尾緑地2021
●環境ネットワーク「虹」
●福岡県
●45万円



生物多様性保存型里山里山ビオトープの造成とその活用に関する事業
●NPO法人自然環境ネットワーク・射水市ビオトープ協会
●富山県
●95万円



Lady go! 女性が中心となり、女性が育む「ガイアの森」里山再生モデル事業
●NPO法人どんぐり1000年の森をつくる会
●静岡県
●65万円



やながわ有明海水族館を活用した幅広い世代への体験型環境教育の実施
●NPO法人SPERA森里海・時代を拓く
●福岡県
●65万円



ホトケドジョウ類の進化史の解明と保護施策の確立～ホトケドジョウの醸成～
●吉崎淳一（山梨大学教育学部）
●山梨県
●120万円



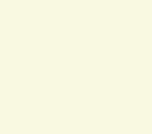
七北田低地（仙台・多賀城）へのシジュウカラガラゴ復元に向けた基礎研究
●吳田正行（日本雁を保護する会）
●宮城県
●100万円



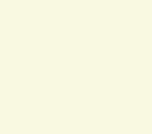
三宅島におけるハチジョウスキの特徴～自然と文化をつなぐ茅葺の復活をめざして～
●黒田正生（筑波大学芸術系）
●東京都
●120万円



奄美群島における漂着生物学研究推進のための基礎的研究
●西村千尋（歩健学研究室）
●鹿児島県
●90万円



広島県における空気中の環境DNAを指標にした森林野生哺乳動物の生息モニタリングとその応用に関する研究
●西堀正英（広島大学大学院）
●広島県
●120万円



東京都域の都市緑地を活用したボリネーターガーデンの創出と技術的指針の検討
●堀内勇寿（国立科学博物館筑波実験植物園）
●東京都
●79万円

●2022年度



福島県飯舘村・耕作放棄地の土地活用に向けた漆の試験栽培、苗木生育のための圃場整備活動
●特定非営利活動法人ウルシネクスト
●福島県
●48.2万円



炭素循環型農業による生きものの保全・再生の拠点づくり
●熊野の森もろおかスタイル
●神奈川県
●69.5万円



埼玉西部を流れる高麗川並びにその流域の水生生物の調査並びに川での子供たちへの環境教育
●奥武蔵ビースラボ
●埼玉県
●25.8万円



自然界と共に存し、自然界を保全していく町づくり活動
●小泉ユニアーサルビーチユニット
●宮城県
●55.1万円



淀川のワンドに生息するイタセンパラをはじめとした在来魚類の保全活動と地域に根ざした環境教育
●城北水辺クラブ
●大阪府
●74.2万円



耳石微量元素分析を用いたニホンウナギのハビタット間移動と堰との関係の解明
●久米学（京都大学フィールド科学教育研究センター）
●和歌山县
●155万円



ニホンヌッポンとチュウゴクヌッポンの交雑実態の解明ならびに交雑個体の検出法の確立
●桑原紗香（三重大学生物資源学部）
●三重県
●112万円



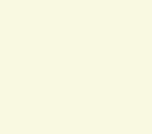
淡路島におけるシロチドリの生息・営巣状況の調査および保全対策の実施と検証
●立田彩菜
●兵庫県
●97.1万円



山陰地方と北陸地方のミナミアカヒレタビラとヤリタナゴの分布および地域固有性の調査
●野口亮太（NPO法人流域環境保全ネットワーク）
●三重県
●45万円



利根川沿いに生息する生物は交雑によって多様化しているか？
●石井康人（東北大学生理学部）
●宮城県
●95万円



環境保全機能と集落の自治機能を損なわない小規模集落水道の存続条件
●野田岳仁（法政大学現代福祉学部）
●東京都
●100万円

●2023年度



「森の忍者・ムササビ」観察会及び生息調査
●矢部郷自然観察会
●熊本県
●20万円



根尾川いむいの森ユースセンターの子ども自身による自然学校・拠点整備
●一般社団法人よだか総合研究所
●岐阜県
●85万円



佐賀の田舎から心を育み、生きる力を養う自然体験活動を届ける
●秀島彩女
●佐賀県
●39万円



子どもたちの日常の中に自然を取り入れるきっかけを与える事業
●一般社団法人Camp
●福岡県
●100万円



猪名川河川域の植物調査（絶滅危惧植物の保全・増殖および昆虫が利用する植物のフェノロジーの製作）
●大阪府立園芸高等学校
●ハービーサイエンスクラブ
●大阪府
●33万円



VRも活用した石狩川流域の湿地環境保全・利活用の普及活動
●石狩川流域湿地・水辺・海岸ネットワーク
●北海道
●100万円



越冬環境の泥と水の深さがサドガエル幼生の越冬成功と翌春以降の成長・発生に与える影響：江やビオトープを重視した保全対策の改善に向けて
●高津邦夫（新潟大学佐渡自然共生科学センター）
●新潟県
●100万円



大雪山国立公園の利用者とエゾナキウサギの良好な関係の構築のための自然・社会科学的研究
●渡辺悌二（北海道大学大学院地球環境科学研究院）
●北海道
●90万円



山陰地方と北陸地方のミナミアカヒレタビラとヤリタナゴの分布および地域固有性の調査
●野口亮太（NPO法人流域環境保全ネットワーク）
●三重県
●45万円



利根川沿いに生息する生物は交雫によって多様化しているか？
●石井康人（東北大学生理学部）
●宮城県
●95万円